彩の国
埼玉県

埼玉県病害虫防除所業務年報
（ 令和７年度 ）

埼玉県病害虫防除所

埼玉県病害虫防除所の沿革

年　月	概　　要
昭和 27 年 7 月	植物防疫法（昭和 25 年 5 月 24 日法律第 151 号）に基づき、「植物防疫施設に関する条例」（昭和 27 年 7 月 18 日条例第 55 号）が公布され、県内 8 か所の地方事務所に、北足立、入間、比企、秩父、児玉、大里、北埼玉、埼葛の各病害虫防除所が設置された。1 防除所当たり 1～2 人の専任技術職員が配置され、所長は地方事務所長が兼務した。
昭和 31 年 8 月	地方事務所が廃止され新たに農林事務所が設置されたことに伴い、各農林事務所に病害虫防除所が併設され、専任職員に加えて 1 防除所当たり 3～7 人の農林事務所兼務職員が配置された。なお、所長は農林事務所長が兼務した。
昭和 53 年 4 月	秩父農林事務所が廃止され秩父農林振興センターが設置されたことに伴い、秩父病害虫防除所は秩父農林振興センターに併設された。
昭和 58 年 4 月	8 か所の病害虫防除所を 1 か所に統合し、熊谷市の農業試験場（現：農業技術研究センター玉井試験場）内に「埼玉県病害虫防除所」が 設置された。各農林事務所及び秩父農林振興センターには、駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 9 年 4 月	川越、東松山、行田の各農林事務所の廃止に伴い、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。その後、農林事務所が順次廃止され、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 17 年 4 月	職員の駐在制が廃止され本所に集約された。なお、兼務職員は引き続き各農林振興センターに配置された。
平成 22 年 4 月	組織改正により、農林総合研究センター水田研究所から肥飼料検査業務が移管された。
平成 27 年 4 月	農林総合研究センター水田農業研究所の廃止に伴い、農業技術研究センター（熊谷市須賀広）に事務所を移転した。
平成 30 年 4 月	農業技術研究センター病害虫防除対策担当との兼務になった。

＜参　　考＞

植物防疫の施設に関する条例（昭和二十七年七月十八日　条例第五十五号）

第一条　植物防疫法（昭和二十五年法律第百五十一号）第三十二条第二項の規定による病害虫防除所の位置、名称及び管轄区域並びに第三十三条第一項の規定による病害虫防除員を置く区域は、この条例の定めるところによる。

第二条　病害虫防除所の名称、位置及び管轄区域は、次のとおりとする。

名　　称	位　　置	管 轄 区 域
埼玉県病害虫防除所	熊　谷　市	埼　玉　県

第三条　病害虫防除員を置く区域は、市町村の区域とする。

第四条　この条例施行に関し必要な事項は、知事が定める。

目　　次

１　埼玉県病害虫防除所の概要

（１）名称及び所在地 …… １
（２）病害虫防除所の業務 …… １
（３）組織体制 …… ２
（４）職員及び事務分担 …… ２
（５）病害虫防除員等の設置 …… ３

２　病害虫発生予察

（１）対象作物及び有害動植物 …… ４
（２）予察ほ場及び巡回調査地域等
ア　県予察ほ場 …… ８
イ　地区予察ほ場 …… ８
ウ　予察灯設置ほ場 …… ８
エ　巡回調査地域 …… ９
オ　フェロモントラップ等調査 …… １０
（３）令和７年度の主な病害虫の発生とその防除対策
ア　主要病害虫の発生と防除対策の概要 …… １１
イ　令和７年度病害虫発生程度別及び防除面積 …… ２２
（４）令和７年度の病害虫発生予察情報等の発信
ア　病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況 …… ２７
イ　発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病害虫発生現況報告等の外部への提供 …… ２８

３　病害虫防除指導

（１）病害虫防除手法等に関する相談 …… ２９
（２）県内市町村の病害虫防除協議会等における指導 …… ２９
（３）農薬展示ほ設置等に関する指導 …… ２９
（４）研修会等の指導 …… ２９
（５）防除対策資料等の作成 …… ３１

４　侵入警戒有害動植物の侵入調査

（１）フェロモントラップ調査 …… ３２
（２）目視調査 …… ３２
（３）新規病害虫まん延防止対策調査結果 …… ３３

５　農薬安全使用対策

（１）農薬危被害防止対策　……３４
（２）農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果　……３４

６　病害虫関係資料

（１）令和７年度発表の病害虫発生予察注意報等
ア　注意報（第１号～第９号）　……３６
イ　特殊報（キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統、ナスこうがい毛かび病、*Alternaria.japonica*Yoshii によるブロッコー黒すす症状）　……６８
ウ　その他の病害虫に関する注意喚起情報（チュウゴクアミガサハゴロモ）……７８
（２）病害虫発生予察調査等結果
ア　水稲・麦
（ア）フタオビコヤガ（イネアオムシ）のフェロモントラップ調査（4～9 月）……８２
（イ）イネカメムシの予察灯誘殺消長（6～9 月、多誘殺地点のみ）……８３
（ウ）赤かび病の発生に好適な気象条件の出現状況（熊谷）……８６
（エ）麦ほ場内におけるウンカ･ヨコバイ類の生息密度調査（5 月）……８７
（オ）水稲予察灯調査（5～9 月）……８８
（カ）いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9 月）……９３
（キ）トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数（5～9 月）……９５
（ク）スクミリンゴガイの被害状況調査結果（6～7 月）……９６
（ケ）水稲観察地点調査（6～9 月）……９７
（コ）イネツトムシ発育予測（6 月）……９９
（サ）フタオビコヤガ（イネアオムシ）発育予測（6 月）……９９
（シ）いもち病発生状況調査結果（7 月）……１００
（ス）水稲の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果（7 月）……１０１
（セ）ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果（1 月）……１０２
（ソ）イネカメムシ越冬調査結果（12 月～3 月）……１０４
（タ）農業技術研究センター県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9 月）……１０８
イ　野菜等
（ア）ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査（4～11 月）……１１０
（イ）オオタバコガのフェロモントラップ調査（4～11 月）……１１０
（ウ）シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査（4～11 月）……１１１
ウ　果樹
（ア）ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査（3～10 月）……１１１
（イ）果樹カメムシ類の予察灯調査（4～10 月）……１１２
（ウ）果樹カメムシ類のフェロモントラップ調査（4～10 月）……１１３
（エ）果樹カメムシ類の越冬密度調査結果（3 月）……１１４

エ　茶
（ア）チャハマキのフェロモントラップ調査（4～11 月）……１１６
（イ）チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査（4～11 月）……１１６
（ウ）チャノホソガのフェロモントラップ調査（4～11 月）……１１６
（エ）茶業研究所のデータ　……１１７

（３）その他
ア　令和７年度熊谷地方気象台の気象観測データ　……１１９
イ　過去の病害虫発生予察警報、注意報、特殊報発表状況　……１２０

７　学会・研究会等における成果の公表
（１）日本応用動物昆虫学会　……１２５
（２）関東東山病害虫研究会　……１２５
（３）その他、病害虫に関する研究会及び検討会　……１２５
（４）学術雑誌等への記事執筆　……１２５

８　肥料検査の概要
（１）検査　……１２７
（２）登録及び届出　……１３１
（３）調査事業　……１３４
（４）畜政推進事業……１３７

９　飼料検査の概要
（１）検査　……１３８
（２）調査事業　……１４１

1　埼玉県病害虫防除所の概要

（1）名称及び所在地

名　　称	位　　置	電 話 番 号	管轄区域
埼玉県病害虫防除所 （埼玉県農業技術研究センター 病害虫防除対策担当）	〒360-0102 熊谷市須賀広784 埼玉県農業技術研究センター内	電話:048-539-0661 （病害虫関係） 048-539-0662 （肥飼料関係） ＦＡＸ:048-539-0663	埼 玉 県

（2）病害虫防除所の業務

ア　病害虫発生予察

（ア）主要 14 農作物の 176 病害虫発生予察調査の実施

（イ）病害虫発生予察会議の開催及び発生予報の作成

（ウ）警報、注意報、特殊報等の発表

（エ）ホームページによる情報発信

イ　病害虫防除対策

（ア）検疫病害虫侵入リスク管理対策

（イ）重要害虫の防除対策

（ウ）新規病害虫のまん延防止対策

（エ）病害虫診断と防除指導

（オ）ホームページ、SNS 等による情報発信

（カ）病害虫や農薬に関する相談への対応

（キ）特別栽培農産物の認証への協力

ウ　農薬安全使用対策

（ア）農薬適正使用対策の推進

（イ）農薬取締法に基づく農薬販売届の受理及び販売店の立入検査、指導

（ウ）農薬取締法に基づく指導

エ　肥飼料検査業務

（ア）肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の検査及び指導

（イ）肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の登録及び届出の受理

（ウ）肥料生産量の調査

（エ）飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律に基づく飼料の検査

（オ）飼料の品質及び安全性の調査

（３）組織体制

◎農業技術研究センター病害虫防除対策担当が防除所（本所）を兼務

所長― 副所長(1人) ― 担当部長(1人) ― 担当課長(2人)― 主任 (1人)
― 主任専門員(2人) ― 技師(2人) ― 会計年度任用職員(4人)

(14人)

- 兼務 (13人) ― 本務：農業技術研究センター総務担当(6人)
  農業技術研究センター病害虫研究担当(7人)
- 兼務 (29人) ― 本務：各農林振興センター(25人)
  茶業研究所(1人)
  家畜保健衛生所(3人)

（４）職員及び事務分担

令和７年度病害虫防除所（農技研病害虫防除対策担当）職員事務分担

職　名	氏　名	担　当　作　物　等	担 当 農 林
所　長	原　弘信	所内(担当内)総括	
副所長	酒井和彦	所内(担当内)総括補佐 予算の総括	東松山
担当部長	杉山正幸	肥飼料検査・指導	
担当課長	横山素之	肥飼料検査・指導	
担当課長	安田登美	野菜・果樹	春日部
主　任	松本はるか	野菜・果樹	
主任専門員	片貝　充	野菜・果樹	本庄・大里
主任専門員	宮沢　登	農薬取締法・予察灯に関する事務	
技　師	小池崚太	普通作物	加須・秩父
技　師	高橋　諒	特産・普通作物	さいたま・川越
会計年度任用職員	西　玲子	肥飼料検査事業の補助	
会計年度任用職員	福井朋子	発生予察事業・農薬取締法関係事務の補助	
会計年度任用職員	大宅秀史	発生予察事業・重要病害虫の補助	
会計年度任用職員	島﨑祐子	発生予察事業の補助	

（５）病害虫防除員等の設置

ア　病害虫防除員の設置

植物防疫法第 33 条第 1 項の規定に基づき、病害虫防除員を 16 人（農業協同組合職員 12 人、農業者 4 人）に委嘱した。

病害虫防除員は、病害虫防除所の地域担当職員と連携して、次に掲げる項目について業務を実施した。

（ア）病害虫発生状況の把握及び報告

（イ）病害虫発生状況に関する情報提供と防除指導

（ウ）農薬の安全使用指導

（エ）その他、植物防疫事業に関する指導及び協力

イ　病害虫防除協力員の設置

病害虫発生予察事業に係る情報網の充実を図るため、病害虫防除員に加えて、病害虫防除協力員として埼玉県農業共済組合職員 10 人に協力を依頼した。

病害虫防除協力員は病害虫防除所の地域担当職員と連携して、病害虫の発生動向の把握に努めた。

２　病害虫発生予察

農業生産の安定と生産性の向上を図るとともに、高品質で安全・安心な農産物を生産するため、主要 14 作物に被害を与える 176 病害虫の発生消長や農作物の生育状況等を調査した。これらの調査結果と病害虫の生態、気象の経過と予報等を基に、病害虫の発生時期や発生量を予察し、生産者を始め農業団体や市町村、関係機関等に情報を提供し、病害虫の的確な防除を推進した。

（１）対象作物及び有害動植物

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
普通作物	水　稲	いもち病、紋枯病、白葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、ごま葉枯病、縞葉枯病、稲こうじ病、 ニカメイガ、セジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、イネドロオイムシ、 斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、ホソハリカメムシトゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ）、 フタオビコヤガ、コブノメイガ、イネミズゾウムシ、スクミリンゴガイ	イチモンジセセリ（イネツトムシ）
	麦	うどんこ病、赤かび病、さび病類（コムギ赤さび病、オオムギ黄さび病、オオムギ小さび病、オオムギ黒さび病）	黒穂病類（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病）、黒節病、縞萎縮病、オオムギ斑葉病、 アブラムシ類（ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ）、 ムギダニ、シロトビムシ類
	かんしょ	基腐病、 ナカジロシタバ、ハスモンヨトウ	つる割病、立枯病、 イモキバガ（イモコガ）、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
普通作物	大　豆	紫斑病、 アブラムシ類（ダイズアブラムシ）、ハスモンヨトウ、マメシンクイガ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ	ウイルス病、立枯性病害、葉焼病、べと病、茎疫病 コガネムシ類（アカビロウドコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、オオクロコガネ、ヒメコガネ、マメコガネ）、食葉性チョウ目幼虫、シロイチモジマダラメイガ、ダイズサヤタマバエ、ウコンノメイガ
果樹等作物	な　し	黒斑病、黒星病、赤星病、 シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、 ハダニ類（カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ、リンゴハダニ）、 カイガラムシ類（クワコナカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）、 アブラムシ類（ナシアブラムシ、ワタアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ）、 ニセナシサビダニ、 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）	うどんこ病、輪紋病
	茶	炭疽病、 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、 チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、 ハダニ類（カンザワハダニ）、 アザミウマ類（チャノキイロアザミウマ）、 カイガラムシ類（クワシロカイガラムシ）、 チャトゲコナジラミ	もち病、輪斑病 カメムシ類（ツマグロアオカスミカメ）、 ヨモギエダシャク、マダラカサハラハムシ、チュウゴクアミガサハゴロモ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
野菜	トマト	疫病、灰色かび病、葉かび病、黄化葉巻病、うどんこ病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ） オオタバコガ、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ワタアブラムシ）、 ハスモンヨトウ	青枯病、萎ちょう病類、 ハモグリバエ類、
	な　す	うどんこ病、灰色かび病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、 オオタバコガ、ハスモンヨトウ、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、チューリップヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ）、 ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）	褐紋病、褐色腐敗病、半身萎ちょう病、青枯病、 ハモグリバエ類、ホコリダニ類
	きゅうり	べと病、炭疽病、うどんこ病、斑点細菌病、灰色かび病、褐斑病 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 ハダニ類（ナミハダニ）、 アブラムシ類（ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ）、ハスモンヨトウ	モザイク病、菌核病、黄化えそ病、退緑黄化病、 ハモグリバエ類、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
野菜	ブロッコリー	コナガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ	黒腐病、べと病、軟腐病、花蕾腐敗病、黒斑細菌病、黒すす病、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、 ハイマダラノメイガ
	ね　ぎ	さび病、黒斑病、べと病 ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類（ネギアブラムシ、ワタアブラムシ）、ネギハモグリバエ、アザミウマ類（ネギアザミウマ）、ネギコガ	萎縮病、小菌核腐敗病、軟腐病、白絹病、葉枯病、黒腐菌核病
	さといも	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、 ハスモンヨトウ	汚斑病、疫病、 ハダニ類（カンザワハダニ）
	ほうれんそう	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、 ハスモンヨトウ	べと病、立枯病、シロオビノメイガ、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、ケナガコナダニ
	いちご	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ハスモンヨトウ、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）、アブラムシ類（ワタアブラムシ、イチゴネアブラムシ）、 ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 オオタバコガ	萎黄病、輪斑病、 ホコリダニ類
小　　計		14 作物、106 病害虫	14 作物、70 病害虫
合　　計		14 作物、176 病害虫	

（注1）「国の指定有害動植物」とは、国が指定有害動植物発生予察事業計画で定めた発生予察事業の対象病害虫。

（注2）「県の有害動植物」とは、埼玉県が国と協議して設定した発生予察事業の調査対象病害虫。

（２） 予察ほ場及び巡回調査地域等

ア　県予察ほ場

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
普通作物	水　稲	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
	麦	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
果樹特産	なし	1	久喜市六万部（農業技術研究センター久喜試験場）
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
野　　菜	トマト	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	きゅうり	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	いちご	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
計		7	

イ　地区予察ほ場

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
果樹特産	な　し	2	上里町長浜、春日部市内牧
計		2	

ウ　予察灯設置ほ場

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
普通作物	水　稲	6	川越市南田島、川島町上八ツ林　本庄市児玉町吉田林、熊谷市玉井、加須市大越、春日部市樋籠
果樹特産	な　し	3	上里町長浜、春日部市内牧、久喜市六万部
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
計		10	

（注）（　）書きのある予察灯は、（　）内の機関が調査している予察ほ場である。

エ　巡回調査地域

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
普通作物	水　稲 （早植）	8	川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、 熊谷市中曽根、加須市麦倉、加須市大越、春日部市樋籠 幸手市神扇
	水　稲 （普通植）	6	坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、吉川市中井、 本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田
	麦 （大麦）	2	熊谷市平塚新田、白岡市太田新井
	麦 （小麦）	9	川越市古谷上、坂戸市片柳、嵐山町志賀、 本庄市児玉町吉田林、熊谷市今井、熊谷市樋春、 行田市前谷、加須市大越、蓮田市駒崎
	かんしょ	2	川越市中台南、三芳町上富
	大　豆	6	川越市古谷上、嵐山町杉山、熊谷市板井、熊谷市樋春、 加須市大越、蓮田市駒崎
果樹特産	な　し	7	鴻巣市常光、神川町植竹、上里町長浜、加須市上種足、 加須市鴻茎、春日部市内牧、白岡市下大崎
	茶	4	所沢市下富、狭山市南入曽、入間市根岸、 日高市森戸新田
野　菜	トマト	7	川越市南田島、川島町上大屋敷、本庄市仁手、 上里町勅使河原、深谷市宿根、加須市栄、越谷市東町
	な　す	3	本庄市児玉町小平、熊谷市小江川、杉戸町大塚
	きゅうり	7	川越市大中居、川島町上大屋敷、本庄市田中、 熊谷市樋春、深谷市高畑、深谷市下手計、加須市大室
	ブロッコリー	3	本庄市田中、深谷市針ヶ谷、吉川市川藤
	ね　ぎ	5	本庄市田中、深谷市下手計、熊谷市上中条、 白岡市上野田、越谷市中島
	さといも	3	川越市中福、所沢市下富、狭山市堀兼
	ほうれんそう	3	川越市中福、狭山市堀兼、深谷市上手計
	いちご	5	吉見町荒子（苗）・江和井（本ぽ）、本庄市台町、 加須市本郷、春日部市内牧、久喜市菖蒲町菖蒲
計		80	

（注）水稲（早植）：5月中旬までの移植、水稲（普通植）：5月下旬以降の移植。

オ　フェロモントラップ等調査

対象作物	対象害虫名	箇 所 数	設　　置　　場　　所
水　稲	ニカメイガ	3	熊谷市中曽根、加須市麦倉、幸手市神扇
	フタオビコヤガ	3	川島町下大屋敷、熊谷市中曽根、加須市戸室
大　豆	マメシンクイガ	1	加須市大越
な　し	ナシヒメシンクイ	6	飯能市双柳、鴻巣市常光、上里町長浜、 加須市鴻茎、春日部市内牧、久喜市六万部
	果樹カメムシ類	1	寄居町鉢形
茶	チャハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノコカクモンハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノホソガ	2	所沢市下富、入間市根岸
野　菜	オオタバコガ	6	本庄市児玉町小平、深谷市針ヶ谷、 加須市大越、越谷市中島、杉戸町大塚、 白岡市上野田
	ハスモンヨトウ	4	熊谷市樋春、深谷市針ヶ谷、加須市大越、 久喜市菖蒲町菖蒲
	コナガ	1	深谷市新戒
	シロイチモジヨトウ	4	深谷市新戒、加須市大越、白岡市上野田、 杉戸町大塚
計		34	

（3）令和７年度の主な病害虫の発生とその防除対策

ア　主要病害虫の発生と防除対策の概要

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	葉いもち	平年：早 前年：並	平年：並 前年：多	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なかったが、一部感受性品種で発生が見られた。この作型では平年の発生量が比較的少ないため、発生量は平年並となった。	抵抗性品種への転換が進みつつある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	穂いもち	平年：並 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。発生量は平年並だった。	8月の降水量は少なく、顕著な高温だったため、軽微な発生にとどまった。この作型では平年の発生量が少ないため、発生量は平年並となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	紋枯病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い6月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	7～8月の気温がかなり高かったが、降水量は少なかったため、発生量はやや少となった。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。JA米では種子更新が徹底されている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	もみ枯細菌病	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：多 前年：並	平年よりやや遅い8月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年より多かった。	本作型では過去10年で一昨年から軽微な発生が見られており、本年も昨年並の発生量だったが、平年比は多となった。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	縞葉枯病	平年：早 前年：やや早	平年：多 前年：やや多	平年より早い6月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年より多かった。	ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は平年より低かったが、麦ほ場における生息密度が過去10年で2番目に高かったため、平年より早く多い発生となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。抵抗性品種への転換が進みつつある一方で、感受性品種ではウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ごま葉枯病	平年：早 前年：－	平年：多 前年：－	平年より早い7月第6半旬に初発生を確認した。発生量は平年より多かった。	高温で肥切れが早く感染しやすい状況にあったが、長期の高温で病原菌の活動も抑制されたため、限定的な発生にとどまった。平年の発生量が極めて少ないため、平年比多となった。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ニカメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	本田での発生は確認されなかった。	この作型では秋耕が定着しているため、水田内の越冬場所が減少しており、近年は少発生傾向である。本年はフェロモントラップの誘殺数が平年より少なく、本田での発生は確認されなかった。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	セジロウンカ	平年：やや早 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年よりやや早い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	本田での初発生は早かったが、予察灯への誘殺数は平年より少なかった。セジロウンカの飛来数が少なく、あまり本田に定着しなかったため、発生量が平年よりやや少なくなったと推察される。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	トビイロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	本田での発生は確認されなかった。	予察灯への誘殺は若干見られたものの、1回当たりの飛来数が少なかったため、本田定着には至らなかったと考えられる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ヒメトビウンカ	平年：早 前年：並	平年：並 前年：並	平年よりやや早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で2番目に高かったが、7月～9月の顕著な高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量は並にとどまった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ツマグロヨコバイ	平年：やや遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年よりやや遅い6月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より少なかった。	予察灯誘殺数も平年より少なかった。原因は定かではないが、在来種のため、夏期の長期にわたる顕著な高温が影響した可能性は否めない。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	斑点米カメムシ類	平年：並 前年：遅	平年：並 前年：少	平年並の6月第2半旬に初発生を確認し、発生量は6月に最大となった。発生量は平年並だった。	7月中旬実施の畦畔・雑草地における県内一斉調査では、1調査地点当たりの発生量が過去10年で最も多かった。昨年イネカメムシが多発生し、越冬量も多かったが、イネカメムシ対策として各地で広域防除が実施されたことから、発生量は平年並にとどまった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報、イネカメムシ越冬状況調査結果を発表し、防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イチモンジセセリ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。	夏期の長期にわたる顕著な高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	フタオビコヤガ	平年：やや遅 前年：遅	平年：やや多 前年：－	平年よりやや遅い6月第2半旬に初発生を確認したが、その後発生は見られなかった。	フェロモントラップの誘殺数は年々減少傾向にあり、ほ場での発生も減少している。平年の発生量が少ないため、少発生1か所で平年比やや多となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	コブノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネミズゾウムシ	平年：並 前年：早	平年：並 前年：多	平年並の5月第2半旬に初発生を確認し、発生量は6月に最大となった。発生量は平年並だった。	近年発生量は減少傾向にあり、予察灯誘殺数も平年よりも少なかったが、本田では複数地域で発生が確認されたため、発生量は平年並となった。	越冬場所（森林、堤防沿い）に近接する常発地帯では、育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	本作型では、地域による被害の多少の差が大きかったが、発生量は平年よりやや少なく、前年並かやや少なかった。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。常発地の防除が徹底されて、発生量は平年よりやや少なくなった。	耕種的防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネドロオイムシ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	本虫は寒冷地型であり、本県では4月下旬移植の一部地域でわずかに発生が見られる程度である。本年発生は確認されなかった。	常発地域が非常に限定的であり、当該地域では育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	葉いもち	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：多	平年よりやや早い7月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年並だった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なく、夏期の異常高温により7月16日を最後に9月21日まで感染好適日が出現しなかった。一部感受性品種での発生が見られたため、発生量は平年並となった。	ほぼ抵抗性品種となっているが、一部に常発地がある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	穂いもち	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は10月が最大となった。発生量は平年並だった。	葉いもちの発生量が平年並だったため、穂いもちの発生量も平年並となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	紋枯病	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：多	平年より遅い7月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月が最大となった。発生量は平年並だった。	8月～9月の気温がかなり高く、降水量は少なかった。顕著な高温で病原菌の生育適温を超える時間帯が長く、多発には至らなかった。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ばか苗病	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	一部地域で散発程度の発生が確認された。	平年の発生量が非常に少ないため、一部で散発程度の発生であっても、平年比は多となった。	温湯消毒の実施と箱育苗処理剤の励行を実施。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	もみ枯細菌病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い8月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年並あった。	初発は平年より早かったが、本作型の出穂期である8月の降水量は少なく、夏期の顕著な高温少雨で発生が抑制された可能性が否定できない。平年の発生量が少ないため、散発程度の発生でも平年並となる。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	縞葉枯病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8～9月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	本作型では、一部地域を除きほぼ抵抗性品種となっている。また、ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は平年より低く、ヒメトビウンカの本田での発生量は平年並であったため、本病の発生はやや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっている。保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、感受性品種を作付けている場合は防除に取り組むよう呼びかけている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	本作型の穂ばらみ期～出穂期の降水量が少なく、顕著な高温少雨が続いたため、発生が抑制された可能性が否定できない。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ごま葉枯病	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年より多かった。	顕著な高温で病原菌の活動が抑制されたが、高温で肥切れが早く感染に好適な条件となった一部地域では、発生が多かった。平年の発生量は少ないため、平年比多となった。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ニカメイガ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：－	平年より早い7月第4半旬に初発生を確認したものの、発生は散発にとどまった。本年は一部地域で予察灯誘殺数が平年より多かったが、本田での発生量は平年並であった。	本作型では米麦二毛作が多く、米収穫後すぐに耕耘するため、平年の発生量が非常に少ない。散発1か所で平年並の発生となる。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	セジロウンカ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：やや少	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は平年並だった。	本田の初発生は遅く、予察灯への誘殺も平年より遅く、誘殺数も少なかった。8月7日に飛来予測があったため、本作型の地域では平年並の発生となった。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	トビイロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	本田での発生は確認されなかったが、予察灯への誘殺は県内複数地域で確認された。	飛来予測日数は昨年と同じであったが、1回当たりの飛来数が少なかったため、ほとんどの地域で本田定着には至らなかったと考えられる。平年の発生量が少ないため、無発生が平年並となる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ヒメトビウンカ	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：多	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で2番目に高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量は平年並となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ツマグロヨコバイ	平年：やや遅 前年：並	平年：やや多 前年：多	平年より遅い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	一部地域で予察灯への誘殺数が平年より多く、その地域で本田での発生量が多かったため、全体の発生量は平年比やや多となった。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	斑点米カメムシ類	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	昨年イネカメムシが多発生し、7月に予察灯誘殺数が急増した。7月に注意報を2回発表し、防除圧が高まったため、8月以降はほとんど誘殺されなかった。防除が不十分な一部ほ場では発生量が多く、本田では平年比やや多となった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報を発表し、防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イチモンジセセリ	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い7月第6半旬に初発生を確認し、その後も発生は確認されたが、一部地域での散発程度の発生に留まった。発生量は平年並だった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制された(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)。平年の発生量が少ないため、散発1か所で平年並の発生となる。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	フタオビコヤガ	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	一部地域で散発程度の発生が確認された。	平年の発生量が非常に少ないため、散発1か所で平年並の発生となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	コブノメイガ	平年：やや遅 前年：遅	平年：多 前年：多	平年よりやや遅い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は9～10月に最大となった。	平年の発生量は非常に少ないが、一部地域（多肥栽培の晩生品種）で発生量が多く、平年比多となった。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネミズゾウムシ	平年：やや早 前年：並	平年：並 前年：多	平年よりやや早い6月第3半旬に一部の地域で初発生を確認し、その後7月まで発生は継続した。	従来からこの作型ではあまり発生が見られない。散発程度であったが、平年並の発生となった。	この作型ではあまり発生が見られないため、特に防除はしていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生量は平年並だったが、ごく一部に被害程度の大きいほ場が見られた。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。地域による被害の多少の差が大きく、全体での発生量は平年並となった。	耕種的防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネドロオイムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	特に防除はしていないが、普及している箱施用剤には、コウチュウ目に有効なものもある。
麦	黒さび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	赤さび病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い5月第4半旬に初発生を確認した。発生量は平年よりやや少なかった。	4月中下旬が温暖多湿に経過し、感染しやすい条件が継続したが、赤かび病の防除が徹底されたため、平年比やや少となった。	赤かび病との同時防除可能な薬剤の選択。
麦	黄さび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
麦	小さび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
麦	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い3月第5半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年並だった。	3月下旬が温暖に経過したため、平年より発生時期が早まった。昨年の発生量はやや少なく、菌密度が低かったため、発生量は平年並となった。	赤かび病の防除で同時防除されている。
麦	赤かび病	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い5月第2半旬に初発生を確認した。発生量は平年並だった。	4月下旬～5月上中旬に温暖多湿条件が継続し、アメダスデータから算出される赤かび病子のう胞子飛散好適日と小麦の開花期が完全に一致した。注意報を発表し、追加防除を呼びかけたことで、平年並の発生となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。 注意報を発表し、追加防除を呼びかけた。
麦	黒穂病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	黒節病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い1月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は3～5月に最大となった。発生量は平年並だった。	3～4月に高温多雨傾向で推移したため、発生が助長された。発生は一部地域のみだったため、平年並となった。	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	オオムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	近年、抵抗性品種や「彩の星」の導入により発生が極少となっている。
麦	コムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種「さとのそら」の導入より発生が極少となっている。
麦	オオムギ斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
麦	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：並	平年より早い12月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は4月に最大となった。発生量は平年並だった。	暖冬傾向であったため、初発は平年より早まったものの、3月下旬にまとまった降雨があったため、発生は平年並にとどまった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
麦	ムギダニ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
麦	シロトビムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
かんしょ	つる割病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	基腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	イモキバガ （イモコガ）	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ナカジロシタバ	平年：早 前年：やや遅	平年：並 前年：少	6月第1半旬に初発が確認された。その後も継続して発生が見られたが、前年ほどの発生量にはならなった。また、適切な防除により被害はそれほど拡大しなかった。	夏期に顕著な高温乾燥条件になったために発生が抑制されたと考えられる。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	本害虫は極端な高温に対して弱く、本年度の6～9月の気温は本種にとってマイナス要因として働いていた可能性が高い。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	食葉性チョウ目幼虫	平年：遅い 前年：遅	平年：多 前年：－	9月第1半旬に初発が確認され、シロイチモジヨトウやオオタバコガなどが優占して発生していた。防除により大きな被害にはならなかった。	本年度に発生したチョウ目幼虫として、シロイチモジヨトウとオオタバコガがおり、この2種は本年度のような異常な高温・乾燥条件でも発生が増加していた。かんしょにおいても例外ではなく、防除が行われるまでは幼虫が数多く発生していた。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
大豆	紫斑病	平年：やや遅 前年：遅	平年：並 前年：少	収穫期の子実調査において、ほぼ全地域で散発程度の発生が確認された。	9月上旬にまとまった降雨があったため、莢伸長期の感染を助長したが、「里のほほえみ」は本病への強い抵抗性を持つため、発生は平年並にとどまった。	奨励品種が紫斑病に強い「里のほほえみ」に切り替わった。種子消毒、無人ヘリによる一斉防除を実施している。
大豆	立枯性病害	平年：やや早 前年：遅	平年：並 前年：並	一部地域で散発程度の発生が確認された。	連作に伴い、一部地域にて発生した。	種子消毒を実施している。
大豆	べと病	平年：遅 前年：やや遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	主力品種が感受性の「里のほほえみ」や在来品種のため、発生が増加傾向にある。感染しやすい生育ステージである8月の降雨が少なく、夏期の顕著な高温少雨で抑制され、平年並となった。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	葉焼病	平年：やや遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年並だった。	8～10月は高温傾向が続いたが、降雨が少なかったため、発生は平年並となった。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	ウイルス病	平年：遅 前年：早	平年：多 前年：多	収穫期の子実調査で、一部地域で褐斑粒の発生が確認された。生育期のモザイク葉は確認されなかった。	アブラムシ類の発生は確認できなかったが、褐斑粒が1か所で少発生(被害粒率4.7%)、1か所で散発となった。平年の発生量が少ないため、平年比多となる。	－
大豆	茎疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
大豆	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	平成30年以降は発生量が減少しているため、無発生でも平年比は少にならない。	は種時の薬剤処理と適期防除を実施している。
大豆	コガネムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	発生が確認されなかった原因は定かではないが、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	他の食葉性チョウ目幼虫と一括して調査を行っていたため、個別データをとっていない。	同左	同左
大豆	食葉性チョウ目幼虫	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より早い7月第5半旬から発生が確認され、発生面積は9～10月に最大となった。シロイチモジヨトウ、オオタバコガが多かったが、９月からハスモンヨトウも多くなった。発生量は平年より多かった。	オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺数は、9月～10月の高温少雨傾向により、9～10月にかけて平年より大幅に増加し、ほ場での発生も助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。 オオタバコガとシロイチモジヨトウは注意報を発表し、防除を呼びかけた。
大豆	ダイズサヤタマバエ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	マメシンクイガ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い9月第6半旬に、一部地域で成虫が確認された。発生量は平年並であった。	大規模粗放栽培のほとんど防除を行っていない調査地点1か所が子実調査で多発生となったが、他の調査地点は散発1か所のみで、平年並の発生となった。9～10月の高温少雨により、第2世代幼虫の被害が発生したと考えられる。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	シロイチモジマダラメイガ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	収穫期の子実調査で、一部地域で被害が確認された。発生量は平年並だった。	ほ場での発生は確認できなかったが、子実調査で少発生が2か所、散発が1か所確認された。8～10月は高温少雨で経過したが、発生は平年並にとどまった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
大豆	吸実性カメムシ類	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：やや少	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	近年、他種カメムシ類の寄生が減少する9月中旬から収穫期近くまで寄生するミナミアオカメムシが急速に増加し、9月～10月まで高温で推移したため、子実被害が助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	フタスジヒメハムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
大豆	ウコンノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒星病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：少	平年より遅い5月第3半旬に初発を確認したが、9月以降は発生が確認されなかった。発生量は平年並で前年より少なかった。	前年秋の発生量が少なかったため発生が遅く、少雨により前年より発生が少なくなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	赤星病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い4月第6半旬に初発を確認した。その後7月にピークとなり、発生量は前年より多く、平年並であった。	3月から5月に降雨が多かったことから発生時期が早かったが、その後降水量が少なく推移したため、平年並となった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、10月に平年よりやや多い発生量となった。	6月から8月の少雨、日照時間が多かったことにより発生時期が遅くなったが、9月に入り着果負担の大きい時期に少雨で助長され平年よりやや多い発生となった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	輪紋病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	シンクイムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	フェロモントラップでは平年並の3月第4半旬から成虫が誘殺されているが、梨園内では発生は確認されなかった。	－	フェロモントラップデータの公表により、注意喚起を呼びかけた。
なし	ハマキムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い6月第3半旬に初発を確認した。その後8月に多発生となり、9月にピークとなって平年比やや多となった。	6月から9月にかけての高温・少雨により発生が助長され平年よりやや多く発生した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	カイガラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	アブラムシ類	平年：やや早 前年：早	平年：並 前年：多	平年よりやや早い4月第2半旬に初発を確認した。発生量は平年並であった。	3月・4月の気温が高かったことから、発生時期が早まった。その後の防除で平年並に抑えられた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ニセナシサビダニ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い7月第3半旬に初発を確認した。平年並の発生量となった。	7月の高温時に発生が見られたが、通常の防除で平年並に抑えられた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	果樹カメムシ類	平年：－ 前年：早	平年：並 前年：少	梨園内では前年より早い6月第3半旬に果実被害が確認されたが、発生量は平年並（過去にほとんど発生がない）であった。	予察灯では、5月第3半旬から誘殺数の増加傾向が見られたが、多目的防災網の普及により被害は限定的と考えられた。	フェロモントラップ及び予察灯データの公表により、注意喚起を呼びかけた。
茶	炭そ病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：多	二番茶摘採以降、6月第4半旬から7月第1半旬にかけて発生が見られた。広い地域での発生が見られたものの、7月中旬以降は発生を確認できなかった。	7月以降の顕著な高温乾燥により、本病害の好適条件にならず、発生が大きく抑えられたものと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	もち病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	越冬菌密度が低く、適切に防除されているためと思われる。	－
茶	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	2月第3半旬にごくわずかに発生が確認されたものの、発生地域も限定的でありそれ以降の確認もできなった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	－
茶	チャノコカクモンハマキ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：やや少	フェロモントラップでの調査では、第1世代成虫の発生は平年よりも早かった。発生量は7月上旬以降減少し、昨年同様第2世代成虫の誘殺数は平年を大きく下回った。幼虫は、8月第6半旬と11月上旬にわずかに発生が見られたものの、昨年よりもさらに発生が少なかった。	本種も夏の異常高温・乾燥の影響を受けたものと考えられる。また、適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャハマキ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生は平年並であった。発生量は地点にも依るが、おおむね平年より少なかった。 幼虫は、茶園での発生時期は平年並であった。8月第1半旬以降は発生量は減少し、その後も茶園での幼虫の発生はほとんど確認されなかった。	適切な防除が行われたのに加え、夏期の異常な高温・乾燥の影響で発生が抑えられたものと考えられる。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノホソガ	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫は平年よりも早かった。発生量は8月上旬以降減少し、9月以降は発生がほとんど確認されなかった。 幼虫は、初夏にわずかに一部の茶園での発生が確認された。	適切な防除が行われたのに加え、夏期の異常な高温・乾燥の影響で発生が抑えられたものと考えられる。特に本種はチャハマキ、チャノコカクモンハマキと比べても、高温に弱い傾向があるため強く発生が抑制されたと考えられた。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノミドリヒメヨコバイ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い5月第4半旬から発生が確認され、7月第4半旬までは平年並の発生状況が続いていた。その後8月以降は発生量が減少した。	夏期の高温乾燥の影響のため、2番茶の摘採以降発生量が緩やかに増加した。しかし、県内で8月以降40度を超える異常な高温の日が連続した影響により、発生が抑制されたと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
茶	カンザワハダニ	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い4月第4半旬から発生は見られたものの、その後局地的に小規模な発生は確認されたものの、発生量が大きく増加することはなかった。	局地的に発生量が増加したものの。深刈りにより、物理的に除去されたほか、9月以降の適切な防除により発生は抑えられた。また、本種も異常な高温の影響で摘採面に留まることが難しかったものと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノキイロアザミウマ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第4半旬から発生が見られる園が増えたが、その後発生量自体は大きく増加することはなかった。	梅雨入りが早まった影響により、平年よりも発生が遅れたが、カンザワハダニとの同時防除により発生はある程度抑制された。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ツマグロアオカスミカメ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生が確認されなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。また、本年の県内における発生は非常に局所的かつ小規模となっている。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	クワシロカイガラムシ	平年：遅 前年：－	平年：やや少 前年：－	有効積算温度によるふ化予測では、第1世代幼虫のふ化最盛期は5月6日（平年より20日早い）、第2世代は7月16日（平年より7日早い）、第3世代は9月23日（平年より23日遅い）となった。	冬季に散布する防除薬剤の普及により発生量は減少している。夏期の異常高温により発育上限温度に連日到達していたため、第3世代の発生に抑制されたものと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ヨモギエダシャク	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生が確認されなかった。	本県での発生は少なく、チャのハマキガ類と同時に適切な防除がされていると思われる。	－
茶	チャトゲコナジラミ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	裾葉に定着していたが、チャの栽培上問題のない程度の発生にとどまっていた。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	－
茶	マダラカサハラハムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	昨年発生したほ場において、8月第6半旬から、9月第2半旬にかけてゲリラ的な食害が確認された。	突然発生して食害が見られるため、対策が難しい。局所的な発生にとどまっているため、県内での被害はそれほど大きくなっていない。	本年度より、新しく県の指定有害動植物に登録されたため、調査を開始した。
茶	チュウゴクアミガサハゴロモ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	調査が開始された2月第1半旬から産卵されたチャ枝がすべてのほ場に存在しており、4月第3半旬以降幼虫の発生が広く確認された。また、7月第3半旬以降と9月第6半旬に成虫によるチャ枝への産卵がすべてのほ場で確認された。	秋や春の刈り落としにより、発生量はある程度抑えられているものの、産卵自体は多く行われていた。産卵は1番茶の摘採時期には確認されなかったため、現状では大きな被害にはつながっていない。	本年度より、新しく県の指定有害動植物に登録されたため、調査を開始した。発生予察情報や病害虫防除情報等の防除指導により、物理的防除を推進した。
冬春トマト（長期一作）	疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	灰色かび病	平年：並 前年：－	平年：やや少 前年：多	1月第4半旬に初発を確認し発生量は少なかったが、その後4月第2半旬で増加し、全体的な発生量は平年よりやや少なくなった。	1月上旬に降水量が多く、発生が確認されたもののその後降雨は少なく抑えられていた。3月4月の降雨で発生量が増加したが、限定的な発生であった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト（長期一作）	葉かび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種の普及により発生は抑制されている。	抵抗性品種の導入とあわせ薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト（長期一作）	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。また、土壌消毒が実施されている。
冬春トマト（長期一作）	黄化葉巻病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い10月第6半旬に初発を確認し、その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場でウイルス媒介虫の侵入防止対策が不十分であったため、発生が増加した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。一部ほ場で耐病性品種が導入されている。
冬春トマト（長期一作）	うどんこ病	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：やや少	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認後、2月3月で収束したが、収穫終盤となった5月中旬に発生量が増加したため、発生量は平年よりもやや多くなった。	気温が上がってきた時期に乾燥状態となった施設内で増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト（長期一作）	萎ちょう病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種が広く普及している。	土壌病害に共通した土壌消毒等の対策がとられている。
冬春トマト（長期一作）	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト（長期一作）	コナジラミ類	平年：早 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より早い9月第6半旬に初発を確認し、発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場で侵入防止対策が不十分であった。また、3～4月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト（長期一作）	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い11月第4半旬に初発を確認し、発生が継続したが、発生量が少なかったため、平年並となった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い5月第4半旬に初発を確認しすぐに収束したが、平年の発生量が少ないため多となった。	一部のほ場で侵入防止対策が不十分であった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト（長期一作）	オオタバコガ	平年：－ 前年：遅	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋なす	うどんこ病	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：少	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが、すぐに収束したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	9月に着果負担の影響と激しい雨の後の高温などの条件で発生したと考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	灰色かび病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い8月第1半旬で初発を確認したが、少発生であったため、すぐに収束した。	7月から8月は高温乾燥が顕著であったが、局所的に一時的な雷雨もあり、場所によって多湿条件になったものと考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	褐紋病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	褐色腐敗病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：少	平年よりも遅い8月第1半旬に初発が確認されたが、発生は少なく、すぐに終息したため、発生量は平年並となった。	－	－
夏秋なす	半身萎ちょう病	平年：早 前年：遅	平年：やや多 前年：やや少	平年より早い6月第4半旬に初発を確認し、一部ほ場で発生が多くなった。その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場で連作により発生が増加した。	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	アザミウマ類	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	6～9月の高温により、発生が助長された。	天敵への影響や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	オオタバコガ	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：やや多	平年より遅い6第4半旬に初発を確認し、その後継続的に発生が続いたため、発生量は平年より多くなった。	6～9月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認したが、9月に入り気温が下がってから増加し、多発生となった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	－
夏秋なす	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い6月第1半旬に初発を確認したが、その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	－	－
夏秋なす	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第6半旬に初発を確認後、継続的に発生し、発生量は平年並となった。	発生は継続したが防除対策により平年並となった。	－
夏秋なす	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い6月第6半旬に初発を確認した。その後、発生は抑えられたが9月、10月で再び増加した。発生量は平年よりやや少なかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ホコリダニ類	平年：遅 前年：早	平年：多 前年：やや多	平年並の8月第3半旬に初発を確認した。9月まで継続して発生したため、発生量は平年より多くなった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	べと病	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認した。その後、作期の終了する11月まで発生は増加したが、多発生にはならず、発生量は平年より少なかった。	9月及び10月は降雨があり、ハウス内湿度が上昇したのと、着果負担があったため発生したが、防除により少発生で抑えられた。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	炭疽病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い10月第3半旬に初発を確認し、その後11月の収穫終盤まで増加したが、発生量は平年並であった。	－	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	褐斑病	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、発生が作期終盤まで続いたが、発生量は平年よりやや少なかった。	9月以降の降水量は少なく、防除対策を講じたため、発生は抑えられた。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	作付前の太陽熱消毒等により伝染源である菌核の死滅が図られている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	黄化えそ病	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：並 前年：少	平年よりやや遅い9月第4半旬に初発を確認し、その後11月まで発生は継続し、発生量は平年並となった。	9～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、発生が助長された。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	退緑黄化病	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い9月第4半旬に初発を確認し、その後発生が増加し、発生量は平年並となった。	9～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アザミウマ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認し、その後発生は継続・増加し、発生量は平年よりやや少なかった。	9～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋きゅうり (抑制栽培)	コナジラミ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認し、発生量は増加していったため、発生量は平年より多くなった。	8～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、発生が多く継続し、発生量は平年並となった。	9～11月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハダニ類	平年：遅 前年：－	平年：やや多 前年：－	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、中発生で平年よりやや多かった。	10月及び11月の降雨が少なく、乾燥していたため収穫終盤で発生した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、その後増加し、発生量は平年より多かった。	一部施設で発生が確認されたが、気温が高かったため発生が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い8月第6半旬に主にシロイチモジヨトウの初発を確認し、発生量は平年並であった。	野外から施設への侵入があったものと考えられるが、その後の防除で抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	べと病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：多	平年より遅い3月第6半旬に初発を確認後に増加し、発生量は平年より多かった。	3～4月に降雨が多く、ハウス内湿度が上がりやすい状態になり、発生量が増加した。	抵抗性品種の導入と、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。また、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	炭疽病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い3月第5半旬に初発を確認したが、発生量はそれほど多くなくすぐに終息したため、発生量は平年より少なかった。	一部定植時期の早いハウスで成り疲れして発生したものの、適正な湿度管理や適期防除が行われ、発生が抑制された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	モザイク病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	褐斑病	平年：やや遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年よりやや遅い1月第6半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	－	抵抗性品種が導入されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	菌核病	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い1月第6半旬に初発を確認した。発生が確認されたほ場は一部で少発生であり、発生量は平年並となった。	－	作付後の太陽熱利用等による土壌消毒を行っている。
冬春きゅうり (促成栽培)	黄化えそ病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第1半旬に初発を確認した。発生が確認されたほ場は限定的で少発生かつすぐに終息したため、発生量は平年並であった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に感染株の抜き取りが行われ、発生は一時的なものとなった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	退緑黄化病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い3月第5半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部で発生量も少なかったため、発生量は平よりやや少なかった。	3～4月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、感染が5月まで続いたが、発生量は少なく限定的で、防除圧の高いハウスでは発生しなかった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アザミウマ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	コナジラミ類	平年：早 前年：－	平年：やや少 前年：多	平年より早い2月第3半旬に初発を確認し、作期終盤まで発生量は少ない状態が継続したため、発生量は平年よりやや少なかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：並	平年より早い1月第5半旬に初発を確認し、その後作期終盤まで発生量は増加したため、発生量は平年より多くなった。	3～5月の高温によりハウスへの飛込みが増え、収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場で発生が助長された。	施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：－	平年より遅い5月第1半旬に初発を確認、多発生となったが、すぐに終息した。発生量は平年より多かった。	4～5月の高温が助長原因と考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アブラムシ類	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い5月第1半旬に初発を確認したが、少発生ですぐに終息した。発生量は平年並であった。	4～5月の高温が助長原因と考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
ブロッコリー	黒腐病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	べと病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認したが、少発生ですぐに終息した。発生量は平年並であった。	－	育苗時からの防除対策が行われている。
ブロッコリー	軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	花蕾腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	黒斑細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	黒すす病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	コナガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：早	平年：並 前年：少	平年と同時期の9月第3半旬に初発を確認し、発生量は平年並だった。	生育初期は、育苗・定植時に処理した薬剤による防除効果が続いていたが、9月の高温の影響で発生が助長された。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。10月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
ブロッコリー	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	7月～10月の高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。9月10月の2回、注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
ブロッコリー	ヨトウガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認し、発生量は平年並であった。	7月～10月に高温により発生が助長され、フェロモントラップの誘殺数も平年より多かったが、適切な防除によりほ場での発生が平年並に抑えられた。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。8月9月10月の3回、注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	さび病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い6月第5半旬に初発を確認したがその後終息したため、発生量はやや少となった。	一時的な降雨で感染する条件となったが、その後高温乾燥が続いたため、終息したと考えられる。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒斑病	平年：並 前年：遅	平年：並 前年：並	平年並の6月第5半旬に初発を確認し、その後発生が継続した。発生量は平年並であった。	一時的な降雨により発生が助長された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	べと病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	小菌核腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	白絹病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒腐菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	土壌消毒と併せ、耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い9月第4半旬に初発を確認した。その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	9月以降の高温により発生が助長された。フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。10月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	シロイチモジヨトウ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より早い6月第6半旬に初発を確認した。その後も継続して発生が確認され、発生量は平年並であった。	5月～11月の高温により発生が助長され、12月まで発生が確認された。フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。8月9月10月の3回、注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認したがその後はすぐに終息した。発生量は平年並であった。	5月の高温で発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	平年よりも早い6月第5半旬に初発を確認し、継続して発生が確認された。発生量は、平年並だった。	6月～10月の高温により発生が助長された。B系統の発生はそれほど多くなかった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギアザミウマ	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、栽培期間を通じて継続して発生が見られ、10月がピークとなった。発生量は平年よりやや多かった。	一年を通して高温で推移したため、発生が早く、長く続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギコガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	汚斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	疫病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。また、栽培期間は顕著な高温乾燥が続いており、発生が大きく抑制された。	県内主要産地での防除に対する意識が高く、適期防除が行われ、発生は抑制された。ドローンでの薬剤散布が行われるなど防除が徹底された。
さといも	アブラムシ類	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：やや少	平年より遅い6月第3半旬に初発が確認され、9月まで発生が見られたが、発生量は増えなかった。	顕著な高温乾燥の影響で灌水終了後の地上部の枯死が早く発生が終息した。	疫病防除のため、薬剤散布回数が増加した。それに伴い、殺虫剤を散布する機会も増加した。
さといも	ハダニ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：少	9月第3半旬に初発が確認されたが、発生圃場は限定的で、その後発生は見られず発生量は平年並となった。	顕著な高温乾燥の影響で灌水終了後の地上部の枯死が早く発生が終息した。	－
冬春ほうれんそう	べと病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	アブラムシ類	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い1月第3半旬に初発が確認されたが、一部のほ場でありすぐ終息したため平年並となった。	9月～11月にかけて気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	播種時の粒剤施用をはじめ薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	平年は確認されていないが、10月第6半旬の初発を確認し、多発せず終息した。	9月～11月にかけて気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
冬春ほうれんそう	ケナガコナダニ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	シロオビノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、本年はシロイチモジヨトウが食害の主体であり、本種の発生は確認されなかった。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
いちご（育苗期）	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご（育苗期）	うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご（育苗期）	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご（育苗期）	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご（育苗期）	輪斑病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い5月第3半旬に初発を確認したが、発生ほ場は限定的で少発生であったため、発生量は平年よりやや少なかった。	－	－
いちご（育苗期）	ハスモンヨトウ	平年：やや遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年よりやや遅い6月第6半旬で初発を確認したが、発生ほ場は限定的であったため、発生量は平年並となった。	－	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
いちご（育苗期）	アザミウマ類	平年：－ 前年：早	平年：－ 前年：－	平年はほぼ確認されていないが、5月第4半旬に初発を確認し、発生量は少なく、その後の発生は確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	－
いちご（育苗期）	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し多発生となり、その後は発生量は抑えられたが、発生量は平年より多くなった。	4月の気温が高く、5月からの発生が見られたが、薬剤防除が行われ、発生は抑制された。	他の害虫との同時防除で対応している。
いちご（育苗期）	ハダニ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：少	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認されたが、発生量は平年並となった。	4月の気温が高く、5月からの発生が見られ、その後の高温で8月まで発生が続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご（育苗期）	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご（育苗期）	コナジラミ類	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い5月第3半旬に初発を確認したが、その後も断続的に少発生を確認した。発生量は平年並となった。	適切な防除により少発生にとどまり、被害はなかった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご （育苗期）	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	育苗期の気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	灰色かび病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より遅い12月第3半旬に初発を確認した。その後の発生はなかったが、4月に再び発生した。発生量は平年よりやや少となった。	1月～2月の少雨の影響で発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：－	平年より遅い3月第6半旬に初発を確認した。発生量は平年よりやや多かった。	適切な肥培管理や適期防除により、３月中旬まで発生が抑えられたが、施設内の乾燥により助長され、収穫期で防除が難しい時期に発生量が多くなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご （生育･収穫期）	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認した。その後発生量は増え11月にピークとなり、平年比やや多となった。	10～11月の高温の影響により、被覆展張遅れのほか側窓や出入口を開放して換気していた影響により、飛び込みによる発生が多かったと見られた。	ハウス開口部のネット使用により成虫の飛び込みを抑え、発生動向を見ながら薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	アザミウマ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い10月第2半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認されたが、発生量はやや少となった。	9月～12月にかけて高温で推移したため、一部ほ場で飛び込みによる発生が確認されたが、防除により平年よりやや少で抑えられた。	ハウス開口部の赤色ネット使用により野外からの飛び込みを抑える耕種的防除と薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：少	平年より早い10月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認され、2月3月の発生量が増加した。作期を通じた発生量は平年並となった。	2月及び3月の気温が平年よりかなり高かかため、野外からの飛び込みとハウス内で増殖により増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	ハダニ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：やや多	平年より早い10月第2半旬に初発を確認した。その後も継続的に発生が確認され、3月がピークとなったが、発生量は平年より少なかった。	苗からの持ち込みと考えられる初発は早かったものの、防除の徹底により11月～12月は発生がやや少なかった。2月から3月にかけて気温が高かった時期に増加が見られたが、平年比やや少で収まった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。定植前のC02ガス処理や、天敵の利用も進んでいる。
いちご （生育･収穫期）	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：－	11月、12月に一部のほ場で少発生が見られたが、すぐに収まり限定的であった。	－	－

イ 令和7年度 病害虫発生程度別及び防除面積

※「0」は単位に満たないもの

作物名（作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
早期水稲 13,320ha (5月中旬までの移植)	苗立枯病					－		
	苗いもち					－		
	葉いもち	0	8	197	2140	2345	6235	6235
	穂いもち				9	9	100	100
	紋枯病	0	8	197	2140	2345	10300	10300
	白葉枯病					－		
	ばか苗病					－	6235	6235
	イネシンガレセンチュウ					－		
	イネシンガレセンチュウ(種子消毒)					－	10300	10300
	もみ枯細菌病				9	9		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					－	10300	10300
	ごま葉枯病			9	787	796		
	小粒菌核病					－		
	黄化萎縮病					－		
	縞葉枯病	256	671	1570	2924	5421	6235	6235
	黒すじ萎縮病					－		
	萎縮病					－		
	黄萎病					－		
	稲こうじ病					－	10300	10300
	褐色菌核病					－		
	赤色菌核病					－		
	葉しょう褐変病					－		
	褐色葉枯病					－		
	苗立枯細菌病					－		
	ニカメイガ					－	6235	6235
	セジロウンカ		2	62	1190	1254	6235	6235
	トビイロウンカ					－	6235	6235
	ヒメトビウンカ	4091	6559	2477	190	13317	6235	6235
	ツマグロヨコバイ	2	33	321	1895	2251	6235	6235
	イネハモグリバエ					－		
	イネミギワバエ					－		
	イネキモグリバエ					－		
	イネドロオイムシ					－	6235	6235
	イネゾウムシ					－		
	イネクロカメムシ					－		
	斑点米カメムシ類		23	1124	7054	8201	5150	10300
	イチモンジセセリ				9	9	6235	6235
	フタオビコヤガ			1	272	273	6235	6235
	イネヨトウ					－		
	アワヨトウ					－		
	コブノメイガ					－	6235	6235
	イネミズゾウムシ			9	787	796	6235	6235
	スクミリンゴガイ					－	30	30
普通期水稲 16,280ha (5月下旬以降の移植)	苗立枯病					－		
	苗いもち					－		
	葉いもち	0	6	200	2538	2744	12500	12500
	穂いもち		0	23	960	983	12500	12500
	紋枯病	201	633	1668	3447	5949	12500	12500
	白葉枯病					－		
	ばか苗病				169	169	6250	6250
	イネシンガレセンチュウ					－		
	イネシンガレセンチュウ(種子消毒)					－	12500	12500
	もみ枯細菌病				169	169		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					－	12500	12500
	ごま葉枯病	65	271	910	2471	3717		
	小粒菌核病					－		
	黄化萎縮病					－		
	縞葉枯病		0	23	960	983	12500	12500
	黒すじ萎縮病					－		
	萎縮病					－		
	黄萎病					－		
	稲こうじ病					－	12500	12500

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
普通期水稲 （5月下旬以降の移植）	褐色菌核病					－		
	赤色菌核病					－		
	葉しょう褐変病					－		
	褐色葉枯病					－		
	苗立枯細菌病					－		
	ニカメイガ				34	34	12500	12500
	セジロウンカ	1	31	474	3323	3829	12500	12500
	トビイロウンカ					－	12500	12500
	ヒメトビウンカ	4221	10457	1591	10	16279	12500	12500
	ツマグロヨコバイ	1101	1228	1921	2788	7038	12500	12500
	イネハモグリバエ					－		
	イネミギワバエ					－		
	イネキモグリバエ					－		
	イネドロオイムシ					－		
	イネゾウムシ					－		
	イネクロカメムシ					－		
	斑点米カメムシ類	1127	1313	2065	2961	7466	12500	25000
	イチモンジセセリ				169	169	12500	12500
	フタオビコヤガ				34	34	12500	12500
	イネヨトウ					－		
	アワヨトウ					－		
	コブノメイガ	64	271	910	2471	3716	12500	12500
	イネミズゾウムシ				169	169	12500	12500
	スクミリンゴガイ					－	30	30
麦 6,528ha	黒さび病					－		
	赤さび病			1	211	212	1300	1300
	黄さび病					－		
	小さび病					－		
	うどんこ病	1	17	203	1257	1478	1950	1950
	赤かび病			1	639	640	1950	1950
	雪腐病類					－		
	黒穂病類					－		
	黒節病	1	11	106	692	810	650	650
	麦類縞萎縮病					－		
	小麦縞萎縮病					－		
	大麦縞萎縮病					－		
	雲形病					－		
	斑葉病					－		
	株腐病					－		
	立枯病					－		
	アブラムシ類			5	656	661	1300	1300
	ムギアカタマバエ					－		
	ハモグリバエ類					－		
	ムギダニ					－	650	650
かんしょ 365ha	かいよう病					－		
	つる割病					－	50	50
	立枯病					－	50	50
	イモキバガ					－		
	ナカジロシタバ		0	6	100	106	300	300
	ハスモンヨトウ					－	300	300
	シロイチモジヨトウ					－		
	ヨツモンカメノコハムシ					－		
	コガネムシ類					－	150	200
	その他（食葉性チョウ目幼虫）			183	183	366	300	300
大豆 667ha	紫斑病			1	67	68		
	さび病					－		
	菌核病					－		
	立枯性病害			1	1	2	370	370
	炭そ病					－		
	黒とう病					－		
	べと病				367	367	370	370
	葉焼病			14	448	462	370	370
	モザイク病					－		

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
大豆	萎縮病					－		
	ウイルス病(わい化病除く)			1	39	40		
	わい化病					－		
	アブラムシ類					－		
	タネバエ					－		
	コガネムシ類					－	370	370
	ハスモンヨトウ					－	370	740
	食葉性チョウ目幼虫	132	246	210	70	658	370	740
	ハダニ類					－		
	ダイズサヤタマバエ					－	370	370
	マメヒメサヤムシガ					－		
	マメシンクイガ	3	13	43	112	171	370	370
	シロイチモジマダラメイガ		0	9	90	99	370	370
	吸実性カメムシ類	39	120	213	198	570	370	740
	ウコンノメイガ					－		
	フタスジヒメハムシ					－		
	ヒメサヤムシ類					－	370	370
なし	黒斑病					－		
336ha	黒星病				0	－	325	325
	赤星病			0	25	25	325	650
	うどんこ病	45	45	60	70	220	325	650
	輪紋病					－	325	650
	ナシヒメシンクイ					－	325	975
	モモシンクイガ					－		
	ナシマダラメイガ					－		
	ハマキムシ類					－	325	975
	ハダニ類	21	59	103	99	282	325	975
	カメムシ類				0	－	325	975
	カイガラムシ類					－	325	325
	アブラムシ類	4	10	28	60	102	325	325
	ニセナシサビダニ				0	－	325	325
	吸ガ類					－		
	ナシチビガ					－		
茶	炭疽病	0	3	27	132	162	710	1420
726ha	もち病					－		
	網もち病					－		
	輪斑病					－	710	1420
	チャノコカクモンハマキ				5	5	710	2130
	チャハマキ		0	4	62	66	710	2130
	チャノホソガ				5	5	710	2130
	チャノミドリヒメヨコバイ		0	48	475	523	710	2130
	カンザワハダニ		0	5	103	108	710	2130
	チャノキイロアザミウマ		0	48	475	523	710	2130
	ツマグロアオカスミカメ					－		
	クワシロカイガラムシ	2	9	38	115	164	710	1420
	ヨモギエダシャク					－	710	710
	チャトゲコナジラミ	2	11	45	136	194	710	1420
冬春トマト	疫病					－		
112ha	灰色かび病				1	1	110	330
	モザイク病					－		
	葉かび病					－		
	青枯病					－		
	萎ちょう病					－		
	うどんこ病	1	4	12	26	43	110	330
	黄化葉巻病	0	2	7	21	30	110	330
	アザミウマ類					－	110	330
	オオタバコガ					－	110	110
	コナジラミ類	0	2	7	21	30	110	330
	ハモグリバエ類					－	110	110
	アブラムシ類					－	110	110
	トマトサビダニ					－		
	ハスモンヨトウ					－	110	110

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
夏秋なす	うどんこ病				3	3	180	540
	灰色かび病				3	3		
229ha	褐紋病					－	180	180
	褐色腐敗病				3	3	180	540
	半身萎ちょう病	28	25	35	43	131	160	160
	青枯病					－	160	160
	アザミウマ類	30	30	40	47	147	180	720
	コナジラミ類	0	2	15	55	72	180	540
	オオタバコガ	51	29	34	37	151	180	540
	ハモグリバエ類	2	7	19	41	69	180	180
	アブラムシ類		0	5	29	34	180	540
	ハダニ類	2	7	19	41	69	180	720
	ハスモンヨトウ	15	21	34	48	118	180	540
	ホコリダニ類	28	20	26	33	107	180	720
夏秋きゅうり	べと病			0	23	23	280	280
317ha	炭そ病					－		
	疫病					－		
	うどんこ病	0	1	11	52	64	280	280
	斑点細菌病					－		
	モザイク病					－		
	灰色かび病					－		
	褐斑病			0	9	9	280	280
	菌核病					－		
	黄化えそ病		0	7	54	61	280	560
	退緑黄化病	9	20	43	73	145	280	560
	アザミウマ類				2	2	280	560
	ハダニ類			0	9	9	280	280
	アブラムシ類					－		
	コナジラミ類			1	65	66	280	560
	ハモグリバエ類			0	14	14	280	560
	ワタヘリクロノメイガ					－		
	オオタバコガ					－		
	ハスモンヨトウ		0	3	30	33	280	280
	食葉性チョウ目幼虫				0	－	280	280
冬春きゅうり	べと病	9	21	43	65	138	240	720
245ha	炭疽病					－		
	疫病					－		
	うどんこ病				7	7	240	720
	斑点細菌病					－		
	モザイク病					－		
	灰色かび病					－	240	720
	褐斑病		0	2	22	24	240	720
	菌核病				0	－		
	黄化えそ病				0	－		
	退緑黄化病				2	2		
	アザミウマ類				2	2	240	720
	ハダニ類		0	5	32	37	240	720
	アブラムシ類			0	15	15	240	720
	コナジラミ類				2	2	240	720
	ハモグリバエ類	0	2	10	34	46	240	720
	ワタヘリクロノメイガ					－		
	オオタバコガ					－		
	ハスモンヨトウ					－		
	食葉性チョウ目幼虫					－	240	240

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
ブロッコリー	黒腐病					－		
1,202ha	べと病				17	17		
	アブラムシ類					－	1000	1000
	コナガ					－	1000	1000
	ハスモンヨトウ				17	17	1000	1000
秋冬ねぎ	さび病				6	6	930	2790
1,590ha	黒斑病	0	8	71	344	423	930	2790
	萎縮病					－		
	べと病					－	930	2790
	軟腐病					－	930	930
	白絹病					－	930	930
	シロイチモジヨトウ	232	319	410	366	1327	930	2790
	ハスモンヨトウ	1	8	50	215	274	930	2790
	アブラムシ類				6	6	930	930
	ネギハモグリバエ					－		
	ネギアザミウマ	0	8	71	344	423	930	2790
	ネギコガ	269	676	524	114	1583	930	2790
さといも	汚斑病					－		
721ha	モザイク病					－		
	疫病					－	300	300
	アブラムシ類	16	74	189	254	533	300	300
	ハダニ類					－	300	300
	ハスモンヨトウ				36	36	300	300
ほうれんそう	べと病					－	1700	1700
1,718ha	立枯病					－		
	アブラムシ類				24	24	200	200
	ハスモンヨトウ					－	200	200
	ヨトウガ					－	200	200
	ケナガコナダニ					－	200	200
	シロオビノメイガ					－	200	200
いちご	灰色かび病				1	1	95	190
95ha	うどんこ病	0	1	4	15	20	95	190
	モザイク病					－		
	炭疽病					－	95	190
	萎黄病				0	－	95	95
	アブラムシ類		0	2	16	18	95	190
	アザミウマ類	6	7	12	17	42	95	285
	コナジラミ類				1	1	95	95
	ハダニ類	0	1	6	20	27	95	285
	ハスモンヨトウ			0	11	11	95	95
	チョウ目害虫				1	1	95	95

（４）令和７年度の病害虫発生予察情報等の発信

ア　病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況

（ア）警　報

なし

（イ）注意報

発表年月日	内容
令和 7年 5月16日	ムギ類、赤かび病
令和 7年 7月 3日	イネ、イネカメムシ
令和 7年 7月23日	イネ、イネカメムシ
令和 7年 7月29日	イネ、斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ）
令和 7年 8月22日	ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ
令和 7年 9月1日	ダイズ・野菜類・花き類、オオタバコガ
令和 7年 9月22日	ネギ・ダイズ、ブロッコリー・その他野菜類、シロイチモジヨトウ
令和 7年10月 9日	植木類・チャ・果樹類・宿根アスター等、チュウゴクアミガサハゴロモ
令和 7年10月27日	野菜類・花き類、チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

（ウ）特殊報

発表年月日	内容
令和 7年 5月19日	キウイフルーツかいよう病（Psa３系統）の発生について
令和 7年 9月 5日	ナスこうがい毛かび病の発生について
令和 8年 1月19日	*Alternaria japonica* Yoshii によるブロッコリー黒すす症状の発生について

（エ）発生予報

予報月	発表年月日	予報月	発表年月日
5月	令和 7年 4月24日	11月	令和 7年10月28 日
6月	令和 7年 5月30 日	12月	令和 7年11月26日
7月	令和 7年 6月26日	1月	令和 7年12月23日
8月	令和 7年 7月30日	2月	令和 8年 1月27日
9月	令和 7年 8月26日	3月	令和 8年 2月27日
10月	令和 7年 9月25日	4月	令和 8年 3月23日

（オ）注意を促すための情報

a　病害虫防除情報

発表無し

b　調査結果等

病害虫の適期防除を促すため調査結果をホームページ上で発信した。

発 表 時 期	内　　容
令和７年 ４月～ 令和８年３月	各種フェロモントラップ等データ
令和７年 ５月 30 日	麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果
令和７年 6～8 月	いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況
令和７年 6～7 月	気象予測データによるウンカ類飛来予測状況 （トビイロウンカ、セジロウンカ）
令和７年 ７月 23 日	いもち病発生状況調査結果
令和７年 ７月 23 日	水稲の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果
令和８年 １月 16 日	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果
令和８年 ３月 19 日	果樹カメムシ類の越冬密度調査結果
令和８年 ３月 26 日	イネカメムシ越冬状況調査結果

c　注意喚起・啓発資料

農業者の他、一般県民に対しても病害虫に対する注意喚起や対策を呼び掛ける啓発資料を作成し、ホームページに掲載するとともに紙媒体での配布を行った。

発表年月日	作物別	内　　容
令和７年 ７月 28 日	果樹・茶樹・植木類・花き等	チュウゴクアミガサハゴロモが各地で多発しています
令和７年 11 月 13 日	果樹・茶樹・植木類・花き等	チュウゴクアミガサハゴロモが各地で多発しています

イ　発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病害虫発生現況報告等の外部への提供

国（植物防疫課）、関東農政局及び日本植物防疫協会に、発生予察情報（発生予報、注意報等）、病害虫発生現況報告等を提供した。

植物防疫に関するデータベースサービスであるＪＰＰ－ＮＥＴ（運用主体：日本植物防疫協会）によって、病害虫防除に関する情報交換を国及び他県等と行い、発生予察及び防除指導に活用した。

３　病害虫防除指導

（１）病害虫防除手法等に関する相談

生産者、一般県民、県等指導機関（農協、市町村、農林振興センター）、その他団体や業者等から問い合わせ、相談、診断依頼のあった約 125 件の病害虫診断や防除手法に関する案件に対応した。

相談の種類	相談者区分（人数）				
	生産者	一般	県等指導機関	その他(業者･団体等)	計
病害虫（水稲・麦・大豆）	11	3	25	13	52
病害虫（野菜）	15	2	6	2	25
病害虫（果樹）	7	3	6	1	17
病害虫（茶）	0	0	0	0	0
病害虫（花植木）	4	8	10	1	23
農薬・その他	0	7	0	1	8
計	37	23	47	18	125

（２）県内市町村の病害虫防除協議会等における指導

１）　児玉地域水稲広域防除協議会設立にかかる指導

日　時：令和 8 年 3 月 19 日

対象者：関係会社、町、農業共済組合、ＪＡ関係職員、県等指導機関職員

内　容：気象経過、麦生育ステージと農薬散布時期の検討、適期防除指導

（３）農薬展示ほ設置等に関する指導

（一社）埼玉県植物防疫協会が実施した農薬展示ほ等の設置に関し、設計の作成及び成績検討会において、農薬の防除効果の検証および結果の考察等に協力し、必要な助言等を行った。

（４）研修会等の指導

１）　県農林部主催の会議における病害虫防除指導

ア　イネカメムシ対策会議（農産物安全課）

日　時：①令和 7 年 4 月 7 日（月）
②令和 7 年 6 月 12 日（木）
③令和 7 年 11 月 21 日（金）

対象者：農協・JA 全農さいたま職員、市町村職員、普及指導員、
県農林部関係課職員、県農業技術研究センター職員　各回計約 200 人

内　容：イネカメムシの発生生態・発生状況・防除対策について

イ　水稲高温対策技術研修会（生産振興課・埼玉うまい米づくり推進協議会）

日　時：令和 7 年 6 月 16 日（月）

対象者：農協・JA 全農さいたま職員、普及指導員、県農林部関係課職員、
県農業技術研究センター職員　約 60 人

内　容：イネカメムシ防除対策指導

２）　令和７年度農薬応用研修会
日　時：令和７年５月 21 日（木）　ＪＡ全農さいたま東部総合センター（久喜市）
対象者：埼玉県内ＪＡの営農指導中堅職員　20 人
内　容：水稲・ダイズ・果樹のカメムシ類　発生動向と防除対策

３）　作物技術連携会議における病害虫防除指導
ア　日　時：令和７年５月 30 日（金）
対象者：普及指導員、県農林部関係課職員、県農業技術研究センター職員　約 20 人
内　容：イネカメムシの防除対策について
イ　日　時：令和８年３月 16 日（月）
対象者：普及指導員、県農林部関係課職員、県農業技術研究センター職員　約 20 人
内　容：イネカメムシの越冬状況等について

４）　埼玉県農業大学校の講義における講師
日　時：令和７年６月３日(火)、11 月 20 日（木）
対象者：農業大学校学生等　20 人
内　容：講義科目「総合的病害虫管理」
病害虫の発生消長や予察情報の活用方法、天気図の見方

５）　ＪＡ埼玉ひびきの「ねぎ一元出荷組合」における研修会講師
日　時：令和７年６月 13 日（金）
(埼玉ひびきの農協本店　ひびきのホール：本庄市)
対象者：生産者、JA 等職員、県職員等　50 人
内　容：高温期のねぎ病害対策について

６）　病害虫防除員・防除協力員研修会の実施
日　時：令和７年７月 10 日（木）　農業技術研究センター久喜試験場、加須市水田
対象者：病害虫防除員・病害虫防除協力員等　15 人
内　容：①イネカメムシの発生生態と防除対策
②水田における害虫すくい取り調査の実習

７）　普及指導員を対象とした専門研修「病害虫」における講師
日　時：令和７年７月 15 日（火)、11 月 21 日（金）　農業技術研究センター（本所）
対象者：農林振興センター（技術普及担当）職員等　約 20 人
内　容：①病害虫防除所の業務と発生予察事業　②農薬取締法の概要
③農薬の適正使用、保管　④AC-Finder について

８）　農薬メーカー社員を対象とした研修会講師
日　時：令和７年７月 25 日(金)（ホテルシティーフィールドかごはら：熊谷市）
対象者：農薬メーカー社員　約 15 人
内　容：イネカメムシの発生生態と防除対策

９）　寄居町花植木出荷部会における研修会講師
日　時：令和７年７月 31 日(木)（ＪＡふかや用土プラザ：大里郡寄居町）
対象者：生産者、ＪＡ職員、県職員　約 20 人
内　容：チュウゴクアミガサハゴロモの発生生態と防除

１０）　花植木専門研修における研修会講師
日　時：令和７年８月４日(月)（花と緑の振興センター：川口市）
対象者：生産者、県職員等　約 50 人
内　容：埼玉県内で発生している侵入害虫チュウゴクアミガサハゴロモの現状

１１）　埼玉県作物技術研究会研修会における講師
日　時：令和７年８月 23 日(土)（大宮ソニックシティ：さいたま市大宮区）
対象者：県職員等　約 20 人
内　容：イネカメムシの発生状況、今後注意すべき水稲病害虫

１２）　農薬メーカー社員を対象とした研修会講師
日　時：令和７年９月 30 日(火)（ロイヤルホテルすずき：熊谷市）
対象者：農薬メーカー社員　約 15 人
内　容：イネカメムシの発生生態と防除対策

１３）　埼玉県農薬適正使用アドバイザー研修会における講師
日　時：令和７年 10 月 31 日(金)（埼玉県県民健康センター：さいたま市浦和区）
対象者：農薬適正使用アドバイザー等　約 300 人
内　容：病害虫の発生生態と防除

１４）　熊谷市病害虫防除協議会研修会
日　時：令和８年２月４日（水）（熊谷市妻沼中央公民館：熊谷市）
対象者：生産者、JA 職員、熊谷市職員、県農林部職員等　約 80 人
内　容：斑点米カメムシ類の発生生態と防除対策

１５）　令和７年度埼玉県植物防疫研修会における講師
日　時：令和８年２月 20 日（金）（埼玉県農業共済会館：さいたま市大宮区）
対象者：農薬メーカー、ＪＡ等職員、県職員等　60 人
内　容：近年多発のチョウ目害虫について

（５）防除対策資料等の作成
イネカメムシ防除対策、農薬適正使用推進など農産物安全課の資料作成に協力し、現地の防除指導に活用した。

４　侵入警戒有害動植物の侵入調査

（１）フェロモントラップ調査

調査対象有害動植物	調査対象作物	設置場所	設置地点数	調査期間（月～月）	調査回数／調査時期	延べ調査回数	調査結果
トマトキバガ	トマト	ほ場	4	4月～7月 9月～3月	月2回／栽培開始～収穫終了1月後	88	全地点誘殺

（２）目視調査

調査対象有害動植物	調査対象作物	調査場所	調査地点数	調査期間（月～月）	調査回数／調査時期	延べ調査回数	調査結果
Meloidogyne enterolobii	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
Columnea latent viroid	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
Pepper chat fruit viroid (PCFVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
トマト退緑萎縮ウイロイド (TCDVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
Tomato apical stunt viroid (TASVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
Pepino mosaic virus (PepMV)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
Tomato brown rugose fruit virus (ToBRFV)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
Tomato mottle mosaic virus	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
Tomato leaf curl New Delhi virus (ToLCNDV)	トマト	ほ場	3	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	3	疑義症状なし
バナナネモグリセンチュウ	トマト	ほ場	3	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	3	疑義症状なし
コロンビアネコブセンチュウ栽植用植物	トマト	ほ場	2	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	2	疑義症状なし
ジャガイモやせいもウイロイド (PSTVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
火傷病	なし	ほ場	3	4月～7月	2回／開花後1-2週間及び果実形成期	6	疑義症状なし
カンキツネモグリセンチュウ	トマト	ほ場	4	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	4	疑義症状なし
Xylella fastidiosa	なし	ほ場	3	4月～9月	1回／展葉期～果実肥大期	3	疑義症状なし
イネミイラ穂病菌、イネクキセンチュウほか	いね	ほ場	2	7月～8月	1回／出穂前後	2	疑義症状なし
テンサイシストセンチュウ	ほうれんそう	ほ場	3	9月～2月	1回／生育期間中	3	疑義症状なし
ヘシアンバエ	むぎ	ほ場	3	4月～5月 1月～3月	1回／生育期間中	3	疑義症状なし
Ramularia collo-cygni	むぎ	ほ場	4	4月～5月	1回／開花期以降	4	疑義症状なし
スイカ果実汚斑細菌病菌	きゅうり	ほ場	5	4月～6月 9～3月	2回／果実肥大期～収穫期	10	疑義症状なし

（３）新規病害虫まん延防止対策調査概要

ア　ウメ輪紋ウイルス（ＰＰＶ）の県内調査

平成 21 年 4 月に東京都青梅市のウメで、国内で初めてウメ輪紋ウイルス（*Plum pox virus*　以下ＰＰＶ）の感染が確認された。国は、国内のモモやスモモ等のサクラ属の果樹への被害を防止するため、植物防疫法（昭和 25 年法律第 151 号）に基づく緊急防除（防除期間を令和 3 年 3 月 31 日まで）の実施等により、本ウイルスの根絶に努めてきた。期間の終了をもって緊急防除は終了となった。

本県の清浄性確保のため、令和４年度まで果樹生産地域の調査を実施していたが、本病の拡がりは確認されなかったため、農業技術研究センターのほ場内での確認調査に移行して継続している。

令和７年度調査では、本病の発生は認められなかった。

イ　キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の調査

キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統は、平成 26 年 5 月に愛媛県において国内で最初の発生が確認され、平成 30 年には、国内で延べ 16 都県の発生が確認されている。

本県では、「キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の防除対策マニュアル」（平成 30 年 5 月 22 日改訂）に基づき、調査を実施している。

令和 7 年度は県内で初めて本病の発生が確認されたため、特殊報第１号を発表し警戒を強めたが、確認された園地以外では発生は認められなかった。

５　農薬安全使用対策

（１）農薬危被害防止対策

ア　農薬の安全かつ適正な使用の推進において、農薬使用の助言者として「農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター」を県で認定するにあたり、効果的な農薬の使用方法、主要農作物における病害虫防除等の指導を行った。

農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター認定者数（人）

項目＼年度	3 年度	4 年度	5 年度	6 年度	7 年度
農薬適正使用アドバイザー	267	222	231	244	267
農薬指導マスター	200	186	152	139	180

イ　残留農薬スクリーニング検査結果等に基づき、農薬の安全かつ適正な使用を図るため、令和７年度は４件の指導を行った。

（２）農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果

ア　届出件数

農薬取締法第 17 条第 1 項の規定に基づき、農薬を販売する者から提出された農薬販売届（開設・増設・変更・廃止）を受理した。

令和７年度の届出数は 474 店舗であった。

令和７年度届出店舗数（令和７年４月～令和８年３月）

業種＼項目	新規届※１	増設届	変更届	廃止届	計	販売者数	販売店舗数
農業協同組合	0	5	5	2	12	19	136
農　薬　卸※２	7	1	15	1	24	93	118
薬局・医薬品販売業	8	29	174	28	239	96	1, 232
農業資材販売※３	3		2	3	8	155	161
ホームセンター	0	10	51	2	63	20	183
インターネット	3		1		4	41	42
そ　の　他※４	22	21	61	20	124	200	465
計	43	66	309	56	474	624	2, 337

※１　令和８年１月から開設届に改称した

※２　農薬卸兼小売業者は農薬卸にカウントした。

※３　肥料商、種苗商等を含む。

※４　その他の約半分はスーパー、ディスカウントストアである。

イ　農薬販売者に対する立入検査結果

農薬の適正な販売を確保するため、農薬取締法第 29 条の規定に基づき、農薬販売者に対する立入検査（233 件）を行った。

検査の結果、全体の 26. 6%に当たる延べ 62 店舗において適切でない事項が認められ、是正指導を行った。

令和７年度検査項目及び不備が認められた店舗数（立入検査）　　（単位：延べ、実店舗数）

業種	立入検査件数	検査事項														不適数（延べ数）	検査結果(実数)			措置(実数)	
		新規・増設届	変更届	廃止届	農薬の取り扱い						保管管理			帳簿			指導事項無	指導事項有	その他（店舗無、廃業等）	文書指導	口頭指導
					無登録農薬	不適正表示	虚偽宣伝	登録のない除草剤	有効期限切れ	分割・移し替え	施錠	食品等との分離	その他	一般農薬（水質汚濁性農薬を除く）※1	水質汚濁性農薬						
農業協同組合	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0
農薬卸	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
薬局・医薬品販売業	154	0	0	0	0	0	0	29	10	0	0	1	0	0	0	40	116	38	0	0	38
農業資材販売	7	1	0	1	0	0	1	0	3	0	1	0	0	1	1	9	4	3	0	0	3
ホームセンター	12	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	11	1	0	0	1
インターネット	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1
その他	40	1	2	1	0	0	0	3	1	0	0	0	0	3	0	11	32	8	0	0	8
計	233	2	3	2	0	0	1	33	14	0	1	1	0	4	1	62	182	51	0	0	51

ウ　農薬販売者に対する郵送調査結果

農薬販売者に対してより幅広く検査を実施するために、調査票を郵送して回答を求める調査を行った。

令和７年度は 431 店舗に対して郵送調査を実施し、全店舗から回答を得た。

令和７年度検査項目及び不備が認められた店舗数(郵送調査)　　（単位：延べ、実店舗数）

業種	郵送調査回答数	検査事項														不適数（延べ数）	未回答・宛所不明	検査結果（実数）		措置(実数)	
		新規・増設届	変更届	廃止届	農薬の取り扱い						保管管理			帳簿				指導事項無	指導事項有	電話による口頭指導	郵送調査の結果、届出が提出された等
					無登録農薬	不適正表示	虚偽宣伝	登録のない除草剤	有効期限切れ	分割・移し替え	施錠	食品等との分離	その他	一般農薬（水質汚濁性農薬を除く）※1	水質汚濁性農薬						
農業協同組合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
農薬卸	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
薬局・医薬品販売業	409	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	408	1	0	1
農業資材販売	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
ホームセンター	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
インターネット	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
その他	15	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	14	1	0	1
計	431	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	429	2	0	2

６　病害虫関係資料

（１）令和７年度発表の病害虫発生予察注意報等

ア　注意報（第１号～第９号）

イ　特殊報（第１号～第３号）

ウ　その他の病害虫に関する注意喚起情報（チュウゴクアミガサハゴロモ）

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第１号

令和７年５月１６日
埼玉県病害虫防除所

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、４月１日から４月30日までの積算日数が11日（平年同期９日）と過去10年で４番目に多く、５月１日から13日までの積算日数は11日に達しています。なかでも、４月24日から５月13日までの20日間では子のう胞子飛散好適日の出現が16日に達しており、11月下旬以降に播種した小麦が最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致しています。また、播種が12月上中旬となった小麦ほ場では５月上旬から開花期となっており、降雨に遭遇する頻度が高くなっています。

また、当所が実施している５月上中旬の病害虫発生状況調査では、複数の調査地点で各麦種とも本病の発生が見られます。

今後、５月下旬にかけて気温の高い曇雨天が見込まれ、病原菌が増殖しやすい状況のため、本病の急速な蔓延が懸念されます。

小麦で発生が見られるほ場では、追加の防除を実施しましょう。

作 物 名　ムギ類
病害虫名　赤かび病

１　注意報の内容

（１）発生地域　　県内全地域

（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠

（１）本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、４月１日から４月 30 日までの積算日数が 11 日（平年同期９日）と過去 10 年で４番目に多くなっている。また、５月に入ってからも胞子飛散好適日の出現が多く、なかでも４月 24 日から５月 13 日までの 20 日間では 16 日に達しており、11 月下旬以降に播種した小麦では最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致している。

（２）当所が実施している５月上中旬の病害虫発生状況調査では、複数の調査地点で各麦種において本病の発生を確認している。

（３） ５月１日以降も降雨日が多く病原菌が増殖しやすい状況で、播種が 12 月上中旬となった小麦では開花期に降雨に遭遇する頻度が高くなっている。

（４）気象予報によれば、５月 16 日以降も多発好適日になりやすい気温の高い曇雨天があることが予想されており、本病の急速な蔓延と病勢進展が懸念される。

３　防除対策等

（１）現在発生が見られる小麦ほ場では、蔓延防止のため収穫前日数及び使用回数に注意して、早急に薬剤による追加防除を実施する。

（２）刈遅れにより麦類が降雨に当たると、本病の進展等を助長する原因となるため、適期に確実に収穫する。

（３）収穫前にほ場を確認し、赤かび病の発生が多い場合や発生ほ場で倒伏が生じている場合は、赤かび病や倒伏の被害を受けていない他の麦とは分けて収穫する。

（４）収穫に用いる農機やコンテナ等は、作物残さがないよう清掃し清潔に保つ。輸送に当たっては、乾燥した状態のコンテナ等を使用し、急な降雨による水濡れ防止のために覆い等を用意する。

（５）収穫後、適切な水分まで乾燥する間に赤かび病菌が増殖してしまう場合があるため、収穫した麦は可能な限り速やかに乾燥調製施設に搬入し乾燥させる。

写真1　小麦の被害穂（本年5月、左は発病初期、中央・右は胞子塊を生じた小穂）

写真２　穂に生じたサーモンピンクの胞子塊

写真３　六条大麦の被害穂

※写真２・３は、過去の多発生時の発病穂を参考として掲載

表　ムギ類赤かび病の防除薬剤例（地上散布及び無人航空機散布両対応）

薬　剤　名	FRAC コード	対象作物	使用時期	使用回数
ファンタジスタフロアブル	11	小麦	収穫 14 日前まで	３回以内
トップジンMゾル	1	小麦	収穫 14 日前まで	出穂期以降は２回以内
ミラビスフロアブル	7	小麦	収穫７日前まで	２回以内
シルバキュアフロアブル	3	小麦	収穫７日前まで	２回以内
ワークアップフロアブル	3	麦類	収穫７日前まで	３回以内

（使用基準は令和７年５月１４日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。

2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。

3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。

4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和７年５月１日～８月３１日）

４　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第２号

令和７年７月３日
埼玉県病害虫防除所

県内に設置の水稲用乾式予察灯において、イネカメムシが６月30日までの合計で28頭誘殺されており、多発した昨年の同時期における誘殺虫数合計(24頭)と同等になっています。
一方、県北東部や県東部の早期栽培「コシヒカリ」等で、出穂前からイネカメムシ成虫が多数侵入しています。
また、農業技術研究センター内の水田でも、５月中旬移植のほ場で多数の成虫が捕獲されているほか、病害虫防除所の定点調査水田でも複数の地域で成虫の侵入が確認されています。
高温の影響により水田での初発確認時期が昨年より早くなっており、防除適期を逸しないよう十分な注意が必要です。

作 物 名　イネ
病害虫名　イネカメムシ

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）県内に設置している水稲用乾式予察灯６基のうち１基で５月中旬に成虫の初誘殺を確認した。その後、これら６基の予察灯における６月 30 日までの誘殺数合計は 28 頭に達し、本虫が多発した昨年同時期の誘殺数合計（24 頭）と同等になっている。
（２）県北東部及び東部の早期栽培「コシヒカリ」等で、６月下旬、出穂前からイネカメムシの集中的な侵入が報告されている。また、本県農業技術研究センター（熊谷市）の試験研究水田で、５月中旬移植のほ場において多数の成虫侵入が確認され、７月１日の調査では、径 36cm 捕虫網 20 回振りにおいて 46 頭（３地点の平均）が捕獲された。
（３）病害虫防除所の調査定点水田 14 地区のうち複数の地区において成虫の侵入を確認している。初発確認時期は昨年より約一週間早く、６月下旬である。
（４）７月３日気象庁発表の季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か少ないと予想されている。今後も本虫の発生に好適な条件が継続し、多発生が予測される。

3　防除対策等

（1）本虫はイネの出穂後に穎花および籾の基部を激しく加害するため、株当たりの寄生頭数が少ない場合でも大きな被害につながる可能性がある。

（2）出穂期～開花期頃に集中的な加害を受けると著しい不稔が発生し、大幅な減収につながる。出穂期～穂揃期（不稔対策）及び出穂期の８～14 日後（斑点米対策）の２回、薬剤による防除を実施する。

（3）本虫は、イネの出穂前は水田周辺のイネ科雑草の穂を餌として利用する。とくに、早期栽培や早植栽培ではこれらイネ科雑草が重要な餌資源となるため、イネの出穂前の除草を徹底する。

（4）周辺より出穂の早い品種・作型、あるいは周辺より出穂の遅い品種・作型では、被害が集中しやすいので防除を徹底する。なお、出穂前から多数の成虫が侵入している場合には出穂前にも防除を行う。

（5）農薬による蜜蜂への影響を軽減させるために、散布は蜜蜂の活動が最も盛んな時間帯（午前８時～12 時まで）を避け、可能な限り早朝又は夕刻に行うなどの対策を講じる。

写真1　成虫(本年７月)

写真2　成虫(昨年8月)

写真3　本虫による基部斑点米

写真４　本年６月末、出穂前に侵入し交尾中の成虫
（提供：埼玉県農業技術研究センター農業革新支援担当）

写真5　5齢幼虫
（昨年9月）

表　イネカメムシの防除薬剤例（地上防除・無人航空機防除両対応）

薬　剤　名	IRAC コード	使用時期	使用回数
キラップフロアブル	2B	収穫 14 日前まで	２回以内
スタークル液剤 10	4A	収穫７日前まで	３回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫７日前まで	３回以内
スミチオン乳剤	1B	収穫 21 日前まで	２回以内
スタークル１キロＨ粒剤	4A	収穫７日前まで	３回以内

（使用基準は令和７年７月３日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。

2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。

3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。

4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和７年５月１日～８月３１日）

4　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第３号

令和７年７月２３日
埼玉県病害虫防除所

県内に設置の水稲用乾式予察灯において、イネカメムシが７月14日までの合計で1,020頭誘殺されており、多発した昨年の同時期における誘殺虫数合計(491頭)をすでに大きく超えています。
一方、県内各地の早期栽培「コシヒカリ」等で、イネカメムシ成虫が多数侵入しています。
また、病害虫防除所の定点調査水田でも複数の地域で成虫の侵入が確認されており、多数の成虫の侵入が確認されている地点もあります。
高温の影響により、今後、第１世代幼虫・成虫の発生時期が早まる可能性も考えられることから、防除適期を逸しないよう十分な注意が必要です。

作 物 名　イネ
病害虫名　イネカメムシ

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）本年７月３日の本虫に関する注意報発表後も多発が継続し、県内に設置している水稲用乾式予察灯６基における７月 14 日までの誘殺数合計は 1,020 頭に達しており本虫が多発した昨年同時期の誘殺数合計（491 頭）を大きく上回っている。
（２）昨年同時期は本虫の誘殺を確認した水稲用乾式予察灯は３地点であったが、本年は全６地点で誘殺が確認されている。１日で 200 頭以上の誘殺地点もある。
（３）県内の早期栽培「コシヒカリ」等で、越冬世代成虫の集中的な侵入が相次いで確認されている。すでに産卵と幼虫の発生も確認されている（写真１～４）。
（４）病害虫防除所の調査定点 14 水田のうち約 36％で成虫の侵入を確認している。出穂期に多数が侵入した水田では、７月中旬、径 36cm 捕虫網 20 回振りにおいて成虫 32 頭・幼虫 13.7 頭の計 45.7 頭が捕獲された（水田内３地点の平均）。
（５）主に７月上中旬に病害虫防除所が実施した雑草地・畦畔等における斑点米カメムシ類一斉調査で、イネカメムシが捕獲された地点の割合が、昨年の 9.5％（21 地点中の２地点）に対し本年は 26.9％（26 地点中の７地点）と高い。
（６）７月 17 日気象庁発表の季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か少ないと予想されている。今後も本虫の発生に好適な

条件が継続し、多発生が予測される。

3　防除対策等

（１）本虫はイネの出穂後に穎花および籾の基部を激しく加害するため、株当たりの寄生頭数が少ない場合でも大きな被害につながる可能性がある。

（２）出穂期～開花期頃に集中的な加害を受けると著しい不稔が発生し、大幅な減収につながる。出穂期～穂揃期（不稔対策）及び出穂期の８～14 日後（斑点米対策）の２回、薬剤による防除を必ず実施する。

（３）本虫は、休耕地や雑草地、水田内外のイネ科雑草の穂も餌として利用する（写真６・７）。イネの出穂前や登熟期の後半以降には、これらイネ科雑草が重要な餌資源となるため除草を徹底する。

（４）周辺より出穂の早い品種・作型、あるいは周辺より出穂の遅い品種・作型では、被害が集中しやすいので防除を徹底する。なお、出穂前から多数の成虫・幼虫が認められる場合には出穂前にも追加で防除を行う。

（５）農薬による蜜蜂への影響を軽減させるために、散布は蜜蜂の活動が最も盛んな時間帯（午前８時～12 時まで）を避け、可能な限り早朝又は夕刻に行うなどの対策を講じる。

写真１　穂を加害する成虫

写真２　卵塊

写真３　幼虫（すくい取り試料）

写真４　多数の成虫が侵入した水田

写真５　本虫による基部斑点米

写真６　水田内のノビエの穂に群がる成虫

写真７　メヒシバの穂を吸汁する成虫

※　掲載写真は、写真５を除き本年７月の撮影

表　イネカメムシの防除薬剤例（地上防除・無人航空機防除両対応）

薬　剤　名	IRAC コード	使用時期	使用回数
キラップフロアブル	2B	収穫 14 日前まで	２回以内
スタークル液剤 10	4A	収穫７日前まで	３回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫７日前まで	３回以内
スミチオン乳剤	1B	収穫 21 日前まで	２回以内
スタークル１キロＨ粒剤	4A	収穫７日前まで	３回以内

（使用基準は令和７年７月２３日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。

2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。

3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。

4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和７年５月１日～８月３１日）

４　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第４号

令和７年７月２９日
埼玉県病害虫防除所

県内各地で実施しているイネ斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地における発生調査の結果、１調査地点当たりの発生量が74.3頭と平年(19.7頭)の約3.8倍で、過去10年で最も多くなっています。

多くの種で捕獲虫数が多く、特にアカスジカスミカメ及びイネホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシが平年比で約２～12倍と大量に捕獲されており、イネの斑点米の発生が懸念されますので、出穂期から乳熟期にかけての防除と定期的な除草を行ってください。

なお、出穂前２週間と出穂後２週間の、生息地（畦畔、雑草地、休耕田など）の除草は、カメムシ類を水田に追い込み、斑点米の発生を助長させるので避けましょう。

作 物 名　イネ
病害虫名　斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ）

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）病害虫防除所で７月中旬を基準に毎年実施しているイネ斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査の結果、1 調査地点当たりの発生量が 74.3 頭と平年(19.7 頭)の約 3.8 倍で、過去 10 年で最も多くなっている（図）。
（２）昨年は 1 調査地点当たりの最大捕獲数は 72 頭であったが、本年は 26 調査地点のうち 6 地点で 100 頭以上が捕獲され、300 頭以上捕獲された地点もある。
（３）特に捕獲数が多かった４種の平年比は、アカスジカスミカメ(12.4 倍)、クモヘリカメムシ(5.1 倍)、ホソハリカメムシ(2.6 倍)、イネホソミドリカスミカメ(1.9 倍)となっており、約２～12 倍となっている（表）。
（４）7 月 24 日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されており、今後も斑点米カメムシ類の発生に好適な条件が継続し、多発生が予測される。

３　防除対策等

（１）本県の水田畦畔等で捕獲される斑点米カメムシ類は、アカスジカスミカメとイネホソミドリカスミカメが大多数を占めている。両種は、成虫の移動能力が高いため、広域的な一斉防除が必要である。

（２）クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシなど比較的大型のカメムシ類は、寄生頭数が少ない場合でも大きな被害につながる可能性があるため、これらの大型種を本田で確認した場合は、必ず薬剤による防除を実施する。

（３）生息場所の水田畦畔や休耕田等の雑草管理（除草）を丁寧に行う。ただし、斑点米カメムシ類を水田へ追い込み被害が拡大する恐れがあるので、出穂前２週間と出穂後２週間は除草を行わない。

（４）周辺より出穂の早い品種・作型、あるいは周辺より出穂の遅い品種・作型では、被害が集中しやすいので防除を徹底する。

（５）イネカメムシの防除対策については一般的な斑点米カメムシ類と異なるため、７月 23 日発表の令和７年度病害虫発生予察注意報第３号を参照して対応する。

（６）農薬による蜜蜂への影響を軽減させるために、蜜蜂の活動が最も盛んな時間帯（午前８時～12 時まで）を避け、可能な限り早朝又は夕刻に行うなどの対策を講じる。

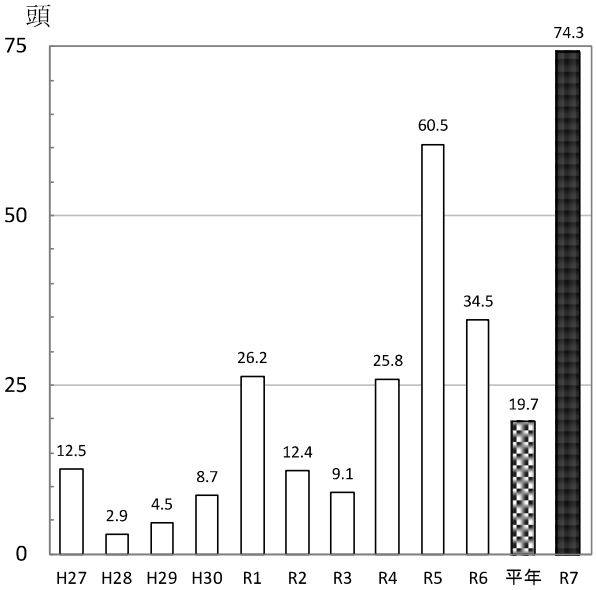


図 イネ斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果（１調査地点当たりの発生量）

表 イネ斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果（種ごとの発生量）

種名	本年※1	平年※2	平年比※3
アカスジカスミカメ	41.9	3.4	**12.4**
イネホソミドリカスミカメ	24.7	13.0	**1.9**
ホソハリカメムシ	3.9	1.5	**2.6**
クモヘリカメムシ	0.5	0.1	**5.1**
シラホシカメムシ	1.1	0.4	3.1
トゲシラホシカメムシ	0.1	0.1	1.2
その他カメムシ	2.0	0.6	3.6

※１　捕獲虫数の平均値（頭/地点）

※２　過去 10 年間の平均値（平成 27 年～令和６年）

※３　平年比＝本年/平年

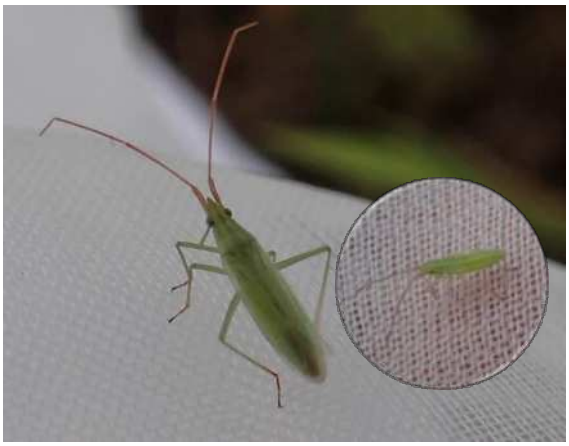


写真1　イネホソミドリカスミカメ成虫・幼虫

写真2　アカスジカスミカメ成虫・幼虫

写真3　ホソハリカメムシ成虫・幼虫

写真4　クモヘリカメムシ成虫・幼虫

表　稲のカメムシ類の防除薬剤例（地上防除・無人航空機防除両対応）

薬　剤　名	IRAC コード	使用時期	使用回数
キラップフロアブル	2B	収穫 14 日前まで	2 回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫 7 日前まで	3 回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫 7 日前まで	2 回以内
スタークル１キロＨ粒剤	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内

（使用基準は令和７年７月２９日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。

2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。

3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。

4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和７年５月１日～８月３１日）

4　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第５号

令和７年８月２２日
埼玉県病害虫防除所

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が、調査４地点で多く、平年及び準平年との比較ができる２地点で平年を大きく上回っています。この２地点では多発した昨年をも上回っています。すでに、ネギやダイズで幼虫による食害が確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として６０種類以上の作物を加害するため、今後定植期を迎えるブロッコリー等での被害も懸念されます。

特にネギでは幼虫が葉身内へ食入してしまうと防除が困難となるため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作 物 名　ネギ、ブロッコリー、ダイズ
病害虫名　シロイチモジヨトウ

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）病害虫防除所が設置したシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、４地点で多い。平年及び準平年との比較が可能な２地点では平年を大きく上回って推移し、注意報を出した昨年を上回る増加傾向が認められる（図）。
（２）８月 21 日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は高いと予想されており、今後の本虫の活動がさらに活発になることが予想される。
（３）ネギおよびダイズほ場において、幼虫による著しい食害が確認されている。今後、定植期となるブロッコリー等の他作物でも被害拡大が懸念される。

３　防除対策等
（１）早期発見に努め、卵塊や孵化直後の１齢幼虫や若齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。
（２）幼虫が作物内に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。

（３）老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、抵抗性害虫の発生を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける（表１～３）。

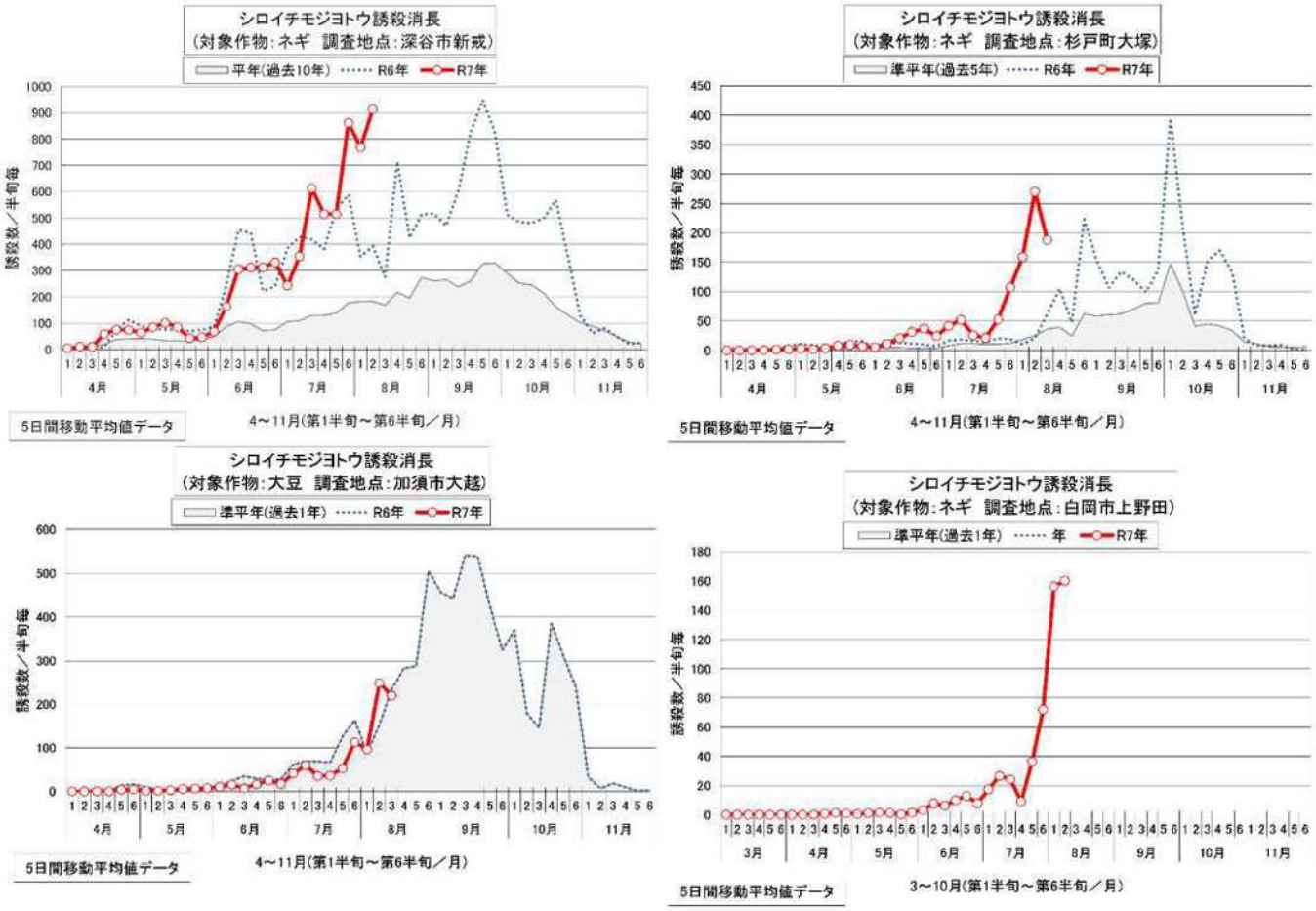


図　シロイチモジヨトウ誘殺消長（左上：深谷市、右上：杉戸町、左下：加須市、右下：白岡市※）※白岡市はＲ７年からの調査のため当年データのみ

写真１　ネギを食害する老齢幼虫

写真２　ネギの葉身内に食入した老齢幼虫

写真３　幼虫によるネギの著しい食害

写真４　ダイズの葉を食害する老齢幼虫

写真５　ダイズ葉裏に群生する若齢幼虫

写真６　ブロッコリー葉を食害する老齢幼虫

表１　ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
アディオン乳剤	３Ａ	収穫７日前まで	３回以内
スピノエース顆粒水和剤	５	収穫３日前まで	３回以内
アファームエクセラ顆粒水和剤	６、１５	収穫７日前まで	３回以内
コテツフロアブル	１３	収穫７日前まで	２回以内
トルネードエースＤＦ	２２Ａ	収穫１４日前まで	２回以内
ベネビアＯＤ	２８	収穫前日まで	３回以内
グレーシア乳剤	３０	収穫７日前まで	２回以内

（使用基準は令和７年８月２０日現在）

表２　ブロッコリーにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
ディアナＳＣ	５	収穫前日まで	２回以内
アニキ乳剤	６	収穫３日前まで	３回以内
ジャックポット顆粒水和剤	１１Ａ	発生初期 但し、収穫前日まで	―
コテツフロアブル	１３	収穫３日前まで	２回以内
ブロフレアＳＣ	３０	収穫前日まで	３回以内

（使用基準は令和７年８月２０日現在）

表３　ダイズにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
プレオフロアブル	ＵＮ	収穫７日前まで	２回以内
デルフィン顆粒水和剤	１１Ａ	発生初期 但し、収穫前日まで	―
ブロフレアＳＣ	３０	収穫前日まで	３回以内

（使用基準は令和７年８月２０日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

１　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
２　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
３　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
４　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
５　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

４　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第６号

令 和 ７ 年 ９ 月 １ 日
埼玉県病害虫防除所

県内のオオタバコガのフェロモントラップによる誘殺数が平年を上回って推移し、多いところでは平年の約2.5倍となりました。また、調査を行っている４地点中の２地点において、８月の発生量は昨年をさらに上回っています。
本虫は野菜、花きを中心として５０種類近い作物を加害しますが、今後、本県で被害が懸念される作物は、ダイズ、ナス、ブロッコリー、イチゴ、キク、宿根アスター、シャクヤクなどです。
幼虫は卵から孵化すると直ちに植物の内部へ食入するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作 物 名　ダイズ、野菜類、花き類
病害虫名　オオタバコガ

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）病害虫防除所が設置したオオタバコガのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、４地点中３地点（本庄市、深谷市、杉戸町）で平年の約 1.9～2.5 倍と多い（図）。（参照：フェロモントラップ等調査データ（更新：８月２０日））
（２）病害虫防除所による巡回調査では、ダイズ６地点すべて、ナス３地点中２地点で本種幼虫による食害が認められている。とくにナスでは被害果率が 50%に達する甚発生となっている地点がある。
（３）８月２８日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないと予想されている。高温の影響で今後本虫の活動がさらに活発となり、被害多発が懸念される。

３　防除対策等
（１）新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いため、見つけしだい捕殺する。
（２）摘除した腋芽や花蕾などには卵が産みつけられていたり、若齢幼虫が潜んでいたりすることがあるため、株元などに放置せず、ほ場外で処分する。
（３）施設栽培では、開口部に寒冷紗等（５㎜目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぐ。
（４）幼虫が植物体内に食入してしまうと薬剤の効果が低下するため、被害を確認し

たら直ちに防除を実施する。

（５）老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける（表１～３）。

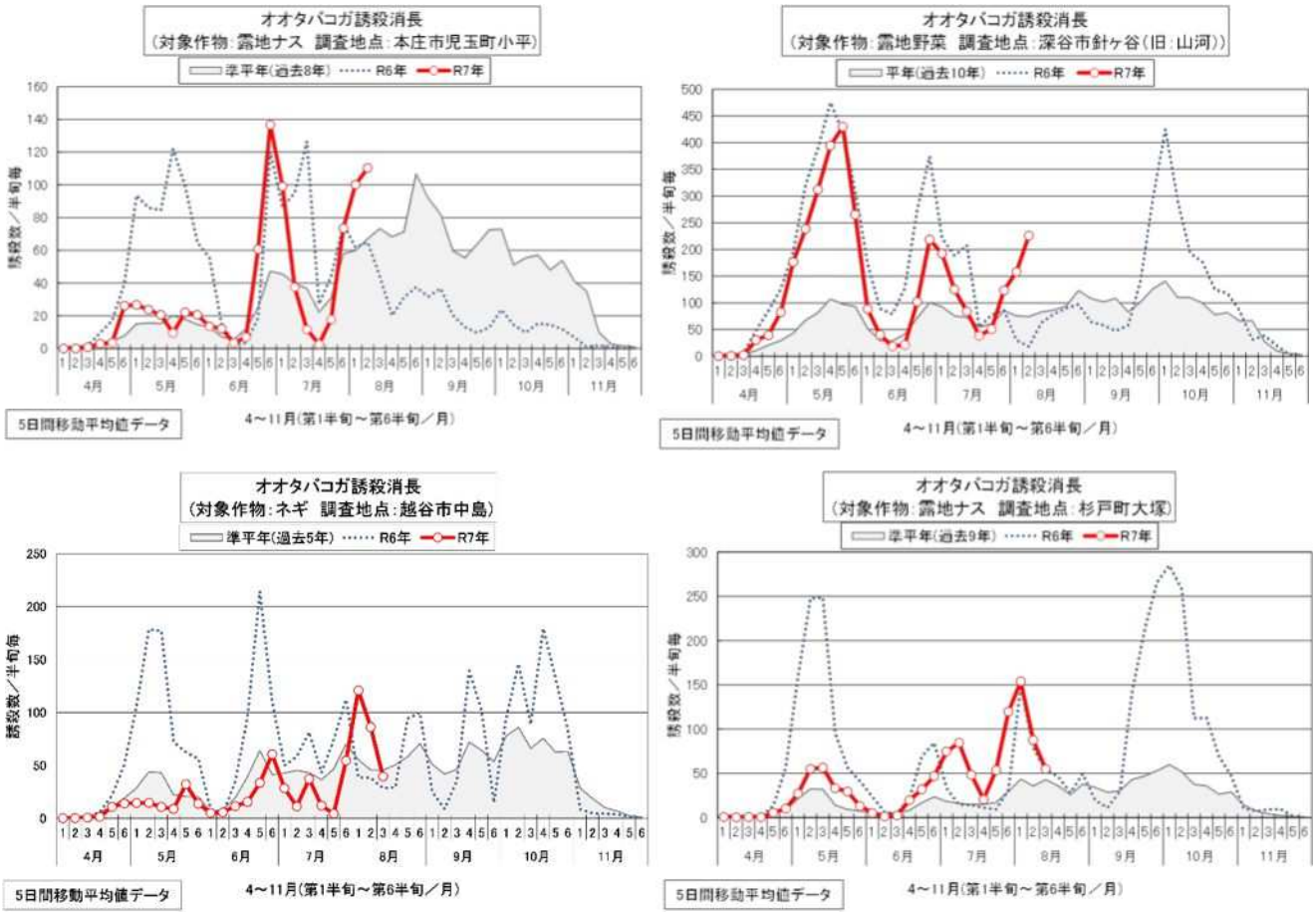


図　オオタバコガのフェロモントラップにおける誘殺消長（８月２０日時点）
（左上から本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町）

写真１　ダイズ新葉を加害する中齢幼虫

写真２　ダイズ葉を加害する老齢幼虫

写真３　ナス果実に食い入る老齢幼虫

写真４　ナスの花を加害する中齢幼虫

表１　ダイズにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
プレバソンフロアブル５	２８	収穫７日前まで	２回以内
フェニックスフロアブル	２８	収穫７日前まで	３回以内
グレーシア乳剤	３０	収穫１４日前まで	２回以内
プレオフロアブル	ＵＮ	収穫７日前まで	２回以内
デルフィン顆粒水和剤※	１１Ａ	発生初期 但し、収穫前日まで	―

※作物名「豆類（種実）」として登録　　（使用基準は令和７年９月１日現在）

表２　ナスにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
アニキ乳剤	６	収穫前日まで	３回以内
カウンター乳剤	１５	収穫前日まで	４回以内
マトリックフロアブル	１８	収穫前日まで	３回以内
アクセルフロアブル	２２Ｂ	収穫前日まで	３回以内
ヨーバルフロアブル	２８	収穫前日まで	３回以内
グレーシア乳剤	３０	収穫前日まで	２回以内
プレオフロアブル	ＵＮ	収穫前日まで	４回以内
デルフィン顆粒水和剤※	１１Ａ	発生初期 但し、収穫前日まで	―

※作物名「野菜類」として登録　　（使用基準は令和７年９月１日現在）

表３　ブロッコリーにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
プレバソンフロアブル５	２８	収穫前日まで	３回以内
ディアナＳＣ	５	収穫前日まで	２回以内
グレーシア乳剤	３０	収穫７日前まで	２回以内
デルフィン顆粒水和剤※	１１Ａ	発生初期 但し、収穫前日まで	―

※作物名「野菜類」として登録　　（使用基準は令和７年９月１日）

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）から検索できます。

4　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１
（ホームページ：右下の二次元バーコードか本リンクよりアクセス）

埼玉県マスコット「コバトン」「さいたまっち」

農薬登録情報提供システム（農林水産省）

埼玉県病害虫防除所

２０２５年６月２３日より「埼玉県病害虫防除所」Ｘ（旧 Twitter）を開設しました。
発生予察情報など病害虫に関する様々な情報提供を行いますので、是非フォローをお願いします。
Ｘアカウント（https://x.com/saitama_bojosho）→

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第７号

令和７年９月２２日
埼玉県病害虫防除所

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が、すべての調査地点で多くなっています。このうち、平年及び準平年との比較ができる２地点で平年を大きく上回っており、多発した昨年よりさらに多くなっています。

また、県内各地で、ネギやダイズ等で幼虫による食害が確認されています。本虫は、野菜や花きを主として６０種類以上の作物を加害するため、今後ブロッコリー等での被害も懸念されます。

特に、ネギでは幼虫が葉身内へ食入してしまうと薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作 物 名　ネギ、ダイズ、ブロッコリー、その他野菜類
病害虫名　シロイチモジヨトウ

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）病害虫防除所が県内４地点に設置しているシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が全地点とも多い。うち、平年及び準平年との比較が可能な２地点では平年を大きく上回って推移している。既に本年８月２２日に本虫を対象に注意報を発表したが、その後も多発生が継続している（図）。
（２）９月１８日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は高いと予想されている。現在活発となっている本虫の活動は継続することが予想される。
（３）ネギおよびダイズほ場において幼虫による食害が広く確認されている（写真１～４）。定植期であるブロッコリーや、その他の作物でも被害が懸念される。

３　防除対策等
（１）早期発見に努め、卵塊や孵化直後の１～２齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。
（２）幼虫が作物内に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
（３）老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、抵抗性害虫の発生を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連

用を避ける（表１～３）。

（４）ほ場周辺の広葉雑草は発生源となるため（写真５・６）除草を徹底し、ほ場衛生に努める。

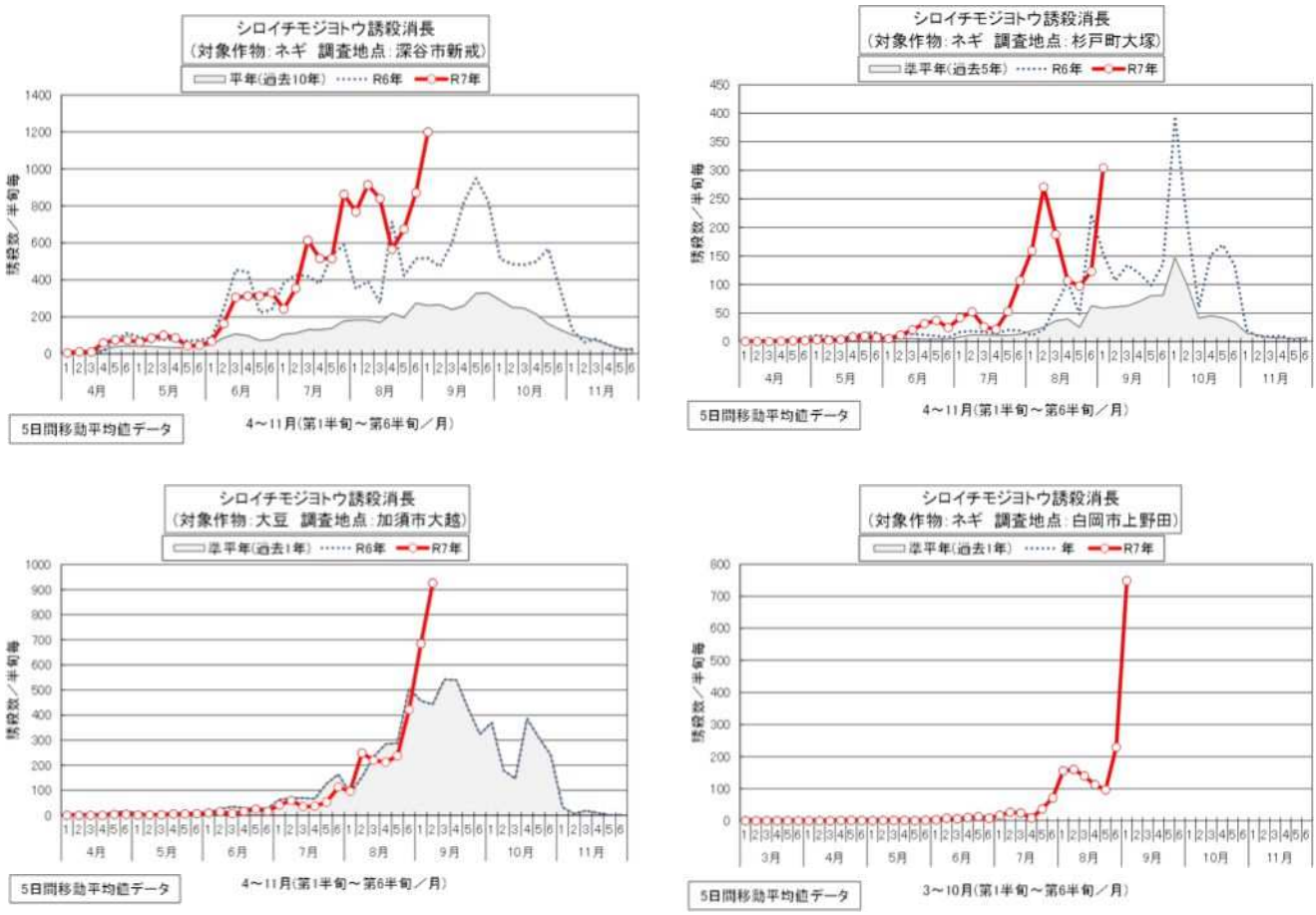


図　雄成虫の誘殺消長（左上：深谷市、右上：杉戸町、左下：加須市、右下：白岡市※）
※白岡市はＲ７年からの調査のため当年データのみ

写真１　ネギを食害する幼虫

写真２　ネギ葉身内に食入した幼虫

写真３　ダイズを食害する幼虫
（褐色型：幼虫には体色変異がある）

写真４　ブロッコリーを食害する幼虫

写真５・６　ほ場の周囲に生育した広葉雑草を食う幼虫

表１　ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
アディオン乳剤	３Ａ	収穫７日前まで	３回以内
スピノエース顆粒水和剤	５	収穫３日前まで	３回以内
アファームエクセラ顆粒水和剤	６、１５	収穫７日前まで	３回以内
コテツフロアブル	１３	収穫７日前まで	２回以内
トルネードエースＤＦ	２２Ａ	収穫１４日前まで	２回以内
ベネビアＯＤ	２８	収穫前日まで	３回以内
グレーシア乳剤	３０	収穫７日前まで	２回以内

（使用基準は令和７年９月１９日現在）

表２　ブロッコリーにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
ディアナＳＣ	５	収穫前日まで	２回以内
アニキ乳剤	６	収穫３日前まで	３回以内
ジャックポット顆粒水和剤	１１Ａ	発生初期 但し、収穫前日まで	―
コテツフロアブル	１３	収穫３日前まで	２回以内
ブロフレアＳＣ	３０	収穫前日まで	３回以内

（使用基準は令和７年９月１９日現在）

表３　ダイズにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数
プレオフロアブル	ＵＮ	収穫７日前まで	２回以内
デルフィン顆粒水和剤	１１Ａ	発生初期 但し、収穫前日まで	―
ブロフレアＳＣ	３０	収穫前日まで	３回以内

（使用基準は令和７年９月１９日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

１　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
２　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
３　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
４　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
５　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

４　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第８号

令和７年１０月９日
埼玉県病害虫防除所

県内各地でチュウゴクアミガサハゴロモの発生が多くなっており、予察灯への誘殺数が多発した昨年よりさらに多くなっています。

１０月１日現在の状況として、成虫の発生とチャ等の樹木や一部の草本植物への産卵が確認されています。本種は、樹木を主として８０種類以上の植物を対象に加害・産卵するため、今後チャや果樹等での被害の拡大も懸念されます。

特に、ブルーベリーやカンキツでは来年の花芽が着生する新梢に産卵されると枝の枯死等により、収穫量が減少する可能性があります。

作 物 名　植木類、チャ、果樹類、宿根アスター等
病害虫名　チュウゴクアミガサハゴロモ

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）病害虫防除所が県内に設置している水稲用予察灯と、農業技術研究センター内（熊谷市）に設置しているLED予察灯（Rynan社製害虫モニタリングシステム，光源：UV＋青色・緑色LED）における誘殺数が大きく増加している。川越市および川島町の水稲予察灯における９月３０日時点での合計誘殺数は、昨年の３頭（川越市０、川島町３）に対して本年は７３頭（川越市３０、川島町４３）となっている。また、LED予察灯における誘殺数の合計は昨年の６倍以上に達している（図１，２）。
（２）１０月９日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は高いと予想されている。本種の活動は継続することが予想される。
（３）１０月１日現在、チャや、ブルーベリーなどの果樹、樹木・植木類における産卵が数多く確認（写真１～４）されており、今後の植木類・果樹類・チャや、宿根アスター等への被害の拡大が懸念される。

３　防除対策等

（１）令和７年１０月現在、対象作物において本種を対象とした登録農薬はないため、物理的・耕種的防除対策を行う。

（２）産卵加害を防止するため、可能な場合は防虫網や防鳥網、防風網で植物体を被覆する。本種の成虫は比較的大型のため、産卵加害の防止目的であれば、多少目合いが粗いものであってもよい（写真５）。

（３）産卵された枝は次年度以降の発生源となるため直ちに切除し、地中に埋めるなどして適切に処分する。

（４）当年枝の上部に産卵される場合が多いため、樹種の特性に合わせて秋季の整枝や冬季の剪定を十分に励行する。また、１０月の気温が高いことが予測されており、本種の産卵は１１月上旬まで継続すると考えられるので、整枝や剪定の時期を適宜調節する。

（５）本種は多くの植木類にも産卵することが確認されている。対象作物以外の樹木類で産卵を確認した場合は、防除対策（３）のとおり適切に処分する。

（６）クモ類やカマキリは本種の天敵であるため（写真６）、本種以外の病害虫を対象とした薬剤防除を行う場合は、天敵への影響が少ない剤を選択する。

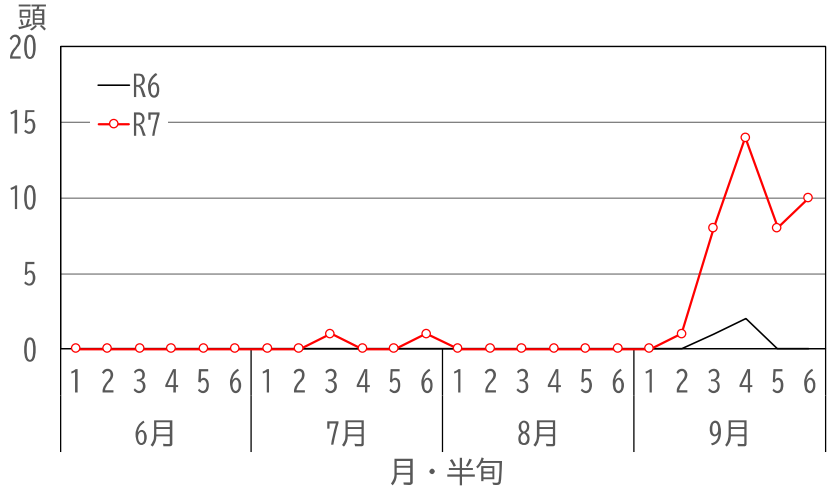


図１　川島町に設置した水稲用予察灯（光源：60W 白熱電球）における昨年誘殺数の本年と昨年との比較。

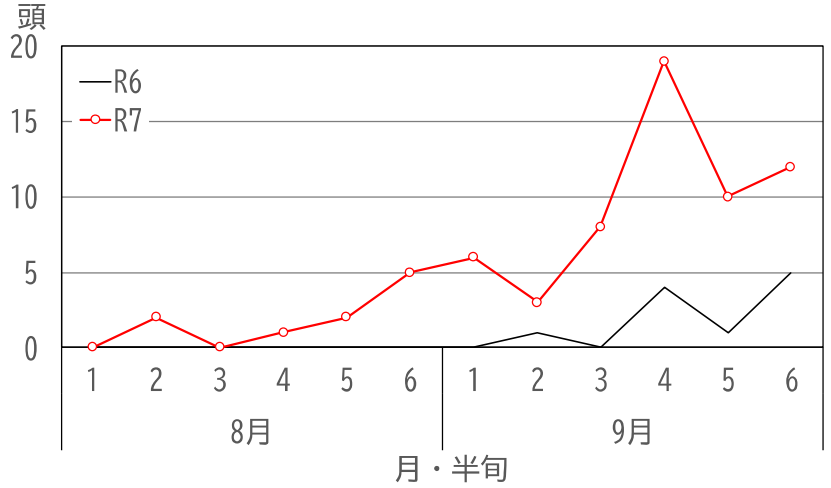


図２　熊谷市に設置した LED 予察灯における誘殺数の本年と昨年との比較

写真１　チャに産卵する成虫

写真２　ブルーベリーにおける産卵痕

写真３　ユズにおける産卵痕

写真４　マサキに群がる成虫

写真５　チャの秋整枝後のネット被覆

写真６　本種を捕食するクモの仲間

４　問合せ先

埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

彩の国
埼玉県

令和７年度病害虫発生予察注意報第９号

令和７年１０月２７日
埼玉県病害虫防除所

ハスモンヨトウ、オオタバコガおよびシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が県内各地で多くなっています。このうち、オオタバコガとシロイチモジヨトウでは、地点によっては多発した昨年をさらに上回っています。

また、県内各地で、ネギやブロッコリー等で幼虫による甚だしい食害が確認されています。これら３種のチョウ目害虫は野菜類や花き類をはじめ多くの農作物を加害し、今後は施設栽培での被害も懸念されます。

オオタバコガやシロイチモジヨトウでは葉身や果実内に食入してしまうと薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作 物 名　野菜類・花き類
病害虫名　チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

１　注意報の内容
（１）発生地域　　県内全地域
（２）発生程度　　多

２　注意報発表の根拠
（１）病害虫防除所が県内に設置しているフェロモントラップへの、ハスモンヨトウ、オオタバコガおよびシロイチモジヨトウの雄成虫誘殺数が複数の地点で多く、多発生であった昨年をも上回る誘殺が確認されている地点がある（図）。
（２）１０月２３日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう１か月の気温は高いと予想されている。現在多発しているこれら害虫の活動が継続し、発生終息は遅くなることが予想される。
（３）ナス、ブロッコリー、ネギなどの露地野菜や花きにおいて幼虫による食害が広く確認されている（写真１～６）。また、イチゴやトマトなどの施設野菜や、施設栽培および雨よけハウス栽培の花き類でも被害が懸念される。

３　防除対策等
（１）早期発見に努め、卵や孵化直後の若齢幼虫を見つけたら速やかに薬剤散布を行う。ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウでは、卵塊や若齢幼虫の集団を見つけたら直ちに除去し、ほ場外で適切に処分する
（２）幼虫が作物の内部に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
（３）老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうち

に実施する。また、抵抗性害虫の発生を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける（表１～３）。

（４）ほ場周辺の広葉雑草は発生源となるため（写真７・８）除草を徹底し、ほ場衛生に努める。

（５）施設内への侵入を防ぐため、出入口や天窓、側窓等の開口部に防虫ネットを展張するとともに、既に展張済の場合は破れ等の破損が無いか点検する。

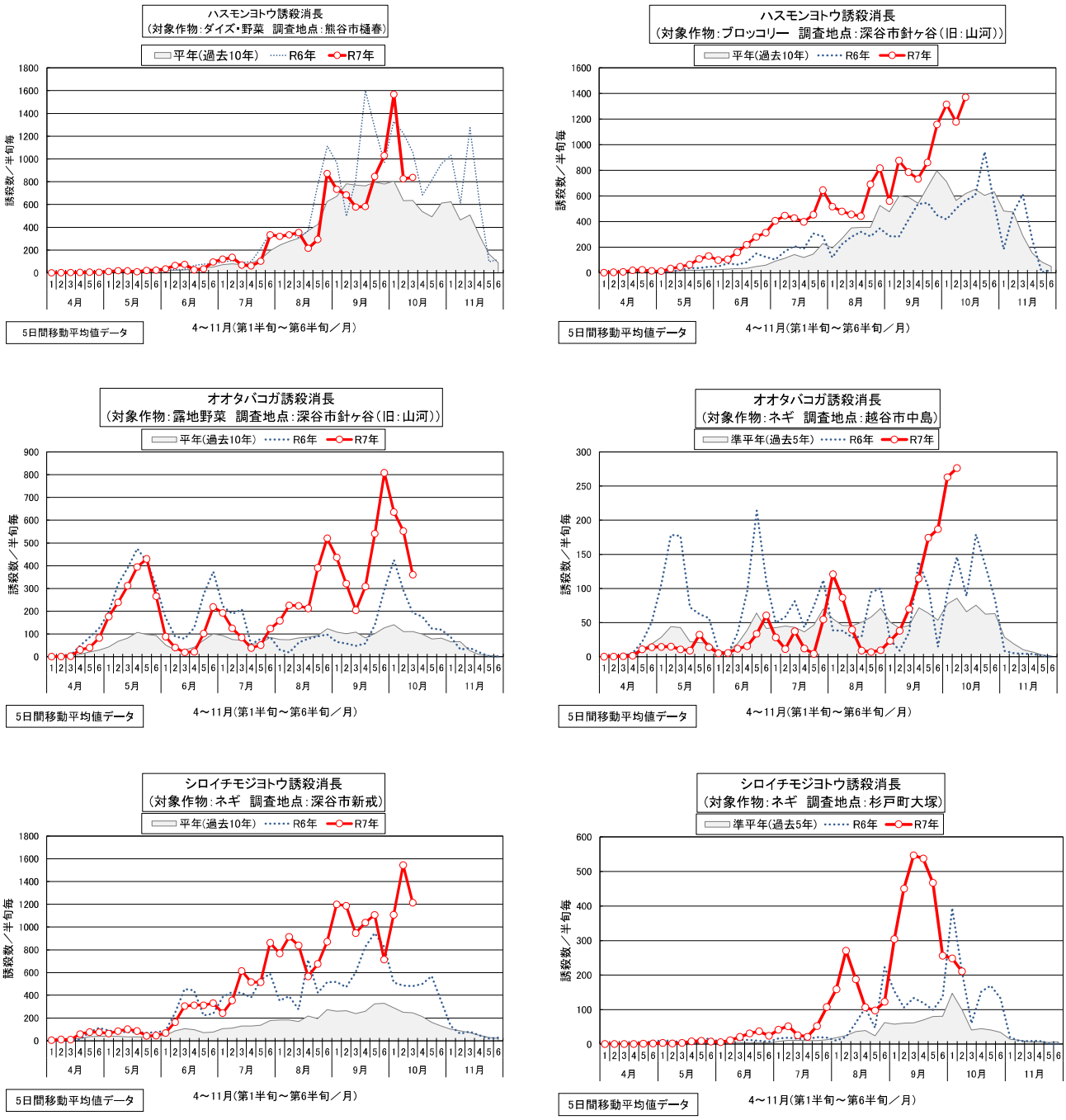


図　雄成虫の誘殺消長
（上段：ハスモンヨトウ、中段：オオタバコガ、下段：シロイチモジヨトウ）

写真１　ハスモンヨトウ
（ブロッコリー）

写真２　ハスモンヨトウ（ナス）

写真３　オオタバコガ（ナス）

写真４　オオタバコガ(コスモス)

写真５　シロイチモジヨトウ（ネギ）

写真６　シロイチモジヨトウ
（ブロッコリー：若齢幼虫群）

写真7・8　広葉雑草（左：シロイチモジヨトウ、右：ハスモンヨトウ）

表1　ネギにおける防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数	ﾊｽﾓﾝ ﾖﾄｳ	ｵｵ ﾀﾊﾞｺｶﾞ	ｼﾛｲﾁﾓｼﾞ ﾖﾄｳ
アディオン乳剤	３Ａ	収穫７日前まで	３回以内	－	－	○
スピノエース顆粒水和剤	５	収穫３日前まで	３回以内	－	－	○
アファームエクセラ顆粒水和剤	６、１５	収穫７日前まで	３回以内	－	－	○
ゼンターリ顆粒水和剤 デルフィン顆粒水和剤	１１Ａ	発生初期 但し収穫前日まで	―	○	○	○
コテツフロアブル	１３	収穫７日前まで	２回以内	－	－	○
トルネードエースＤＦ	２２Ａ	収穫１４日前まで	２回以内	－	－	○
ベネビアＯＤ	２８	収穫前日まで	３回以内	－	－	○
グレーシア乳剤	３０	収穫７日前まで	２回以内	－	－	○

（使用基準は令和７年１０月２４日現在）

表2　ブロッコリーにおける防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数	ﾊｽﾓﾝ ﾖﾄｳ	ｵｵ ﾀﾊﾞｺｶﾞ	ｼﾛｲﾁﾓｼﾞ ﾖﾄｳ
ディアナＳＣ	５	収穫前日まで	２回以内	○	○	○
アニキ乳剤	６	収穫３日前まで	３回以内	○	－	○
ジャックポット顆粒水和剤	１１Ａ	発生初期 但し収穫前日まで	―	－	○	○
コテツフロアブル	１３	収穫３日前まで	２回以内	○	－	○
ブロフレアＳＣ	３０	収穫前日まで	３回以内	○	○	○

（使用基準は令和７年１０月２４日現在）

表3　花き類における防除薬剤例

薬　　剤　　名	ＩＲＡＣ コード	使用時期	使用 回数	ヨトウ ムシ類	オオ タバコガ
ディアナＳＣ	５	収穫前日まで	３回以内	－	○
アファーム乳剤	６	発生初期	５回以内	○	○
プレオフロアブル	ＵＮ	発生初期	４回以内	※	○

※ハスモンヨトウとして登録

（使用基準は令和７年１０月２４日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

4　問合せ先
埼玉県病害虫防除所　電話：０４８－５３９－０６６１

令和７年度 発生予察情報	**病害虫発生予察 特殊報第１号**	令和７年５月１９日 埼玉県病害虫防除所 （TEL：048－539－0661）

キウイフルーツかいよう病（Psa3 系統）の発生について

県内で栽培されているキウイフルーツにおいて、本病の疑似症状を示す樹が確認された。病徴を生じている樹より試料を採取し、農林水産省横浜植物防疫所および埼玉県農業技術研究センターに検定を依頼した結果、県内未発生であったキウイフルーツかいよう病であり、同病のPsa3系統であると確認された。

＊　特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

１　病害名　キウイフルーツかいよう病（Psa3 系統）

Pseudomonas syringae pv. *actinidiae* (Psa3)

２　対象作物　キウイフルーツ

３　発生確認の経緯及び国内での発生状況

（１）令和７年４月下旬、県内のキウイフルーツ栽培ほ場において、葉に多数の小斑点形成、新葉の展開不良、新梢の萎凋、枝や幹からの赤褐色の樹液漏出など、キウイフルーツかいよう病にきわめて類似した病徴を示す樹が複数確認された。４月２８日に、３樹を対象に前年枝と今春展開した新葉を採取し、農林水産省横浜植物防疫所および埼玉県農業技術研究センターに検定を依頼したところ、キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統であることが判明した。

（２）今回発生を確認したキウイフルーツの品種はいずれも「紅妃（こうひ）」である。

（３）キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統は、国内では平成２６年５月に愛媛県で初めて確認され、同年７月までに福岡県、佐賀県、岡山県、和歌山県、静岡県、茨城県（特殊報発表確認順）の計７県で確認された。翌年は新たに６都県（神奈川県、東京都、香川県、高知県、山口県、千葉県）で確認されるなど、短期間で国内に拡大した。これまでに本県を含めて合計１７都県で発生が確認されている。

４　本病の特徴

（１）キウイフルーツかいよう病は、病原性の異なる５つの系統（Psa1、Psa2、Psa3、Psa5 および Psa6）が知られている。Psa4 系統とされていた菌群は、現在は異なる pathovar（pv. *actinidifolium*）として扱われている。

（２）Psa3 系統は 2008 年にイタリアで初めて確認され、他の系統に比較して病原性が強いとされる。数年でイタリア全土に分布を拡大するとともに他国へ分布を広げ、2014 年５月に日本で初めて愛媛県で発生が確認された。

（３）葉身には黒褐色の小斑点を多数生じる（写真１）。また、小斑点の周囲には黄色のハローを伴うことが多く、黄色の小斑点のみの病斑もある（写真２・３）。

（４）新葉の展開が阻害されて奇形になったり、新梢が萎凋・枯死したりすることがある（写真４・５）。

（５）枝や幹からは赤褐色の樹液が漏出し（写真６・７）、汚白色の菌泥（病原細菌の集塊）を生じることがある（写真８・矢印）。激しく侵されると前年枝から新芽が伸長せず、枝幹が枯死する（写真９）。

（６）激しい病徴を示す枝を切除すると、しばしば内部が褐変している（写真１０）。

写真1

写真2

写真3

写真4

写真5

写真6

写真7

写真8

写真9

写真10

（写真は全点とも埼玉県病害虫防除所原図）

5 本病の発生生態

（1）本病は雨媒伝染し、強い風雨により発病が著しく助長される。

（2）剪定時の器具や接ぎ木によっても伝染する。

（3）一次伝染源は枝幹から溢出した細菌（液、粘塊）で、葉では気孔や傷口等から、枝では傷口から感染し、二次伝染を繰り返す。

（4）病原細菌の生育に好適な温度は10～20℃程度と低く、夏季の高温期には発生が停滞する。

6 防除対策

（1）病原細菌が増殖しやすく、密度が高い状態となる発芽期～果実肥大期、収穫後～発芽前に薬剤を散布または樹幹注入する（表）。

（2）発病樹は伐採処分する。「ヘイワード」など、本病に対し比較的強い品種の場合は、発症部位の基部寄りから切除し、枝などは埋没または焼却処分する。なお、主幹伐採後の切り株から樹液が流出するため、切り口をビニル等で覆って樹液の飛散を防止する。

（3）伐採や剪定に使用した器具等から感染するため、消毒液による消毒を行う。

（4）傷口から感染するため、剪定後は必ず傷口に癒合促進剤を塗布する（表）。また、防風垣や防風ネットによる風対策を行う。

（5）苗木、穂木、花粉は感染のおそれの無いものを使用し来歴不明なものは用いない。また、花粉によって伝染するおそれがあるため、感染樹の花粉は絶対に人工授粉に用いない。

（6）適宜、栽培管理時に疑似症状が無いか栽培ほ場を注意深く観察し、疑わしい症状を確認した場合は最寄りの農林振興センター、病害虫防除所に問い合わせる。

表　キウイフルーツかいよう病の防除薬剤として使用可能な薬剤例
（令和７年５月９日現在）

薬剤名（商品名）	FRAC コード	使用方法	希釈倍数	使用時期	使用回数	当該成分を含む薬剤の総使用回数
カスミン液剤	24	散布	400 倍	収穫 90 日前まで	4 回以内*	カスガマイシン 4 回以内*
		樹幹注入	200 倍	収穫後～落葉前まで	1 回	
アグレプト水和剤	25	散布	1,000 倍	収穫 90 日前まで	4 回以内*	ストレプトマイシン 4 回以内*
アグレプト液剤	25	樹幹注入	1,000 倍	収穫後～落葉前まで	1 回	
アグリマイシン-100	41・25	散布	1,000 倍	落花期まで	3 回以内	オキシテトラサイクリン 3 回以内 ストレプトマイシン 4 回以内*
トップジンMペースト	1	塗布	原液	剪定整枝時、病患部削り取り直後、及び病枝切除後	3 回以内	チオファネートメチル 8 回以内（塗布は 3 回以内）（散布は 5 回以内）
コサイド 3000	M 1	散布	2,000 倍	収穫後～果実肥大期	―	―

＊樹幹注入と散布の合計で 4 回以内

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。

2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。

3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。

4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和７年５月１日～８月３１日）

令和７年度 発生予察情報	**病害虫発生予察 特殊報第２号**	令和７年９月５日 埼玉県病害虫防除所 （TEL：048－539－0661）

ナスこうがい毛かび病の発生について

県内で栽培されているナスにおいて、果実に白色で毛足の長いカビを密生し、やがて腐敗する被害の発生を認めた。
病徴および標徴と、病原菌の形態的特徴から、本県で未発生であった「ナスこうがい毛かび病」であると判断された。

＊　特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

１　病害名　ナスこうがい毛かび病
Choanephora sp.

２　対象作物　ナス

３　発生確認の経緯

（１）令和７年８月中下旬、県内のナス栽培露地ほ場において、果実表面に白色で毛足の長いカビが密生し、先端に類球形の黒色小塊を生じるとともに果実が腐敗する被害が発生した。
（２）被害果を採取し、光学顕微鏡で検鏡観察したところ、無色透明で太い分生子柄と褐色で楕円形ないし紡錘形の胞子嚢を多数確認した。胞子嚢の表面には、縦縞条線をしばしば生じていた。
（３）観察された糸状菌の形態的特徴は *Choanephora* 属の記述と一致した。
（４）被害果の病徴と標徴、病原菌の形態から *Choanephora* sp. によるナスこうがい毛かび病による被害であると判断した。

４　本病の特徴

（１）被害果の表面に白色で長さ 2～3㎜ のカビ（分生子柄）を密生し、先端に、大きさ 0.2～0.4㎜ の黒色で球形ないし亜球形に見える胞子嚢塊を形成する（写真１・４）。
（２）果頂部から発病することが多い（写真１）。これは開花後の花殻が感染の足掛かりになるためと考えられる。
（３）被害部は腐敗し、しだいに果実全体に及ぶ（写真２）。被害果はしばしば汁液を漏出する（写真３）。
（４）腐敗臭は強くない。かすかな発酵臭を生じることがあり、ハナムグリ類が飛来し摂食することがある。
（５）分生子柄は無色で太い（写真５）。胞子嚢は褐色で球形ないし紡錘形、表面に浅い縦縞条線をしばしば生じる（写真６）。

写真１　被害果（果頂部からの腐敗）

写真2　被害果（果実全体が腐敗）

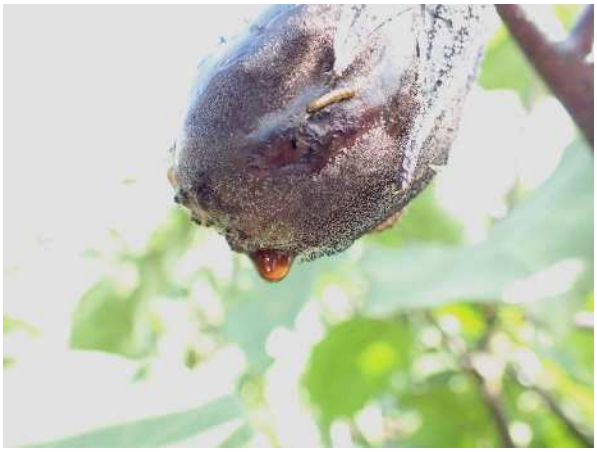


写真3　被害果（腐敗して汁液を漏出）

写真4　標徴（長い分生子柄と黒い胞子嚢）

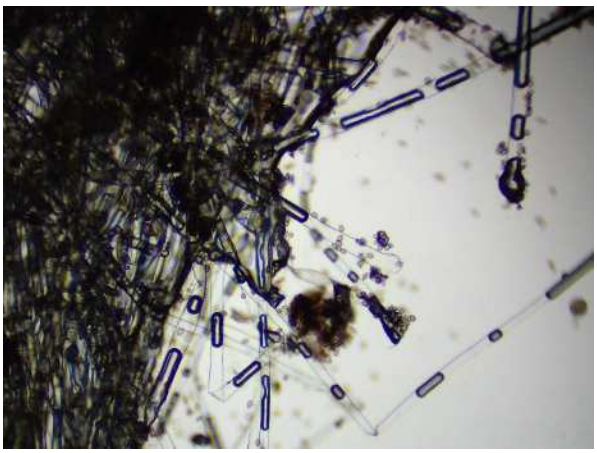


写真5　無色で太い分生子柄と胞子嚢

写真6　胞子嚢（縦縞条線を生じたもの：矢印）

（写真は全点とも埼玉県病害虫防除所原図）

5 本病の発生生態

（1）病原菌の生育適温は高い。夏季に高温が長期間にわたって続き、過繁茂や適度な降雨によって環境中の湿度が高まると発生する。

（2）病原菌は開花後の花殻などで腐生的に増殖し、ここを感染の足掛かりとして果実に侵入して発病・腐敗させる。

（3）病原菌は多数の胞子嚢を形成し、これが伝染源になるとともに、本属菌は接合胞子を形成し越年すると考えられる。

（4）本属菌による他作物の病害※として、*Choanephora cucurbitarum* によるホウレンソウ、エンドウ、ペチュニアなどの「こうがいかび病」、カボチャの「こうがい毛かび病」が知られる。なお、ナスこうがい毛かび病の病原は *Choanephora* sp.とされ、種の同定がなされていない。

（5）風雨によって胞子嚢が飛散し発生が拡大するほか、発病果に誘引された昆虫に胞子嚢が付着し、他の果実やほ場へ伝搬する可能性がある。

※出典：日本植物病名データベース https://www.gene.affrc.go.jp/databases-micro_pl_diseases.php

6 防除対策

（1）本病を対象とした登録農薬は無いため、耕種的・物理的対策をとる。

（2）発病果は重要な伝染源になるため、見つけ次第切除してほ場外で処分する。

（3）開花後の花殻はこまめに除去し、本病原菌の増殖源にならないようにする。

（4）ほ場内および株内の通風をはかるため、過繁茂とならないようこまめに剪定や摘葉を行う。

（5）栽培管理の際に摘除した葉や枝、果実はほ場内に放置せず、ほ場外に持ち出すとともに土中深く埋めるなど適切に処分する。

（6）昆虫類による本病原菌の伝搬を避けるため、害虫防除を適切に行う。

令和７年度 発生予察情報	**病害虫発生予察 特殊報第３号**	令和８年１月１９日 埼玉県病害虫防除所 （TEL：048－539－0661）

Alternaria japonica によるブロッコリー黒すす症状の発生について

県内で栽培されているブロッコリーにおいて、黒すす病の病徴を示す被害株が複数地点で確認された。埼玉県農業技術研究センターが病徴を生じている株を採取、被害部より病原菌を分離し検定した結果、県内で未発生であった*Alternaria japonica* によるブロッコリー黒すす症状と確認された。

＊　特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

１　病害名　*Alternaria japonica* Yoshii によるブロッコリー黒すす症状
（「ブロッコリー黒すす病」の病原として本菌の追加を徳島県が提案中）

２　対象作物　ブロッコリー

３　発生確認の経緯及び国内での発生状況

（１）当県では平成 30 年頃よりブロッコリー黒すす病の発生が認められており、年次によっては秋冬穫りブロッコリーで大きい被害が出ている。県内の産地では、本病を起こす病原菌として *Alternaria brassicicola* が確認されていた。

（２）令和 7 年 10 月、当県農業技術研究センターが県北部でのブロッコリー黒すす病の発生状況を調査し、本病の病徴を生じている花蕾を複数地域で採取した。常法により被害部から病原菌を分離・培養したところ、形態的特徴が *Alternaria brassicicola* とは異なる *Alternaria* 属菌が高率に分離された。

（３）分離された *Alternaria* 属菌について当県農業技術研究センターで詳細な調査を行ったところ、PDA 培地において硬膜胞子（写真 4）を形成したこと、また、ITS 領域の遺伝子解析を行った結果から、*Alternaria japonica* Yoshii であると同定された。

（４）当県での *Alternaria japonica* Yoshii によるブロッコリーの病害の確認は、今回が初めてである。

（５）*Alternaria japonica* Yoshii によるブロッコリー黒すす症状は、徳島県での発生が令和 7 年度日本植物病理学会大会において報告され、同県により病原追加が提案されている。令和 7 年 7 月には愛知県から同菌によるブロッコリー黒すす症状として病害虫発生予察特殊報が発表されている。

４　本病の特徴

（１）葉では黒色の小斑点を生じ、のちに病斑が拡大して黒褐色の斑点から輪紋となり周辺は黄化する（写真 1）。

（2）花蕾は黒色の小斑点を生じ、のちに黒褐色に腐敗する。花蕾上面から見ると、腐敗により被害部が陥没したように見える（写真１・2）。

（3）本菌によって生じる病徴は既知のブロッコリー黒すす病に酷似あるいは同様であり、病徴観察による関与病原菌の判別はきわめて困難である。

（4）本菌による他作物の病害として、ストックやショカツサイ（オオアラセイトウ）の黒斑病が知られている。

写真1　花蕾および葉身の病徴

写真2　花蕾粒に生じた黒色の菌叢

写真3　PDA 平板培地上の菌叢

写真4　PDA 培地中に生じた硬膜胞子

（写真は全点とも埼玉県農業技術研究センター）

5 本病の発生生態

（1）病原菌は被害残渣とともにほ場に生残し、次作の伝染源になると考えられる。

（2）病原菌は 10℃～35℃で生育し適温は 26℃とされている*)。関東平坦地では、ブロッコリー栽培期間中の春季や秋季に降雨が多い場合、発生が助長されると考えられる。

（3）葉に生じた病斑から降雨によって周囲に胞子が飛散し、花蕾に到達して症状を発生させると考えられる。

＊　https://boujo.net/release/byougai-release/オオアラセイトウ黒斑病.html

６ 防除対策

（１）育苗中は高温多湿を避け、通風に努める。

（２）今後定植期を迎える春穫り栽培や初夏穫り栽培では、トンネル被覆期間中の換気に留意し多湿を避けるよう努める。

（３）栽培期間中、病徴を認めた葉は見つけ次第摘除し、適切に処分する。

（４）収穫後の残渣は本病の伝染源となるため、ほ場外に搬出し適切に処分する。

（５）*Alternaria japonica* Yoshii によるブロッコリーの黒すす症状に対し適用のある農薬はない。

＜農薬使用上の注意事項＞

1　農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。

2　剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。

3　農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。

4　周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

5　農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）　https://pesticide.maff.go.jp/

チュウゴクアミガサハゴロモが各地で多発しています

―果樹・茶樹・植木類・花き等を栽培される生産者の皆様へ―

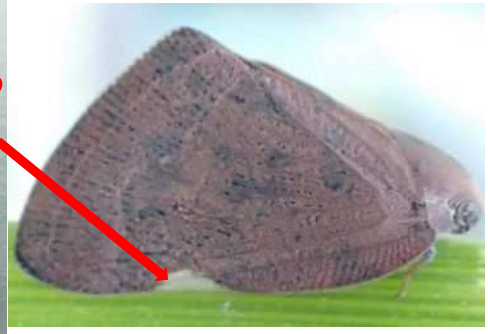
チュウゴクアミガサハゴロモは中国を原産とするカメムシ目ハゴロモ科の昆虫であり、韓国に分布拡大した際にはブルーベリーに大きな被害をもたらしました。

平成25年に日本国内で初めて発生が確認されて以降、全国で確認事例が増加しており、昨年（令和6年）には国内の農作物への被害が初報告されました。本虫は非常に広範囲の植物を宿主として利用できることが知られており、植物体への吸汁加害や新梢などへの産卵を行います。

7月28日現在、県内全域で新成虫による産卵加害が確認されています。本虫のものと疑われる産卵枝を発見した場合は、切除し、適切な処分を行ってください。

【チュウゴクアミガサハゴロモの特徴】

▲成虫（背面図）


▲成虫（側面定位図）
※定位時の成虫は蛾に似る

▲初齢幼虫（背面図）

▲終齢幼虫（背面図）

▲若齢幼虫（側面図）

▲老齢幼虫（側面図）

幼虫は成長段階に関わらず腹端にワックスで構成される綿毛状の構造をもち、防衛に利用している

※チュウゴクアミガサハゴロモは「不完全変態」の昆虫であり、蛹を経ず、終齢幼虫から成虫になります

【被害の状況】

茶樹の枝条での被害（赤丸内が産卵枝）

産卵中の成虫

産卵された枝（ドウダンツツジ）

数多くの幼虫（左）と成虫（右）が植物体上で吸汁する様子
（大量発生により、糖分を含む排泄物：右写真赤丸内　が植物体上にたまると「すす病」の原因にもなる）

【チュウゴクアミガサハゴロモと在来種アミガサハゴロモの違い】

♦チュウゴクアミガサハゴロモ

成虫の翅の白斑は三角形

幼虫は白色ベースに
褐色斑が入る

幼虫の腹端に生じる綿毛状構造は
密で縮毛状、基部は類白色。

♦アミガサハゴロモ

成虫の翅の白斑は
つぶれた半円形

幼虫は赤橙色ベースに
白色斑が入る

幼虫の腹端に生じる綿毛状構造は
疎で直毛状、基部は赤褐色

問い合わせ先：埼玉県病害虫防除所（熊谷市須賀広 784　TEL:048-539-0661）
作成：令和７年７月
発行：埼玉県病害虫防除所

彩の国
埼玉県

チュウゴクアミガサハゴロモが多発しています！

―農家および県民の皆様へ―

チュウゴクアミガサハゴロモは中国を原産とするカメムシ目ハゴロモ科の昆虫であり、韓国に分布拡大した際にはブルーベリーに大きな被害をもたらしました。

平成27年に日本国内で初めて発生が確認されて以降、全国で確認事例が増加しており、昨年（令和6年）には国内の農作物への被害が初報告されました。本虫は非常に広範囲の植物を宿主として利用できることが知られており、植物体への吸汁加害や細い枝などへの産卵を行います。また、枝への産卵時に表面を白色のワックスのような物質で被覆し、卵を保護します。

今秋、県内全域で成虫の発生と産卵加害（各種植木類、果樹、茶など）が確認されており、成虫の発生量は予察灯の誘殺数で6倍以上と非常に多くなっています。

【チュウゴクアミガサハゴロモの生態と特徴】

▲成虫（背面図）

▲成虫（側面定位図）
※定位時の成虫は蛾に似ています

▲初齢幼虫（背面図）

▲終齢幼虫（背面図）

※幼虫は腹部の先端から白色のワックス質を分泌し、背面に向けて覆うような形態をとります（幼虫写真内赤矢印）

・本年、埼玉県では成虫・幼虫ともに2回の発生が確認されました。
・秋に産卵された卵はそのまま越冬し、翌年の春に幼虫がふ化します。

【チュウゴクアミガサハゴロモによる被害の見分け方】

・県内には本種と同様に枝表面で白色のワックスを分泌する虫がいて、以下がその違いになります。

【チュウゴクアミガサハゴロモの場合】

枝表面のワックスをこすると、その下から木くずが詰まった亀裂が確認できる

【その他の虫（写真はアオバハゴロモ）の場合】

ワックスを取ろうとすると虫が動く・ワックスが取れても枝に亀裂がない

【今できる（冬期）対策について】

①産卵された枝の切除・処分 → 発生源を取り除く
②枝を切れない／切りたくない場合はテープで覆う → ふ化した幼虫が出て来られないようにする
③冬季の対策は3月頃までに → 卵のふ化前に行うことが重要
※切除した産卵枝は放置せず、穴を掘って埋めるなど適切に処分してください。

問い合わせ先：埼玉県病害虫防除所（熊谷市須賀広784 TEL:048-539-0661）
作成：令和7年11月
発行：埼玉県病害虫防除所

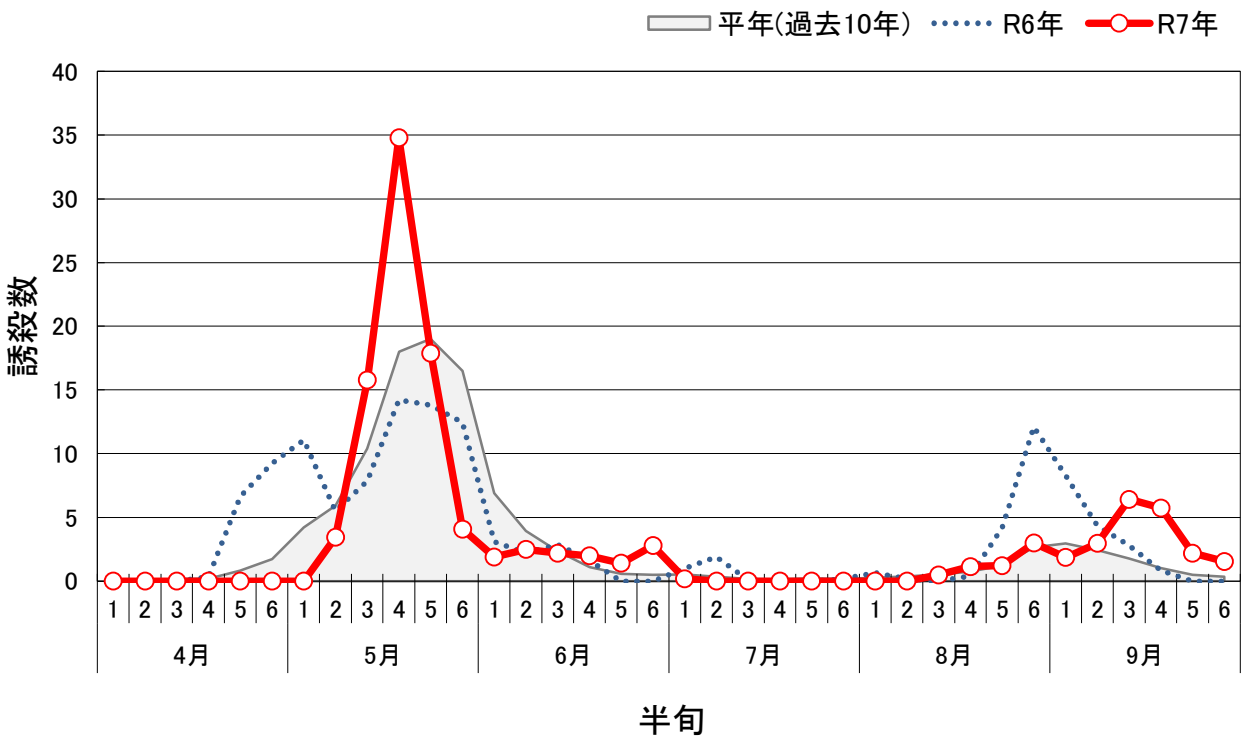
埼玉県病害虫防除所公式X（エックス）アカウント→

（２）　病害虫発生予察調査等結果

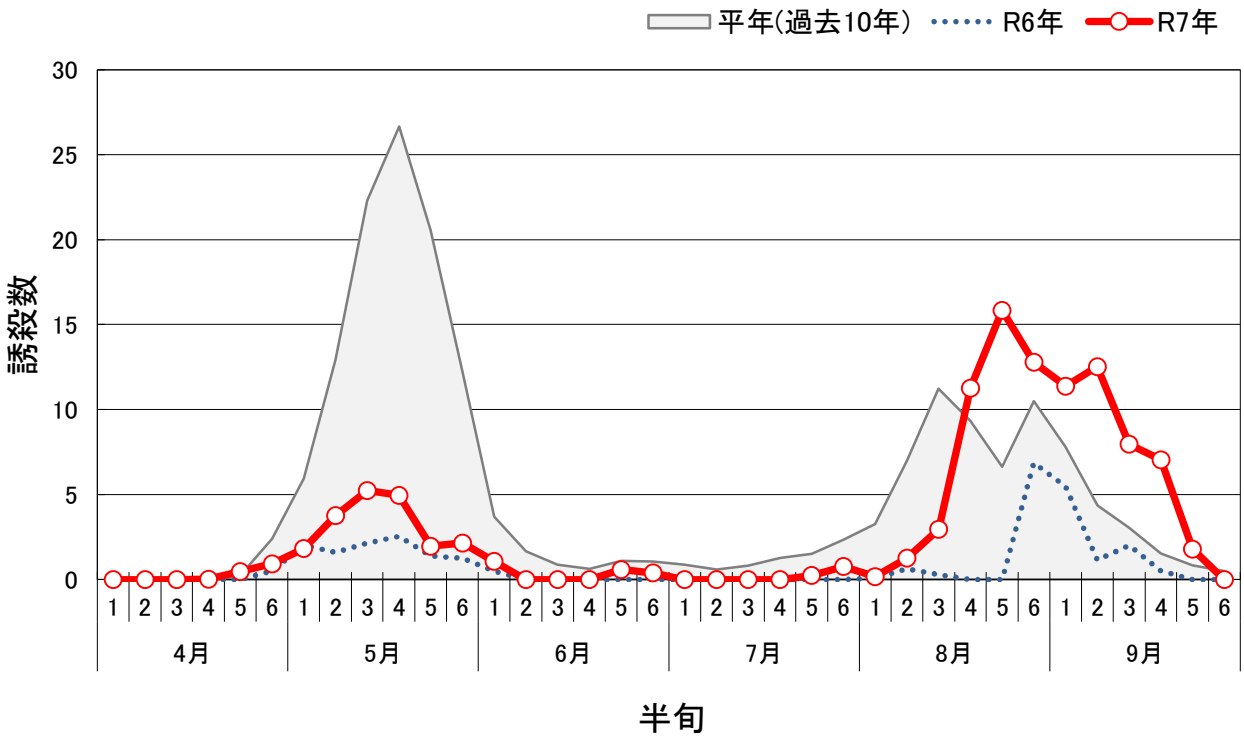
ア　水稲・麦

（ア）　フタオビコヤガ（イネアオムシ）のフェロモントラップ調査（4～9 月）

対象作物:水稲　　調査地点:熊谷市中曽根

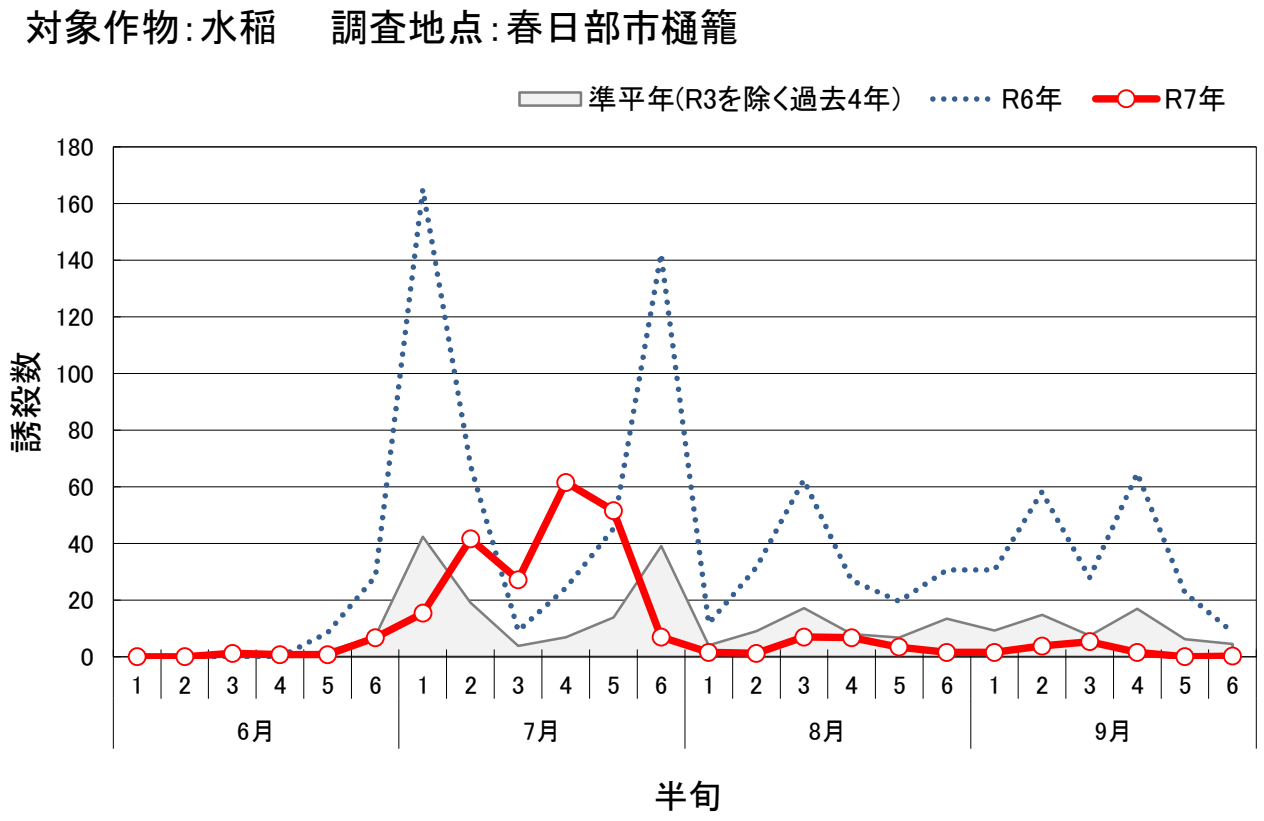


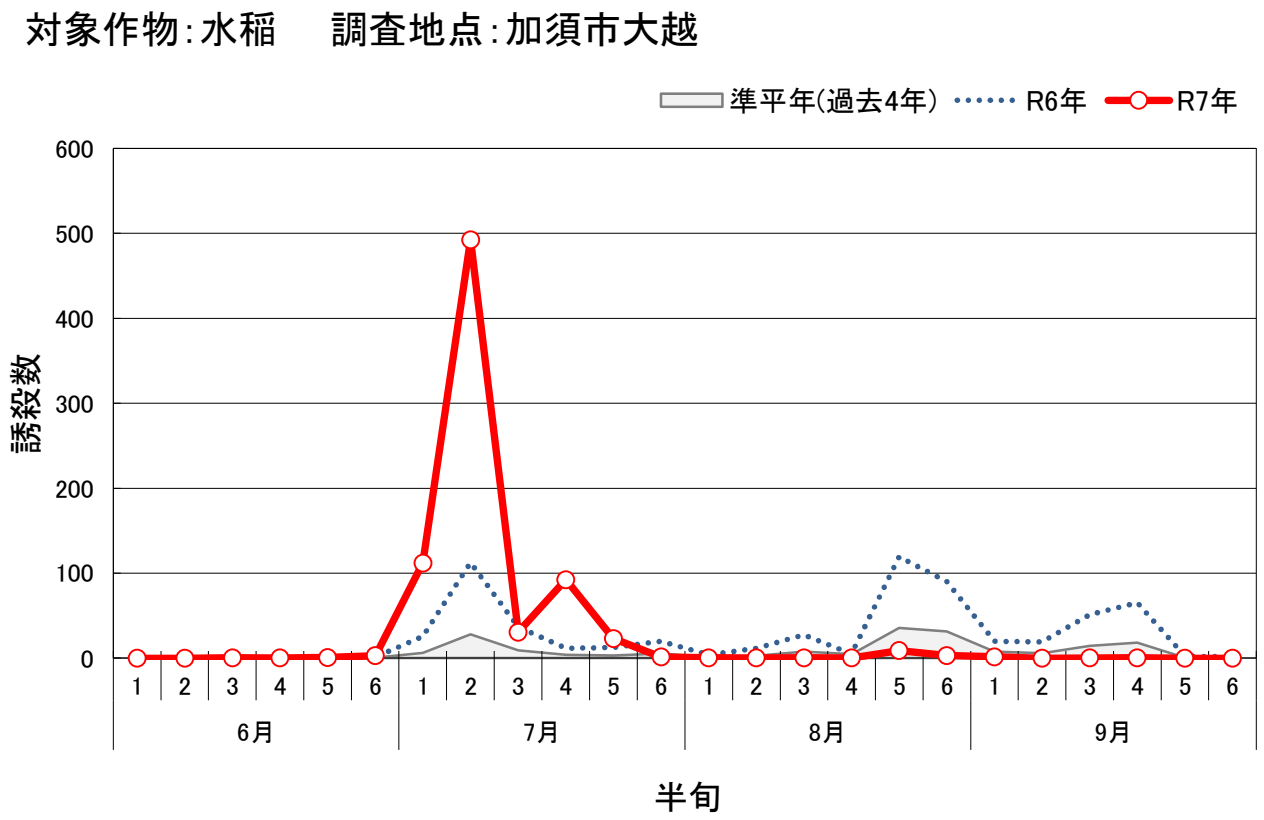
対象作物:水稲　　調査地点:加須市戸室



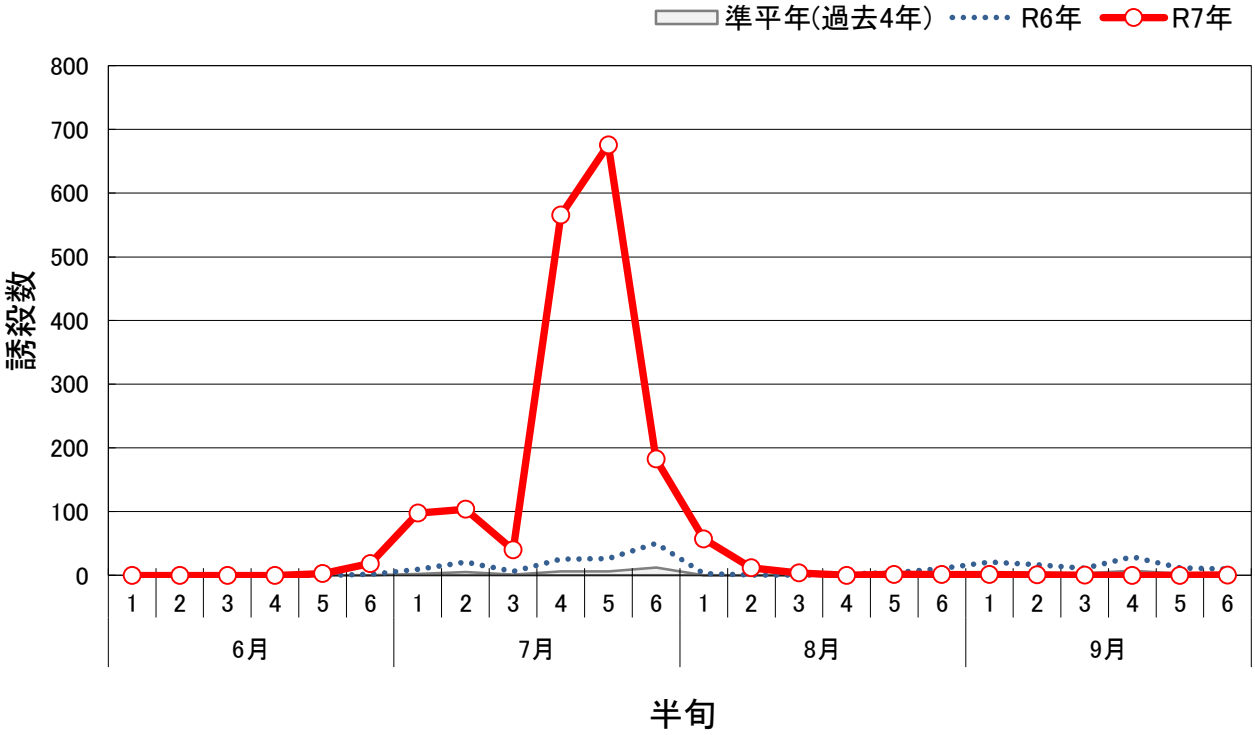
（イ） イネカメムシ予察灯誘殺消長（6～9 月、多誘殺地点のみ）

a 白熱電球予察灯（水稲各種害虫調査用）



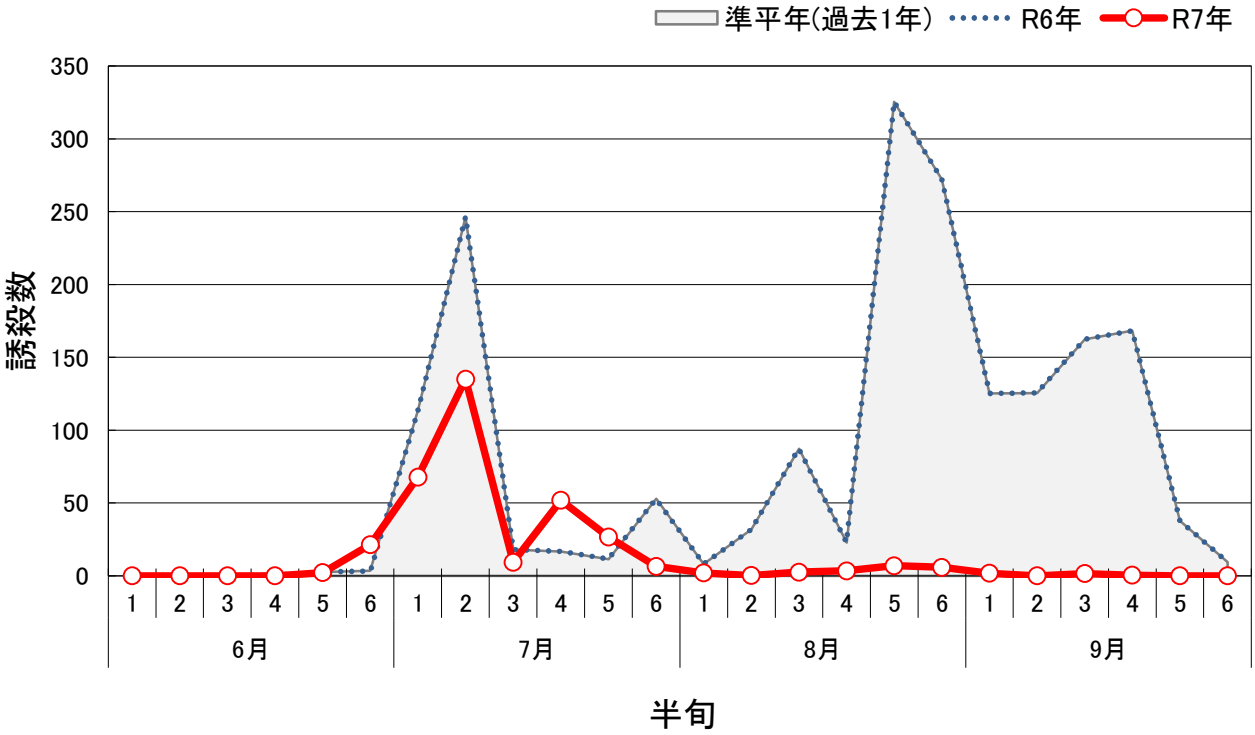


対象作物:水稲　調査地点:熊谷市玉井

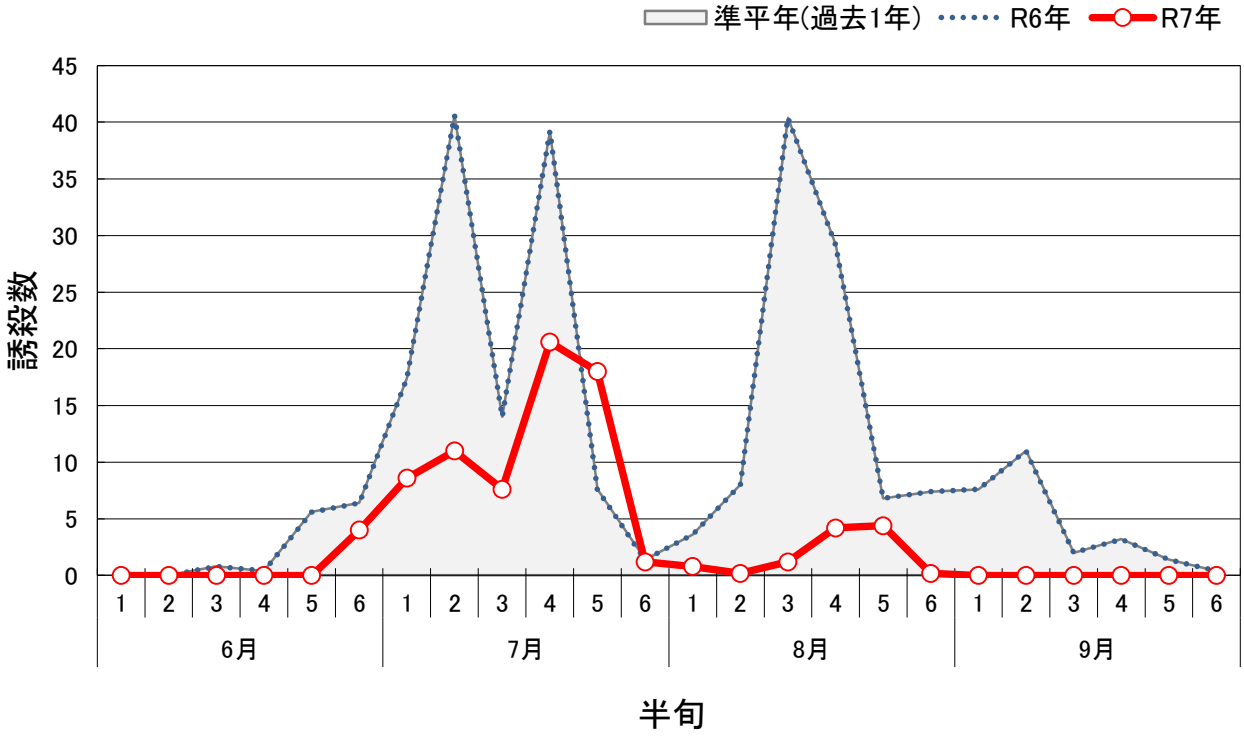


b　水銀灯予察灯（果樹カメムシ類調査用）

対象作物:水稲　調査地点:久喜試験場



対象作物:水稲　　調査地点:春日部市内牧



（ウ）赤かび病の発生に好適な気象条件の出現状況（熊谷）

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月１日から4月30日までの積算日数が11日（平年同期9日）と過去10年で4番目に多く、5月1日から13日までの積算日数は11日に達しています。なかでも、4月24日から5月13までの20日間では子のう胞子飛散好適日の出現が16日に達しており、11月下旬以降に播種した小麦が最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致した。

このため、5月中旬の病害虫発生状況調査では、各調査地点で各麦種とも本病の発生が見られた

年月日	平均気温（℃）	最高気温（℃）	最低気温（℃）	降水量（mm）	降水有無（無=1）	平均湿度（%）	子のう殻形成好適日	子のう胞子飛散好適日	多発生好適日	飛散好適日積算(3/1～) 本年	平年
2025/04/01	5.7	6.6	4.5	30.5	0	93				1	1.4
2025/04/02	10.3	14.6	6.5	21.5	0	90				1	1.5
2025/04/03	8.4	10.0	5.5	8.5	0	88				1	1.6
2025/04/04	10.2	17.6	2.8	0.0	0	59				1	1.9
2025/04/05	11.5	18.3	4.4	0.0	1	58				1	2.0
2025/04/06	14.4	20.8	9.9	0.0	1	72				1	2.3
2025/04/07	14.6	20.9	10.0	0.0	1	48				1	2.5
2025/04/08	14.0	21.1	5.7	0.0	0	55	＊			1	2.8
2025/04/09	15.9	22.0	10.0	0.0	1	46	＊	○		2	2.8
2025/04/10	15.1	21.8	11.5	0.0	0	64	＊	○		3	2.9
2025/04/11	15.6	21.7	12.4	3.0	0	79	＊	○		4	3.0
2025/04/12	15.2	22.2	8.8	0.0	1	66	＊			4	3.2
2025/04/13	11.8	12.6	11.0	26.5	0	92				4	3.4
2025/04/14	15.8	22.3	12.4	17.5	0	82	＊	○		5	3.5
2025/04/15	14.5	20.7	10.1	0.0	0	58	＊	○		6	3.9
2025/04/16	14.4	22.0	6.5	0.0	1	34	＊			6	4.1
2025/04/17	15.9	25.1	6.5	0.0	1	48				6	4.6
2025/04/18	19.1	26.0	12.8	0.0	1	57				6	5.3
2025/04/19	21.4	29.8	13.9	0.0	1	60				6	5.8
2025/04/20	20.1	25.4	16.5	0.0	0	76	＊	○		7	6.1
2025/04/21	19.2	27.3	13.2	0.0	1	45				7	6.4
2025/04/22	17.7	23.7	10.3	0.0	1	66				7	7.0
2025/04/23	17.2	18.8	15.8	6.5	0	89				7	7.5
2025/04/24	20.2	26.6	16.4	0.0	0	78	＊	○		8	8.0
2025/04/25	16.7	19.5	14.5	0.0	0	78	＊	○		9	8.5
2025/04/26	15.1	19.3	10.4	0.0	1	57				9	8.9
2025/04/27	17.8	25.8	7.3	0.0	1	50				9	9.5
2025/04/28	17.2	22.4	13.6	7.0	0	73	＊	○		10	9.9
2025/04/29	16.6	22.9	11.4	0.5	0	52	＊	○		11	10.2
2025/04/30	18.0	25.9	11.2	0.0	1	40	＊	○		12	10.2
2025/05/01	18.0	25.7	11.4	0.0	1	60				12	
2025/05/02	16.3	19.4	14.0	53.0	0	87	＊	○		13	
2025/05/03	18.8	25.6	13.7	0.0	1	54	＊	○		14	
2025/05/04	18.0	24.8	13.2	1.5	0	70	＊	○		15	
2025/05/05	17.4	24.1	10.2	0.0	1	51	＊	○		16	
2025/05/06	14.3	16.9	13.1	20.0	0	87	＊	○		17	
2025/05/07	17.4	22.7	12.9	5.0	0	54	＊	○		18	
2025/05/08	17.4	24.1	11.7	0.0	1	49				18	
2025/05/09	17.8	24.3	13.2	6.0	0	74	＊	○		19	
2025/05/10	16.9	20.7	14.6	6.5	0	95	＊	○		20	
2025/05/11	20.4	26.4	14.2	0.0	0	59	＊	○		21	
2025/05/12	16.2	18.7	14.5	2.5	0	86	＊	○		22	
2025/05/13	20.6	27.4	14.3	0.0	0	65	＊	○		23	
出現日数							25	22	0		

●：子のう殻形成好適日 ：平均気温が13℃以上で降雨直後(前日または当日)
○：子のう胞子飛散好適日：最高気温が15℃以上かつ最低気温が10℃以上で、湿度80%以上または降雨直後(前日または当日)
△：子のう胞子飛散好適日の温度条件が合致しており、かつ湿度70～79%の場合
◎：多発生好適日：平均気温が18℃以上で、前日または当日に降雨があり、平均湿度が80%以上
※赤かび病の第一次伝染源である子のう殻の形成が盛んになるのは、日平均気温が13℃以上で降雨直後である。子のう胞子の飛散が盛んになるのは、日最高気温で15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上か降雨直後である。また、出穂期以降の平均気温が18～20℃を越え、湿度も80%以上が3日以上続く場合、あるいは降雨又は濃霧頻度が高い（日照時間が少ない）場合多発しやすい。

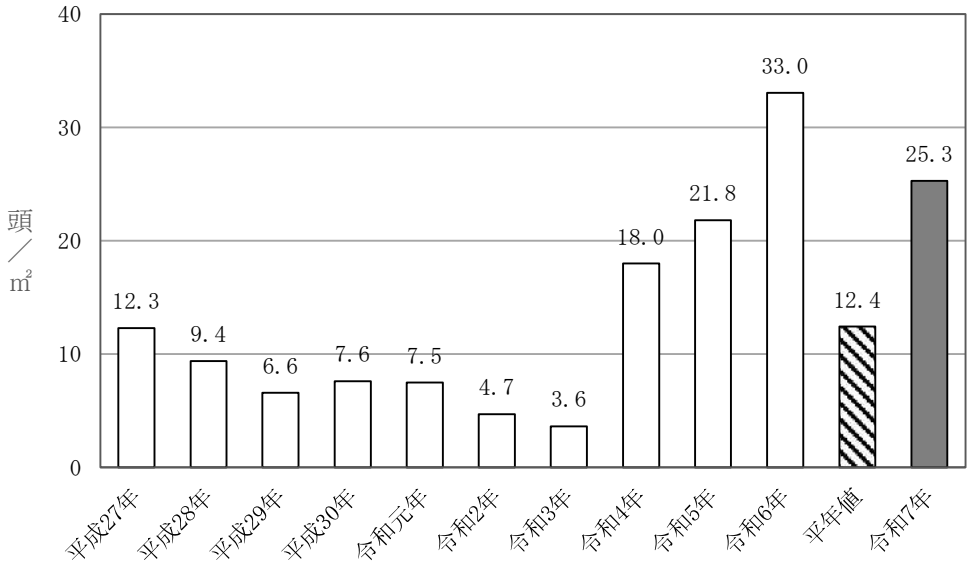
（エ）麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類生息密度調査(5月)

調査方法：麦類の乳熟期(令和7年5月9日～21日)に、県内15地点の麦類ほ場において、1地点3か所で1m幅(0.125～0.75㎡)の麦穂を10回叩いて落ちて来るヒメトビウンカを採取し、1㎡当たりの生息密度を算出した。

調査結果：　令和7年度のヒメトビウンカの麦類叩き出し調査の結果は25.3頭/㎡で、過去10年で最も高かった令和6年度(33.0頭/㎡)に次いで高く、平年の約2倍となった。また、調査地点によるばらつきはあるが、16調査地点のうち11調査地点で平年を超える生息密度であった。

図．令和7年5月麦類ウンカ・ヨコバイ生息密度調査結果　（単位：　頭/㎡）

調査場所	調査月日	麦種	ヒメトビウンカ			ツマグロヨコバイ		
			成虫	幼虫	計	成虫	幼虫	計
川越市古谷上	5/14	小麦	0.0	51.1	**51.1**	0.0	0.0	**0.0**
坂戸市片柳	5/14	小麦	0.0	4.0	**4.0**	0.0	0.4	**0.4**
熊谷市樋春	5/9	小麦	0.0	15.6	**15.6**	0.0	2.2	**2.2**
熊谷市中曽根	5/9	小麦	0.0	17.0	**17.0**	0.0	2.2	**2.2**
川島町戸守	5/9	小麦	0.0	9.6	**9.6**	0.0	0.0	**0.0**
嵐山町吉田	5/13	小麦	0.7	15.6	**16.3**	0.0	0.0	**0.0**
嵐山町志賀	5/13	小麦	0.0	51.1	**51.1**	0.0	0.0	**0.0**
鴻巣市屈巣	5/20	小麦	0.0	58.7	**58.7**	0.0	0.0	**0.0**
行田市上池守	5/15	小麦	0.0	17.8	**17.8**	0.0	0.0	**0.0**
行田市前谷	5/15	小麦	0.0	46.7	**46.7**	0.0	0.0	**0.0**
加須市大越	5/15	小麦	0.0	29.3	**29.3**	0.0	0.0	**0.0**
熊谷市今井	5/21	小麦	0.0	53.3	**53.3**	0.0	0.0	**0.0**
上里町長浜	5/15	小麦	0.0	8.9	**8.9**	0.0	0.0	**0.0**
本庄市児玉町	5/15	小麦	0.0	22.7	**22.7**	0.0	0.0	**0.0**
白岡市太田新井	5/15	小麦	0.0	0.0	**0.0**	0.0	0.0	**0.0**
蓮田市駒崎	5/15	小麦	0.0	2.2	**2.2**	0.0	0.0	**0.0**
平均(16地点)			0.0	25.2	**25.3**	0.0	0.3	**0.3**
昨年(令和6年)			0.0	33.0	33.0	0.0	0.3	0.3
平年値(過去10年間:平成27年～令和6年)			2.2	10.2	12.4	0.1	0.4	0.5



図．令和7年5月ヒメトビウンカ密度調査結果（麦類叩き出し）

（オ）予察灯調査（5～9月）

病害虫名	ニカメイガ

地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	3	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	1	2	0	0	
	4	1	0	1	0	0	
	5	3	0	0	1	0	
	6	4	0	0	1	0	
	計	8	4	3	2	0	17
	平年値	8.0	1.6	17.2	19.8	6.2	52.8
川島町上八ツ林	1	0	1	7	5	17	
	2	0	1	9	6	3	
	3	2	2	1	18	12	
	4	1	1	7	5	2	
	5	0	6	12	6	2	
	6	2	6	10	21	0	
	計	5	17	46	61	36	165
	平年値	3.8	7.1	6.0	5.9	7.9	30.7
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	1	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	1	0	0	1
	平年値	1.1	1.9	7.1	4.5	1.2	15.8
熊谷市玉井	1	0	1	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	4	0	0	0	
	5	0	1	0	0	0	
	6	0	1	0	0	0	
	計	0	7	0	0	0	7
	平年値	2.1	4.6	2.7	1.6	1.9	12.9
加須市大越	1	0	2	3	1	3	
	2	1	0	0	2	2	
	3	7	0	1	0	1	
	4	11	0	1	0	0	
	5	4	2	5	3	0	
	6	1	2	3	9	0	
	計	24	6	13	15	6	64
	平年値	37.0	10.2	15.3	16.6	7.3	83.8
春日部市樋籠	1	0	2	1	2	6	
	2	0	1	0	0	0	
	3	0	1	3	0	21	
	4	8	0	12	3	0	
	5	6	0	26	0	0	
	6	10	0	16	19	0	
	計	24	4	58	24	27	137
	平年値	6.5	5.9	16.0	21.8	3.7	53.9

病害虫名	イネミズゾウムシ

地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	1	0	0	1	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	1	0	0	2	0	3
	平年値	1.7	1.2	12.1	6.2	4.4	25.6
川島町上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	1.3	0.4	1.2	0.8	0.0	3.7
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.4	0.6	0.7	1.3	0.1	3.1
熊谷市玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	1	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	1	0	0	0	0	1
	平年値	1.0	1.0	6.0	1.1	0.0	9.1
加須市大越	1	0	1	0	1	0	
	2	0	5	98	2	0	
	3	0	0	3	1	0	
	4	5	0	229	0	0	
	5	0	0	126	0	0	
	6	0	1	10	0	0	
	計	5	7	466	4	0	482
	平年値	18.8	0.7	142.2	6.9	0.3	168.0
春日部市樋籠	1	0	2	0	2	1	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	1	0	0	
	4	11	1	17	1	0	
	5	1	0	16	0	0	
	6	0	0	4	0	0	
	計	12	3	38	3	1	57
	平年値	14.7	3.5	146.5	9.2	0.8	174.7

注）平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH27～R1年度と大越R3～R6の9年間の平均値を使用。

病害虫名	ツマグロヨコバイ						
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	0	0	2	0	
	2	0	0	1	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	1	0	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	2	2	1	5
	平年値	0.0	0.6	1.6	2.2	0.9	5.3
川島町上八ツ林	1	0	0	0	0	2	
	2	0	0	0	0	1	
	3	0	0	0	0	7	
	4	0	0	0	0	2	
	5	0	0	2	0	0	
	6	0	0	2	0	0	
	計	0	0	4	0	12	16
	平年値	0.2	1.2	11.0	10.8	19.0	42.2
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	0	1	1	
	2	0	0	0	0	11	
	3	0	0	0	3	65	
	4	0	0	0	23	57	
	5	0	0	0	2	2	
	6	0	0	0	2	1	
	計	0	0	0	31	137	168
	平年値	0.9	1.8	7.0	54.5	96.4	160.6
熊谷市玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	1	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	1	0	0	0	
	5	0	0	1	0	0	
	6	0	0	1	0	0	
	計	0	1	2	1	0	4
	平年値	0.6	0.3	5.1	9.8	16.2	32.0
加須市大越	1	0	0	1	0	2	
	2	0	0	4	0	1	
	3	0	0	1	0	1	
	4	0	0	12	1	0	
	5	0	0	4	0	0	
	6	0	0	1	0	0	
	計	0	0	23	1	4	28
	平年値	1.1	5.2	66.6	68.4	47.1	175.6
春日部市樋籠	1	0	0	0	1	29	
	2	0	0	0	0	9	
	3	0	2	0	0	3	
	4	0	1	1	2	4	
	5	0	0	2	1	0	
	6	0	1	0	0	0	
	計	0	4	3	4	45	56
	平年値	0.3	9.8	8.9	5.4	4.6	29.0

病害虫名	セジロウンカ						
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	1	1	
	3	0	0	0	8	0	
	4	0	0	0	8	0	
	5	0	0	0	3	0	
	6	0	0	0	2	0	
	計	0	0	0	22	1	23
	平年値	0.0	1.5	8.2	74.7	55.6	140.0
川島町上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.3	1.0	3.5	3.6	8.4
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	0	4	2	
	3	0	0	1	4	0	
	4	0	0	1	1	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	3	2	
	計	0	0	2	13	5	20
	平年値	0.0	1.3	1.2	23.2	9.8	35.5
熊谷市玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	4	2	
	3	0	0	0	1	6	
	4	0	0	0	3	1	
	5	0	0	0	5	1	
	6	0	0	0	1	1	
	計	0	0	0	14	11	25
	平年値	0.0	0.1	5.2	12.2	9.0	26.5
加須市大越	1	0	0	0	1	3	
	2	0	0	0	0	10	
	3	0	0	0	0	4	
	4	0	0	0	0	4	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	1	0	
	計	0	0	0	2	21	23
	平年値	0.0	0.7	2.7	11.4	13.3	25.2
春日部市樋籠	1	0	0	0	11	8	
	2	0	0	0	2	7	
	3	0	0	0	0	1	
	4	0	0	0	0	5	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	3	0	
	計	0	0	0	16	21	37
	平年値	0.1	0.8	1.3	2.2	0.6	5.0

注）平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH27～R1年度と大越R3～R6の9年間の平均値を使用。

病害虫名	ヒメトビウンカ						
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	0	4	77	4	
	2	0	0	8	38	1	
	3	0	3	0	8	0	
	4	0	1	0	3	1	
	5	0	1	0	4	0	
	6	0	0	14	7	0	
	計	0	5	26	137	6	174
	平年値	2.6	20.5	81.8	123.3	11.5	239.7
川島町上八ツ林	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	0	0	1	
	3	0	0	0	1	1	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	3	4
	平年値	2.7	6.2	31.3	95.0	13.9	149.1
本庄市児玉町吉田林	1	0	1	0	106	51	
	2	0	0	29	61	15	
	3	0	0	33	45	7	
	4	0	0	2	47	1	
	5	0	0	10	34	0	
	6	0	0	20	84	0	
	計	0	1	94	377	74	546
	平年値	2.4	6.6	60.7	141.8	33.0	244.5
熊谷市玉井	1	0	0	45	73	13	
	2	0	2	81	40	5	
	3	0	1	3	10	2	
	4	1	16	21	21	2	
	5	0	19	67	28	0	
	6	0	170	131	41	5	
	計	1	208	348	213	27	797
	平年値	2.3	9.3	101.4	121.3	21.8	256.1
加須市大越	1	0	0	602	121	294	
	2	0	20	1193	297	98	
	3	0	6	23	75	14	
	4	0	2	33	3	12	
	5	0	2	116	7	0	
	6	0	70	264	245	2	
	計	0	100	2231	748	420	3499
	平年値	4.6	35.8	299.7	590.6	21.6	884.2
春日部市樋籠	1	0	0	2	19	19	
	2	0	0	0	6	11	
	3	0	0	0	3	2	
	4	0	0	0	3	3	
	5	0	0	0	2	0	
	6	0	2	3	10	0	
	計	0	2	5	43	35	85
	平年値	0.4	22.9	31.7	20.6	3.6	79.2

病害虫名	フタオビコヤガ						
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	2	0	0	1	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	1	1	1	0	
	4	0	1	0	0	0	
	5	0	0	0	1	0	
	6	1	0	0	2	0	
	計	1	4	1	4	1	11
	平年値	0.6	1.0	5.1	3.3	2.3	12.3
川島町上八ツ林	1	1	0	0	0	1	
	2	0	0	2	1	0	
	3	1	0	0	0	3	
	4	1	0	0	0	0	
	5	1	0	0	0	0	
	6	1	0	2	0	0	
	計	5	0	4	1	4	14
	平年値	6.6	5.0	3.4	13.4	4.9	33.3
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	12	0	
	計	0	0	0	12	0	12
	平年値	0.1	1.5	4.8	16.4	9.0	31.8
熊谷市玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	3	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	3	3
	平年値	0.2	0.5	0.3	1.5	2.4	4.9
加須市大越	1	0	0	0	11	5	
	2	0	0	0	7	2	
	3	0	0	1	16	1	
	4	0	0	0	7	0	
	5	0	0	0	12	0	
	6	0	0	6	16	1	
	計	0	0	7	69	9	85
	平年値	3.6	4.7	18.4	60.0	12.8	91.3
春日部市樋籠	1	1	0	0	0	11	
	2	0	0	0	0	4	
	3	0	0	0	1	3	
	4	0	0	0	0	2	
	5	0	1	0	6	2	
	6	0	0	3	19	0	
	計	1	1	3	26	22	53
	平年値	0.2	2.4	1.2	6.8	1.9	12.5

注）平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH27～R1年度と大越R3～R6の9年間の平均値を使用。

病害虫名	斑点米カメムシ類(イネカメ、イネホソを除く)						
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	1	13	4	4	
	2	0	0	20	2	1	
	3	1	1	4	2	3	
	4	0	0	13	1	0	
	5	0	3	5	3	0	
	6	0	8	2	7	0	
	計	1	13	57	19	8	98
	平年値	0.2	1.4	5.9	9.9	5.4	22.8
川島町上八ツ林	1	0	0	1	2	8	
	2	0	0	23	2	4	
	3	1	0	6	4	7	
	4	1	1	1	0	3	
	5	0	0	3	1	2	
	6	0	1	11	1	1	
	計	2	2	45	10	25	84
	平年値	0.0	2.4	2.7	9.0	7.6	21.7
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	1	8	6	
	2	0	3	2	2	9	
	3	0	0	4	2	1	
	4	3	0	7	9	6	
	5	2	6	9	7	2	
	6	0	15	9	9	1	
	計	5	24	32	37	25	123
	平年値	1.7	5.9	27.5	24.1	42.8	102.0
熊谷市玉井	1	0	0	117	70	1	
	2	0	1	104	3	2	
	3	0	1	30	7	2	
	4	1	0	503	6	0	
	5	0	4	747	4	0	
	6	0	21	188	2	1	
	計	1	27	1689	92	6	1815
	平年値	0.1	2.5	5.5	4.3	12.7	25.1
加須市大越	1	0	1	108	3	4	
	2	0	7	550	0	5	
	3	0	2	10	3	1	
	4	0	3	131	1	5	
	5	1	12	74	10	2	
	6	0	17	7	8	2	
	計	1	42	880	25	19	967
	平年値	0.3	2.7	41.7	56.0	34.3	124.9
春日部市樋籠	1	0	7	22	12	8	
	2	0	2	52	6	17	
	3	0	8	21	15	11	
	4	10	6	73	20	6	
	5	2	20	61	26	9	
	6	0	23	29	25	1	
	計	12	66	258	104	52	492
	平年値	2.2	11.3	53.4	21.6	30.1	118.6

病害虫名	イネホソミドリカスミカメ (別和名:アカヒゲホソミドリカスミカメ)						
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	0	1	2	2	
	2	0	2	5	0	1	
	3	0	10	1	0	1	
	4	1	4	0	0	1	
	5	0	0	4	3	0	
	6	0	5	2	2	1	
	計	1	21	13	7	6	48
	平年値	0.7	31.9	56.7	24.1	6.8	120.2
川島町上八ツ林	1	0	0	1	0	0	
	2	0	0	1	0	0	
	3	0	0	1	0	1	
	4	0	1	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	2	0	0	0	
	計	0	3	3	0	1	7
	平年値	0.1	7.4	11.6	7.0	3.1	29.2
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	13	13	0	
	2	0	24	16	6	5	
	3	0	1	7	4	0	
	4	0	10	3	7	3	
	5	0	7	26	4	3	
	6	0	13	10	13	1	
	計	0	55	75	47	12	189
	平年値	2.8	63.7	159.5	73.7	29.0	328.7
熊谷市玉井	1	0	3	10	0	0	
	2	0	88	1	1	1	
	3	0	50	0	0	2	
	4	1	66	4	0	1	
	5	0	13	17	0	2	
	6	0	15	14	1	2	
	計	1	235	46	2	8	292
	平年値	14.1	204.0	136.2	51.3	21.5	427.1
加須市大越	1	0	1	21	0	0	
	2	0	35	7	1	0	
	3	0	23	2	1	1	
	4	0	11	2	0	1	
	5	0	8	26	0	0	
	6	0	16	4	1	0	
	計	0	94	62	3	2	161
	平年値	2.8	33.8	63.0	39.9	12.5	146.1
春日部市樋籠	1	0	0	2	1	0	
	2	0	2	0	0	1	
	3	0	7	0	0	3	
	4	1	3	0	0	0	
	5	0	4	4	0	0	
	6	0	2	0	6	0	
	計	1	18	6	7	4	36
	平年値	1.3	19.0	16.3	7.1	4.0	47.7

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH27～R1年度と大越R3～R6の9年間の平均値を使用。

病害虫名	イネカメムシ

地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	0	1	0	0	
	2	0	0	12	1	0	
	3	0	0	3	0	0	
	4	0	0	11	1	0	
	5	0	0	4	3	0	
	6	0	0	1	1	0	
	計	0	0	32	6	0	38
	平年値	0.0	0.0	0.0	1.2	0.6	1.8
川島町上八ツ林	1	0	0	1	1	0	
	2	0	0	22	1	0	
	3	1	0	4	0	0	
	4	1	0	1	0	0	
	5	0	0	1	0	0	
	6	0	0	6	0	0	
	計	2	0	35	2	0	39
	平年値	0.0	0.0	0.1	0.8	0.9	1.8
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	1	0	0	
	3	0	0	1	0	0	
	4	0	0	3	0	0	
	5	0	0	5	1	0	
	6	0	0	1	0	0	
	計	0	0	11	1	0	12
	平年値	0.0	0.0	14.2	2.2	11.1	26.2
熊谷市玉井	1	0	0	113	67	1	
	2	0	0	102	3	1	
	3	0	0	30	5	1	
	4	0	0	501	2	0	
	5	0	0	741	0	0	
	6	0	17	183	0	1	
	計	0	17	1670	77	4	1768
	平年値	0.0	0.0	0.0	1.2	0.7	1.9
加須市大越	1	0	0	83	1	2	
	2	0	0	535	0	0	
	3	0	1	7	1	0	
	4	0	0	110	0	1	
	5	0	1	15	9	0	
	6	0	4	1	3	0	
	計	0	6	751	14	3	774
	平年値	0.0	0.2	22.9	35.0	19.1	77.2
春日部市樋籠	1	0	0	18	3	1	
	2	0	0	48	0	5	
	3	0	2	19	9	7	
	4	0	0	65	7	0	
	5	0	1	52	2	0	
	6	0	4	5	2	0	
	計	0	7	207	23	13	250
	平年値	0.0	2.3	52.1	23.0	23.4	100.8

病害虫名	トビイロウンカ

地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市南田島	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.1	0.4	0.0	0.5
川島町上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.0	0.1	0.5	1.0	1.6
本庄市児玉町吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	1	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	0	1
	平年値	0.0	0.0	0.4	0.0	0.1	0.5
熊谷市玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	1	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	0	1
	平年値	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1
加須市大越	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.0	0.1	0.4	0.7	0.3	1.6
春日部市樋籠	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	2	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	1	0	
	計	0	0	0	1	3	4
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2

注）平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH27～R1年度と大越R3～R6の9年間の平均値を使用。

（カ）いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9 月）

ａ　葉いもち発生予測システム（BLASTAM）について

イネいもち病は空気伝染性病害であるため、発生には気象条件が大きく影響する。気温が 20～25℃で曇雨天の日が続き、イネの葉に水滴が付いている状態がいもち病菌の分生子の発芽、侵入、蔓延に好適な条件であり、発生が助長される。

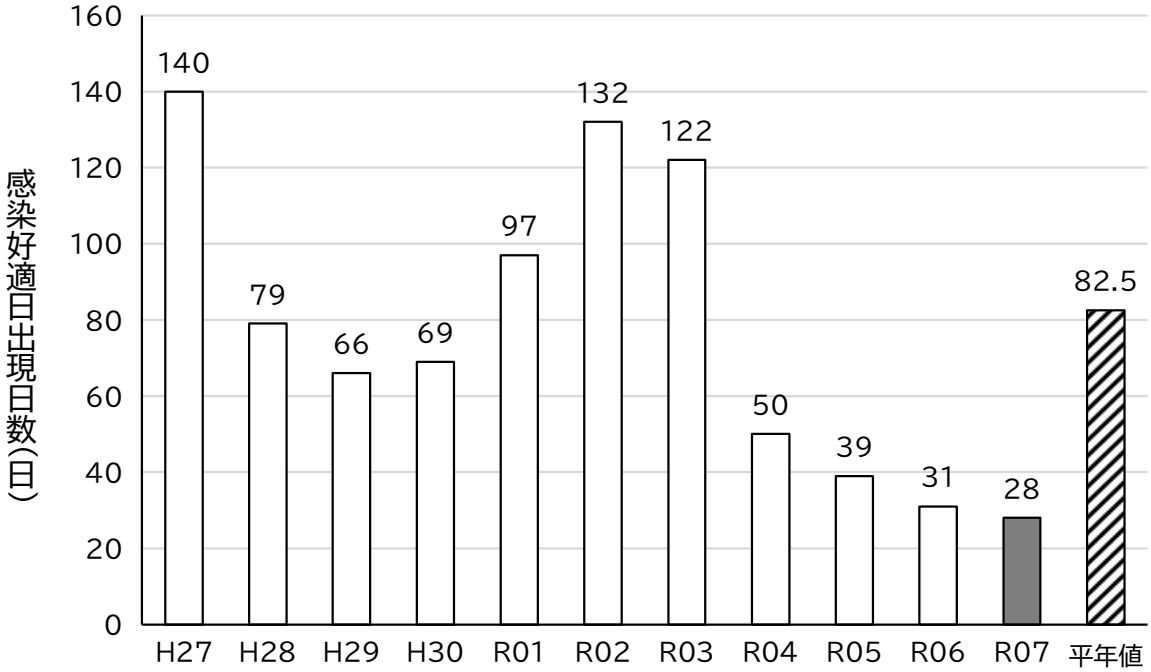
葉いもち発生予測システム（BLASTAM）では、アメダス各地点の気象データの降水量、日照時間、風速からイネ葉面の濡れ時間（湿潤時間）を推定し、気温との組み合わせで、いもち病感染好適条件を判定するものである。

ｂ　イネいもち病の発生状況について

ホームページ上で、6 月 1 日から 15 日ごとに、県内の感染好適日の出現状況を発表し、平年（過去 10 年間）との比較を数値化することで、適期防除を啓発した。

埼玉県において感染好適日が初出現したのは 5 月 17 日(平年 6 月 7 日)であり、平年より早かった。例年では6月上旬から7月中旬ごろまでが梅雨であり、いもち病の感染好適日が多く出現するが、本年の6～7月の感染好適日は27日で平年(48.4日)の55%と少なかった。梅雨期の降水量は少なく、6月上旬から9月下旬まで高温に経過したため、7月 16 日を最後に感染好適日は出現しなかった。令和6年は7月 17 日を最後に9月 23 日まで感染好適日が出現しなかったが、9 月 24 日以降にまとまって出現したため、集計期間中(5 月 1 日～9 月 30 日)の総出現日数は過去 10 年で最も少なくなった(下図)。

毎年 7 月中旬に実施しているイネいもち病(葉いもち)発生予察調査においても、発病地点率は47.6%(平年44.0%、昨年27.3%)と平年より高かったが、発病株率は2.5%(平年8.4%、昨年 0.8%)と平年より少なくなった。



図．葉いもち感染好適日の出現日数
(5 月 1 日～9 月 30 日における県内 8 地点の合計日数)

表．いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（令和7年5～9月、JPP-ＮＥＴより引用）

月日＼地点	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさまい	越谷	所沢
5月1日	－	－	－	－	－	－	－	－
	感染好適日が出現しなかったため、省略							
5月17日	－	●	－	－	－	－	－	－
5月18日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月19日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月20日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月21日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月22日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月23日	4	－	－	－	－	－	－	－
5月24日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月25日	－	－	－	－	－	－	4	－
5月26日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月27日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月28日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月29日	－	－	－	－	－	－	－	－
5月30日	3	4	4	3	3	4	1	－
5月31日	－	－	－	3	－	－	－	－
6月1日	－	－	－	－	－	－	4	－
6月2日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月3日	4	4	－	1	－	－	－	－
6月4日	4	－	－	4	－	－	－	－
6月5日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月6日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月7日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月8日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月9日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月10日	●	●	●	●	●	－	－	4
6月11日	●	●	●	●	●	●	●	●
6月12日	－	－	●	－	－	●	●	－
6月13日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月14日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月15日	●	●	●	1	●	●	●	●
6月16日	－	－	3	●	－	3	●	●
6月17日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月18日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月19日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月20日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月21日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月22日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月23日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月24日	2	－	－	2	－	－	－	－
6月25日	－	3	－	－	－	－	－	－
6月26日	2	－	－	2	－	3	－	2
6月27日	－	－	3	－	－	3	3	2
6月28日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月29日	－	－	－	－	－	－	－	－
6月30日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月1日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月2日	－	2	－	2	－	－	－	－

月日＼地点	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさまい	越谷	所沢
7月3日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月4日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月5日	2	2	－	－	2	3	－	－
7月6日	－	－	－	－	－	3	－	－
7月7日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月8日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月9日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月10日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月11日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月12日	－	－	－	－	2	－	－	－
7月13日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月14日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月15日	－	－	－	－	－	－	－	－
7月16日	－	3	－	●	－	－	3	－
7月17日	－	－	－	－	－	－	－	－
	感染好適日が出現しなかったため省略							
8月31日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月1日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月2日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月3日	2	－	－	－	－	－	－	－
9月4日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月5日	2	－	2	－	－	2	3	2
9月6日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月7日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月8日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月9日	3	－	－	－	－	－	3	－
9月10日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月11日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月12日	2	2	2	2	－	－	－	－
9月13日	2	2	－	－	2	2	－	2
9月14日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月15日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月16日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月17日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月18日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月19日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月20日	－	－	－	－	2	－	－	－
9月21日	－	2	2	－	－	2	2	2
9月22日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月23日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月24日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月25日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月26日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月27日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月28日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月29日	－	－	－	－	－	－	－	－
9月30日	－	－	－	－	－	－	－	－
計	**3**	**4**	**4**	**4**	**3**	**3**	**4**	**3**
平年値	**11.1**	**10.7**	**10.1**	**11.7**	**11.8**	**8.6**	**11.2**	**7.3**

・発生指標の解説（数字の1～4は感染のしやすさの段階を示すものではない。）

●	**感染好適条件**	湿潤時間中の平均気温が15～25℃であり、湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間満たし、当日を含めてその日以前5日間の日平均気温の平均値が20～25℃の範囲にある
1	**準好適条件 1**	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満
2	**準好適条件 2**	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が21℃以上
3	**準好適条件 3**	湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤時間中の平均気温が15～25℃の範囲外
4	**準好適条件 4**	湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い
－	**好適条件なし**	
？	**判定不能**	

（キ）　トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数(5～9月)

令和7年

月日	本年	平年	月日	本年	平年	月日	本年	平年	月日	本年	平年	月日	本年	平年
05/01	0	0.0	06/01	0	0.0	07/01	0	0.3	08/01	0	0.0	09/01	0	0.0
05/02	0	0.0	06/02	0	0.0	07/02	0	0.2	08/02	0	0.0	09/02	0	0.0
05/03	0	0.1	06/03	0	0.1	07/03	0	0.3	08/03	0	0.0	09/03	0	0.0
05/04	0	0.0	06/04	0	0.1	07/04	0	0.4	08/04	0	0.0	09/04	0	0.0
05/05	0	0.0	06/05	0	0.1	07/05	0	0.1	08/05	0	0.0	09/05	0	0.0
05/06	0	0.0	06/06	0	0.0	07/06	0	0.1	08/06	0	0.0	09/06	0	0.0
05/07	0	0.2	06/07	0	0.0	07/07	0	0.2	08/07	1	0.0	09/07	0	0.1
05/08	0	0.1	06/08	0	0.0	07/08	0	0.1	08/08	0	0.0	09/08	0	0.0
05/09	0	0.0	06/09	0	0.2	07/09	0	0.2	08/09	0	0.2	09/09	0	0.0
05/10	1	0.0	06/10	0	0.0	07/10	0	0.1	08/10	0	0.1	09/10	0	0.0
05/11	0	0.1	06/11	0	0.0	07/11	0	0.2	08/11	0	0.0	09/11	0	0.0
05/12	0	0.1	06/12	0	0.1	07/12	0	0.1	08/12	0	0.0	09/12	0	0.1
05/13	0	0.2	06/13	0	0.0	07/13	0	0.1	08/13	0	0.0	09/13	0	0.1
05/14	0	0.0	06/14	0	0.1	07/14	0	0.1	08/14	0	0.3	09/14	0	0.0
05/15	0	0.0	06/15	1	0.1	07/15	0	0.0	08/15	0	0.1	09/15	0	0.0
05/16	0	0.1	06/16	1	0.1	07/16	0	0.0	08/16	0	0.1	09/16	0	0.0
05/17	0	0.1	06/17	0	0.1	07/17	0	0.1	08/17	0	0.1	09/17	0	0.0
05/18	0	0.1	06/18	0	0.0	07/18	0	0.0	08/18	0	0.0	09/18	0	0.1
05/19	0	0.2	06/19	0	0.0	07/19	0	0.0	08/19	0	0.0	09/19	0	0.0
05/20	0	0.1	06/20	0	0.0	07/20	0	0.0	08/20	0	0.0	09/20	0	0.0
05/21	0	0.1	06/21	0	0.0	07/21	0	0.0	08/21	0	0.0	09/21	0	0.0
05/22	0	0.1	06/22	0	0.1	07/22	0	0.0	08/22	0	0.1	09/22	0	0.0
05/23	0	0.0	06/23	0	0.1	07/23	0	0.0	08/23	0	0.0	09/23	0	0.0
05/24	0	0.0	06/24	0	0.1	07/24	0	0.1	08/24	0	0.0	09/24	0	0.0
05/25	0	0.0	06/25	0	0.1	07/25	0	0.1	08/25	0	0.2	09/25	0	0.1
05/26	0	0.1	06/26	0	0.1	07/26	0	0.1	08/26	0	0.2	09/26	0	0.0
05/27	0	0.0	06/27	0	0.2	07/27	0	0.0	08/27	0	0.2	09/27	0	0.0
05/28	0	0.1	06/28	0	0.1	07/28	0	0.0	08/28	0	0.2	09/28	0	0.1
05/29	0	0.0	06/29	0	0.0	07/29	0	0.0	08/29	0	0.1	09/29	0	0.0
05/30	0	0.0	06/30	0	0.1	07/30	0	0.0	08/30	0	0.0	09/30	0	0.0
05/31	0	0.0				07/31	0	0.0	08/31	0	0.0	合計	4	9.1

（注１）平年値は、平成26～令和6年のうち、令和4年を除く過去10年間の平均値
（令和4年度は6月26日以降欠測であったため）
（注２）数値の説明：0…飛来無し日　1…飛来有り日
（注３）飛来予測日は、JPP-NET（（一社）日本植物防疫協会）が提供する、『ウンカ飛来予測システム』の数値を使用
（注４）トビイロウンカ、セジロウンカは、埼玉県内で越冬できず、中国大陸からジェット気流に乗って飛来する。
（一社）日本植物防疫協会では、大陸での害虫の飛び立ち日と気流の状況から、日本国内各地点への飛来予測日を算出する情報を提供している。予測飛来日回数が多いほど、害虫の多発が予想される。

トビイロウンカによる坪枯れ被害

トビイロウンカ成虫

セジロウンカ成虫

（ク）　スクミリンゴガイの被害状況（６～7月）調査の結果

1　調査年月日：被害状況調査は、田植後1～2か月後に調査（6～7月頃に調査する）
2　調査場所：発生地点での拡大状況を水田及び用水路で実施する／各担当地域
3　調査項目等：次表のとおり（調査日、品種、生息域面積、被害面積率、被害面積、被害状況）
4　具体的な調査方法
　　生息域面積：生息域面積は水田や用排水路の貝や卵塊の目視
　　被害面積率：欠株率1%以上のほ場割合
　　卵塊数：用・排水路又は畦畔10m当たりの平均卵塊数
　　被害状況：欠株の目視

調査年月日		主な調査地点	品種名	作型	移植時期	生息域面積(ha)	被害面積率(%)	被害面積(ha)	卵塊数(塊/10m)	被害状況(被害田の欠株率)		備　考
										平均(%)	最大(%)	
令和7年	7月14日	加須市砂原・下北新井	コシヒカリ	早期	4月下旬	90	17	15.3	18.9	4	95	生息面積・被害面積が昨年よりも増加しており、欠株が多いほ場も数筆ある。排水路の卵塊数は昨年よりもやや減少した。
7年	7月17日	加須市外記新田	コシヒカリ	早期	4月下旬	21	7	1.5	12.3	4	15	生息面積はやや増加したが、欠株等の被害は昨年並みとなった。卵塊数も昨年より減少した。
7年	7月17日	加須市新川通	オオナリ	早植	5月下旬	36	5	1.8	10.1	12	45	昨年より欠株率の高いほ場が多く、被害水田での平均欠株率が高くなった。卵塊数は昨年並みであった。
7年	7月4日	幸手市千塚	コシヒカリ	早期	5月上旬	5	25	1.3	54.3	7	25	昨年より欠株（被害面積昨年比4倍）、卵塊数（昨年比2.3倍）とも増加した。一部に卵塊が多い畦畔（最大171塊/10m）がある。
7年	7月12日	さいたま市西区宝来	不明	早植	5月上旬	7	1	0.1	2.0	1	2	欠株は昨年・一昨年同様少ない。面積としては減少しているが一部が水田から畑になったためであり、生息範囲は拡大している。
7年	7月12日	さいたま市桜区	不明	早植～普通	5月中旬～6月中旬	57	70	39.9	55.7	5	20	昨年より被害田は増加、卵塊数に関しては最大値（147塊/m）が大きく引き上げている。生息面積・被害面積も増加している。
7年	7月18日	富士見市南畑新田	不明	早植～普通	5月中旬～6月中旬	87	20	17.4	12.5	1	3	排水路に貝が生息しているが、欠株等の被害は少ない。ただし、生息域を拡大しており、昨年発生が見られなかったほ場でも欠株が見られた。
7年	7月18日	ふじみ野市福田新田	不明	早植	5月上旬	3	10	0.3	1.0	1	1	今年度から新たに発生を確認した。被害の程度は現状軽微であり調査時点では生貝はほとんど見かけなかった。
7年	7月12日	さいたま市西区塚本町	不明	普通	6月上旬	25	5	1.3	5.0	1	1	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、昨年同様欠株等の被害も少ない。発生面積は昨年とほとんど変わらなかった。
7年	7月22日	吉見町久保田新田	不明	普通	5月下旬	37	8	2.9	7.4	6	40	生息面積・被害面積が昨年よりも増加した。一部水田内に多数の卵塊が確認されたが、平均卵塊数は昨年よりも減少した。
7年	7月22日	鴻巣市大芦	不明	普通	6月中旬	85	8	6.8	9.1	2	15	被害水田面積は昨年より多かった。被害水田での欠株率は昨年並みであったが、卵塊数はやや増加した。
7年	8月1日	熊谷市中奈良・下奈良（南）	不明	普通	6月下旬	10	40	4.0	6.6	19	40	水田内に貝や卵塊が多く、被害水田での欠株率が高いほ場があり、昨年よりも被害が大きい。
7年	8月5日	熊谷市今井・下奈良（南）	不明	普通	6月下旬	34	40	13.6	36.2	3	15	卵塊数・欠株率ともに減少しており、昨年より被害は抑えられている。
7年	8月5日	熊谷市下奈良（北）	不明	普通	6月下旬	29	25	7.4	30.1	6	25	排水路等の卵塊、被害水田面積とも昨年より増加した。欠株率が5%以上のほ場も多く、昨年より被害程度も大きい。
7年	8月5日	熊谷市西城	不明	普通	6月下旬	40	30	11.9	51.1	11	40	排水路等の卵塊、被害水田面積とも昨年より増加した。被害水田での欠株率も高く、昨年よりも被害が大きい。
7年	8月12日	熊谷市善ケ島	不明	普通	6月下旬	52	50	25.9	13.4	9	40	排水路等の卵塊、被害水田面積とも昨年より増加した。一部欠株が多いほ場が数筆あるが、平均欠株率は昨年よりも低い。
7年	8月12日	熊谷市八ツ口	不明	普通	6月下旬	72	25	18.0	10.2	4	20	卵塊数・被害水田面積とも昨年よりやや減少した。被害水田での欠株率も低く、昨年より被害は抑えられている。
7年	8月1日	熊谷市弥藤吾	不明	普通	6月下旬	6	70	4.5	219.2	7	20	被害面積は昨年よりやや増加した。地区内全域で卵塊は多いが（最大卵塊数447塊/10m）、欠株は少ない。
合計（面積）／平均（卵塊数）						**695**		**173.6**	**30.8**			
昨年（令和6年度）						**644**		**143.9**	**24.5**			

（ケ）　水稲観察地点調査(6～9月)

a　２０回振りすくい取り（頭）

			ヒメトビウンカ				セジロウンカ				ツマグロヨコバイ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	幼虫	50.4	12.8	112.9	0.0	0.0	1.2	2.6	0.0	0.0	0.3	20.8	0.0
		成虫	15.0	20.9	80.3	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	2.5	13.7	0.0
	平年値	幼虫	13.2	33.4	83.3	73.4	0.0	0.0	2.5	0.5	0.1	6.6	171.9	197.2
		成虫	7.1	39.2	72.0	64.1	0.0	0.1	3.8	1.0	3.1	13.7	101.2	72.0
5/20以降の移植ほ場	令和7年	幼虫	0.0	6.9	57.8	165.2	0.0	0.0	2.5	9.1	0.0	0.3	4.8	106.3
		成虫	0.0	8.6	57.5	103.3	0.0	0.0	0.7	2.1	0.0	0.5	6.8	250.0
	平年値	幼虫	0.1	13.6	188.4	167.8	0.0	0.3	6.7	9.8	0.2	0.3	6.2	34.7
		成虫	1.0	17.0	117.3	82.5	0.0	0.5	6.0	7.4	0.0	0.8	4.7	32.5

		斑点米カメムシ類（ｲﾈﾎｿﾐﾄﾞﾘｶｽﾐｶﾒ）				斑点米カメムシ類（ｸﾓﾍﾘｶﾒﾑｼ）				斑点米カメムシ類（その他）			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	1.4	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	0.2	0.0
	平年値	1.3	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.8	0.2
5/20以降の移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	1.3	0.0	0.0	0.4	1.3
	平年値	1.6	1.1	1.5	0.2	0.0	0.0	0.2	0.9	0.0	0.1	0.4	1.0

		イネツトムシ				イネアオムシ				イネカメムシ			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.5	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	3.0	4.0
5/20以降の移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	0.2	1.9
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.1	1.8	1.8

・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
・平年値：平成28～令和6年の9年間の平均値（イネカメムシは令和5～令和6年の2年間）
・令和7年度調査地点
【5/20までの移植ほ場】
川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、熊谷市中曽根、加須市麦倉、加須市大越、春日部市樋籠、幸手市神扇
【5/20以降の移植ほ場】
坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田、吉川市中井

b　病害虫発生調査結果

		葉いもち（発病度）				穂いもち（%）（被害籾率）				紋枯病（発病度）			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	0.0	0.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	4.3	0.0
	平年値	0.0	0.8	0.7	1.7	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.4	3.6	17.8
5/20以降の移植ほ場	令和7年	0.0	0.3	1.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.6	17.4
	平年値	0.0	0.3	2.3	2.1	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.4	1.7	12.0

		もみ枯細菌病（%）（発病籾率）				ごま葉枯病（発病度）				ばか苗病（%）（発病株率）			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.3	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	1.7	5.0	0.0	0.0	0.0	5.3	0.0	0.1	0.1	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

		縞葉枯病（%）（発病株率）				心枯線虫病（%）（発病株率）			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	0.1	5.4	11.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.1	2.6	5.8	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	1.5	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.5	1.1	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0

		ニカメイガ（%）（発病株率）				イネツトムシ（個）（苞数/25株あたり）				フタオビコヤガ*（頭）（虫数/1株あたり）			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1

*別名：イネアオムシ

		コブノメイガ（%）（被害葉率）				イネミズゾウムシ（頭）（虫数/25株あたり）			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
5/20以降の移植ほ場	令和7年	0.0	0.0	0.3	3.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.2	1.3	0.2	0.0	0.0	0.0

・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
・平年値：平成28～令和6年の9年間の平均値
・発病度は「R5 発生予察事業の調査実施基準（農林水産省）」に基づき、算出した。

（コ）　イネツトムシ発育予測（6月）

（有効積算温度ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝ計算値：6月1日～）

a 7月9日現在の予測

表1 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測

項　目	令和7年予測	令和6年	平年	平年との差
産卵最盛日	**7月13日**	7月18日	7月20日	平年より7日早い
孵化最盛日	**7月17日**	7月22日	7月24日	平年より7日早い
3齢脱皮最盛日	**7月25日**	7月30日	8月1日	平年より7日早い
4齢脱皮最盛日	**7月29日**	8月2日	8月4日	平年より6日早い

注）：例年多発ほ場では予測値と一致し、少発生ほ場では発生時期が早い
算出方法：令和7年7月8日までの実測気象データ。その後は平年値を入力。
産卵最盛日は(6月1日～有効積算温度539日度の日)。孵化最盛日は(同594日度)
3齢脱皮最盛日は(同722日度)。4齢脱皮最盛日は(772日度)　発育零点は13.4℃。

b 実測気象データによる予測結果

表2 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測結果

項　目	令和7年予測	令和6年	平年	平年との差
産卵最盛日	**7月13日**	7月17日	7月20日	平年より7日早い
孵化最盛日	**7月17日**	7月21日	7月24日	平年より7日早い
3齢脱皮最盛日	**7月25日**	7月28日	8月1日	平年より7日早い
4齢脱皮最盛日	**7月27日**	7月31日	8月4日	平年より8日早い

＊薬剤防除を必要とする目安（孵化最盛日より4～7日の間に密度調査を行う）
孵化直後の幼虫が存在しない場合（既に2～3齢以上に成長）
0.3個体／株［100株調査で30個体］：発生数が確定したと推定。
孵化直後の幼虫が存在する場合（1～2齢が中心）
0.05個体／株［100株調査で5個体］：今後増加が懸念される。
注）0.3個体／株の発生によって、5％以下の減収とみなされる。

参考：神奈川県以南、千葉県海岸線で越冬しているが、神奈川県のピークが5月下旬として、埼玉県への飛来は6/1としている。

（サ）　フタオビコヤガ（イネアオムシ）発育予測（6月）

「有効積算温度ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝ計算値：ﾌｪﾛﾓﾝ調査の越冬世代成虫の50%誘殺日（5月16日）の翌日から」

a 7月9日現在の予測

表1 フタオビコヤガの発育次世代予測

項　目	令和7年予測	令和6年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	**5月16日**	5月15日	5月16日	平年と同様
第1世代成虫発蛾最盛日	**6月16日**	6月14日	6月15日	平年より1日遅い
第2世代成虫発蛾最盛日	**7月5日**	7月7日	7月9日	平年より4日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	**7月24日**	7月26日	7月30日	平年より6日早い

注）：発育零点は10.2℃
算出方法：令和7年7月8日までの気象データ。その後は平年値を入力。
第1世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度341日度の日)。
第2世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度682日度の日)。
第3世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度1023日度の日)。

b 実測気象データによる予測結果

表2 フタオビコヤガの発育次世代予測結果

項　目	令和7年予測	令和6年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	**5月16日**	5月15日	5月16日	平年と同様
第1世代成虫発蛾最盛日	**6月16日**	6月14日	6月15日	平年より1日遅い
第2世代成虫発蛾最盛日	**7月5日**	7月6日	7月9日	平年より4日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	**7月24日**	7月25日	7月30日	平年より7日早い

注）：発育零点は10.2℃
＊薬剤防除を必要とする目安（最盛日の2～7日後）

（シ） いもち病発生状況調査結果（7月）

1　調査時期：7月中旬（基準日7月15日）
2　調査場所：定点および常発地
3　調査項目等：表のとおり
4　調査方法：任意の100株について調査

【参考】　発病度について

1～20：少発生、21～40：中発生
41～70：多発生、71以上：甚発生

いもち病(葉いもち)　左:慢性型病斑　右:進行型

調査年月日（令和）		調査地点	定点又は常発地別	品種名	移植期	草丈（cm）	発病株率（%）	発病度	病斑の種類		発病部位	備　　考
									慢性型	進行型		
7年	7月8日	蓮田市駒崎	過去発生地点	不明	6月中旬	40.0	0	0.0	－	－	－	
〃	7月18日	川越市小中居	定点	コシヒカリ	5月中旬	88.6	0.3	0.1	1	0	葉	100株×3地点
〃	7月16日	坂戸市横沼	定点	むさしの26号	5月下旬	69.3	1	0.3	2	1	葉	100株×3地点
〃	7月16日	毛呂山町箕和田	定点	コシヒカリ	5月中旬	94.6	0	0.0	－	－		100株×3地点 葉色薄め
〃	7月11日	嵐山町吉田	定点	コシヒカリ	6月上旬	68.0	2.0	0.50	5	1	葉	100株×3地点 葉色濃い
〃	7月11日	川島町曲師	旧定点	にじのきらめき	6月上旬	58.8	0	0.0	－	－	－	100株×3地点
〃	7月11日	吉見町西吉見	定点	コシヒカリ	5月中旬	74.6	2.7	0.67	8	0	葉	100株×3地点
〃	7月7日	秩父市太田	常発地	彩のきずな	5月下旬	85.0	0	0.0	－	－	－	畦畔のメヒシバに病斑あり
〃	7月7日	秩父市小柱	常発地	彩のきずな	6月中旬	55.0	2	0.7	2	0	葉	畦畔のメヒシバに病斑あり
〃	7月7日	小鹿野町下小鹿野	常発地	不明	6月中旬	60.0	25.4	6.5	34	0	葉	畦畔のメヒシバに病斑あり
〃	7月7日	皆野町三沢	常発地	コシヒカリ	6月上旬	70.0	5.8	1.5	6	0	葉	
〃	7月8日	本庄市児玉町吉田林	定点	彩のかがやき	6月中旬	25.0	0	0.0	－	－	－	
〃	7月4日	美里町小茂田	定点	コシヒカリ	5月下旬	50.0	0	0.0	－	－	－	
〃	7月11日	熊谷市中曽根	定点	コシヒカリ	5月上旬	85.6	10.7	2.7	32	0	葉	100株×3地点 出穂始
〃	7月14日	行田市前谷	旧定点	彩のかがやき	6月下旬	20.0	0	0.0	－	－	－	
〃	7月16日	加須市麦倉	定点	コシヒカリ	4月下旬	100.3	0	0.0	－	－	－	
〃	7月17日	加須市大越１	定点	にじのきらめき	4月下旬	103.0	1	0.3	1	0	葉	畦畔のメヒシバに病斑多
〃	7月14日	加須市大越２	過去発生地点	不明	6月上旬	65.0	0	0.0	－	－	－	
〃	7月11日	春日部市樋籠	定点	コシヒカリ	5月上旬	89.4	1	0.3	1	0	葉	畦畔メヒシバ病斑多（慢性型）
〃	7月11日	吉川市中井	定点	彩のきずな	5月中旬	59.2	0	0.0	－	－	－	
〃	7月11日	幸手市神扇	定点	コシヒカリ	5月上旬	83.0	0	0.0	－	－	－	
調査地点数：21		発病地点数：10	**発病地点率：47.6%**			**平均**	**2.5**	**0.6**	**9.2**	**0.2**		

いもち病発生状況調査 過去の調査結果

調査年月日（平成）		調査地点数	発病地点数	発病地点率（%）	平均発病株率（%）	平均発病度	病斑の種類		備　　考(注意報発表の有無など)
							慢性型	進行型	
平成27年	7月中下旬	31	23	74.2	17.7	発病度は平成2	16.0	1.6	7月9日 注意報発表（葉いもち、穂いもち）
28年	7月中下旬	36	22	61.1	14.8	6.1	6.4	2.8	7月27日 注意報発表（葉いもち、穂いもち）
29年	7月中下旬	51	12	23.5	3.6	1.5	8.8	0.0	
30年	7月中下旬	22	5	22.7	22.7	1.0	1.3	0.0	
令和元年	7月中下旬	23	13	56.5	2.0	2.0	2.0	0.3	発生地点率は高かったが、発生程度や発生株率が低かったため、予察情報の発表はしなかった。
2年	7月中下旬	23	14	60.9	4.1	1.0	2.0	2.3	7月28日 注意報発表（葉いもち、穂いもち）
3年	7月中下旬	22	13	59.1	12.7	4.6	13.0	8.6	7月7日 注意報発表（葉いもち）
4年	7月中下旬	22	7	31.8	5.5	2.5	1.1	14.0	
5年	7月中下旬	22	5	22.7	0.6	0.1	2.5	0.0	
6年	7月中下旬	22	6	27.3	0.8	0.2	6.2	0.6	
過去10年間平均		**27.4**	**12.0**	**44.0**	**8.4**	**1.6**	**5.9**	**3.0**	

（ス）水稲の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果

1 調査年月日:7月中旬頃を基準日として調査した。
2 調査場所:これまで実施してきた調査地点(畦畔・雑草地・土手等)／各担当地域。
3 調査項目等:斑点米カメムシ類の幼虫・成虫別に計数調査した。
次表のとおり。(調査地点、調査日、ｶﾒﾑｼ類別、調査場所の状況(雑草の種類、草丈などの管理状況等について分かる範囲で記載する。)
4 具体的な調査方法:捕虫網による10往復・20回振り調査。

主な斑点米カメムシ類(表中出現順)

*別和名：アカヒゲホソミドリカスミカメ

調査年月日		調査地点／種類	イネホソミドリカスミカメ*		アカスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計	参考前年(R6年)	備　考
令和			幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	頭		(雑草などの管理状況等)
7年	6月30日	川越市小中居	25	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53	2	ノビエ、エノコログサ主体　未定植水田メヒシバ主体
7年	7月3日	坂戸市横沼	34	49	4	7	0	0	1	2	0	2	0	0	1	9	109	7	その他：ｲﾈｶﾒﾑｼ3,ﾐﾅﾐｱｵｶﾒﾑｼ4,ｱｶﾋﾒﾍﾘｶﾒﾑｼ幼1,成3 アカツメクサ・セイバンモロコシ主体
7年	7月3日	毛呂山箕和田	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	1	5	5	その他：ｱｶﾋﾒﾍﾘｶﾒﾑｼ成1
7年	6月27日	嵐山町吉田	15	3	11	40	0	1	1	6	5	4	1	0	2	0	89	11	その他：ｳｽﾞﾗｶﾒﾑｼ・ﾐﾅﾐｱｵｶﾒﾑｼ各1、ホソムギ主体＋エノコログサ
7年	7月4日	嵐山町志賀	0	0	166	38	0	0	0	5	0	0	0	0	0	2	211	－	その他：ｲﾈｶﾒﾑｼ2、セイバンモロコシ主体、前年調査無し
7年	7月1日	滑川町福田	0	10	0	16	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	28	61	その他：ｱｶﾋﾒﾍﾘｶﾒﾑｼ1、メヒシバ主体
7年	7月1日	滑川町福田	0	0	0	1	0	0	1	12	0	2	0	0	0	0	16	－	ノビエ類＋メヒシバ、前年調査無し
7年	6月30日	川島町曲師	0	2	149	116	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	272	68	その他：ｸﾛｱｼﾎｿﾅｶﾞｶﾒﾑｼ類似種、ホソムギ主体
7年	6月30日	川島町上大屋敷	0	0	0	0	0	0	4	6	2	1	0	0	3	3	19	14	その他：ｱｶﾋﾒﾍﾘ成1･ﾋﾒｸﾛｶﾒﾑｼ類似種 成2幼3、ホソムギ主体
7年	7月9日	吉見町西吉見	2	23	10	14	3	0	0	1	0	0	0	0	2	2	57	69	その他：ｲﾈｶﾒﾑｼ成2・ﾌﾞﾁﾋｹﾞｶﾒﾑｼ幼2、メヒシバ
7年	6月30日	吉見町西吉見	0	4	1	8	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	16	－	耕地南側・前年調査無し・メヒシバ主体
7年	7月15日	本庄市児玉町吉田林	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	22	定点東側、ゴルフ場下　エノコログサ主体
7年	7月15日	美里町小茂田１	0	4	1	2	0	0	0	14	0	0	0	0	0	3	24	46	定点南側水路脇、メヒシバ、エノコログサ主体、その他はアカヒメヘリカメムシ
7年	7月15日	美里町小茂田２	0	31	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	21	定点北側、ムギ跡ほ場、エノコログサ、メヒシバ主体
7年	6月26日	熊谷市中曽根１	0	25	0	1	0	2	0	12	0	5	0	0	0	0	45	47	ﾌｸｵﾋﾞｺﾔｶﾞﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ付近、メヒシバ主体＋ノビエ類
7年	7月1日	熊谷市中曽根２	4	27	0	278	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	311	－	前年調査地の通殿川沿い除草済のため代替に大里中前を選定､ﾒﾋｼﾊﾞ主体
7年	7月4日	熊谷市樋春１	6	35	6	16	0	4	0	3	0	0	0	0	0	3	73	－	その他：ｲﾈｶﾒﾑｼ2･ﾅｶﾞﾑｷﾞｶｽﾐｶﾒ1。調査点追加。R7大豆定点付近、ﾉﾋﾞｴ類＋ﾒﾋｼﾊﾞ
7年	7月4日	熊谷市樋春２	4	64	9	28	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	111	－	調査点追加。上記付近の水田畦畔、メヒシバ主体。
7年	7月17日	熊谷市板井	0	9	6	21	0	0	8	5	3	0	0	0	1	3	56	－	その他：ｲﾈｶﾒﾑｼ2･ﾌﾞﾁﾋｹﾞ1･ｱｶﾋﾒﾍﾘｶﾒﾑｼ1、調査点追加。ﾀﾞｲｽﾞ定点付近、ﾒﾋｼﾊﾞ主体。
7年	7月14日	行田市前谷	66	115	40	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	244	37	畦畔、メヒシバ主体、その他(ｱｶﾋﾒﾍﾘｶﾒﾑｼ成1)
7年	7月9日	加須市麦倉	5	4	15	4	2	0	2	3	1	1	0	0	2	4	43	8	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ主体、その他(ｲﾈｶﾒﾑｼ幼1・ﾅｶﾞﾑｷﾞｶｽﾐｶﾒ成1・ﾐﾅﾐｱｵｶﾒﾑｼ幼1・ｱｶﾋﾒﾍﾘｶﾒﾑｼ成3)
7年	7月14日	加須市大越	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	61	畦畔、メヒシバ主体
7年	7月14日	加須市間口	1	10	1	13	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	27	49	畦畔、メヒシバ主体、その他(ｱｶﾋﾒﾍﾘｶﾒﾑｼ成1)
7年	7月3日	幸手市神扇	2	13	0	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	21	46	畦畔、メヒシバ・エノコログサ主体（草丈60cm）、その他はアカヒメヘリカメムシ
7年	7月15日	春日部市樋籠	0	15	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	22	28	畦畔、メヒシバ・エノコログサ主体（草丈45cm）、その他はイネカメムシ
7年	7月3日	吉川市中井	0	8	0	34	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	42	72	畦畔、メヒシバ・エノコログサ主体（草丈50cm）
合計		調査地点数：26	164	479	419	671	5	8	23	79	11	18	1	1	12	40	1,931	674	
平均		1地点あたり頭数	6.3	18.4	16.1	25.8	0.2	0.3	0.9	3.0	0.4	0.7	0.0	0.0	0.5	1.5	74.3	35.5	

過去のデータ

調査年月日	調査地点／種類	イネホソミドリカスミカメ*		アカスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計	発生地点率	備　考
平成		幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	頭	%	(調査地点のうち斑点米ｶﾒﾑｼの発生地点数)
27年 7月上中旬	18調査地点	43	135	3	12	0	0	0	11	10	2	0	0	0	9	225	77.8%	発生地点 14/18地点
	1地点当たり平均	2.4	7.5	0.2	0.7	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.5	12.5		-
28年 7月上中旬	15調査地点	8	32	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	44	73.3%	発生地点 11/15地点
	1地点当たり平均	0.5	2.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9		-
29年 7月上中旬	22調査地点	17	64	0	0	0	0	2	6	0	0	0	1	9	1	100	77.2%	発生地点 17 /22地点
	1地点当たり平均	0.8	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	4.5		平成29年7月3日に、平成29年度病害虫発生予察注意報第1号「斑点米カメムシ類（特に、アカヒゲホソミドリ
30年 7月上中旬	17調査地点	31	97	1	12	0	1	0	4	0	0	0	2	0	0	148	58.8%	発生地点 10/17地点
	1地点当たり平均	1.8	5.7	0.1	0.7	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	8.7		-
元年 7月上中旬	17調査地点	200	210	0	1	1	0	19	10	1	3	0	0	0	0	445	82.4%	発生地点 14/17地点
(令和)	1地点当たり平均	11.8	12.4	0.0	0.1	0.1	0.0	1.1	0.6	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	26.2		-
2年 7月上中旬	17調査地点	52	94	9	14	0	11	1	13	0	1	0	1	0	14	210	100.0%	発生地点 17/17地点
(令和)	1地点当たり平均	3.1	5.5	0.5	0.8	0.0	0.6	0.1	0.8	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.8	12.4		-
3年 7月上中旬	17調査地点	21	87	0	12	0	2	3	27	0	1	0	1	0	0	154	100.0%	発生地点 17/17地点
(令和)	1地点当たり平均	1.2	5.1	0.0	0.7	0.0	0.1	0.2	1.6	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	9.1		-
4年 7月上中旬	17調査地点	107	240	30	41	0	0	1	13	0	1	1	1	2	2	439	88.2%	発生地点 15/17地点
(令和)	1地点当たり平均	6.3	14.1	1.8	2.4	0.0	0.0	0.1	0.8	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	25.8		-
5年 7月上中旬	18調査地点	336	291	175	160	0	0	26	42	20	8	0	4	8	20	1,090	100.0%	発生地点 18/18地点
(令和)	1地点当たり平均	18.7	16.2	9.7	8.9	0.0	0.0	1.4	2.3	1.1	0.4	0.0	0.2	0.4	1.1	60.6		-
6年 7月上中旬	21調査地点	77	263	39	171	1	1	23	83	11	12	0	1	5	38	725	100.0%	発生地点率　21/21地点
(令和)	1地点当たり平均	3.7	12.5	1.9	8.1	0.0	0.0	1.1	4.0	0.5	0.6	0.0	0.0	0.2	1.8	34.5		
平年	1地点当たり平均	5.0	8.4	1.4	2.2	0.0	0.1	0.4	1.1	0.2	0.1	0.0	0.1	0.1	0.4	19.7	85.8%	

（セ）ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果(1 月)

病害虫調査データ

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果

令和８年１月１６日
埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しています。
令和元年度～５年度までは保毒虫率が減少傾向にあり、今年度は保毒虫率が過去10年で３番目に低くなっています。ただし、縞葉枯病抵抗性を持たない品種において感受性が特に高い時期にヒメトビウンカが多数飛来しやすい作型(コシヒカリ早植栽培、キヌヒカリ普通期栽培)の作付割合が高い地域では、保毒虫率がかなり高い地点があります。
イネ縞葉枯病は移植後から幼穂形成期までに感染します。感受性品種では、育苗箱施薬剤等を用いた感染前の予防対策を徹底してください。

１　調査方法

令和７年 10～11 月に、県内 25 か所の水田周辺でヒメトビウンカ幼虫(写真１)をサンプリング(100 頭程度／１か所)し、ELISA 法により保毒虫を判定し(写真２)、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を算出した。

写真１　ヒメトビウンカ幼虫
(体長 2mm)

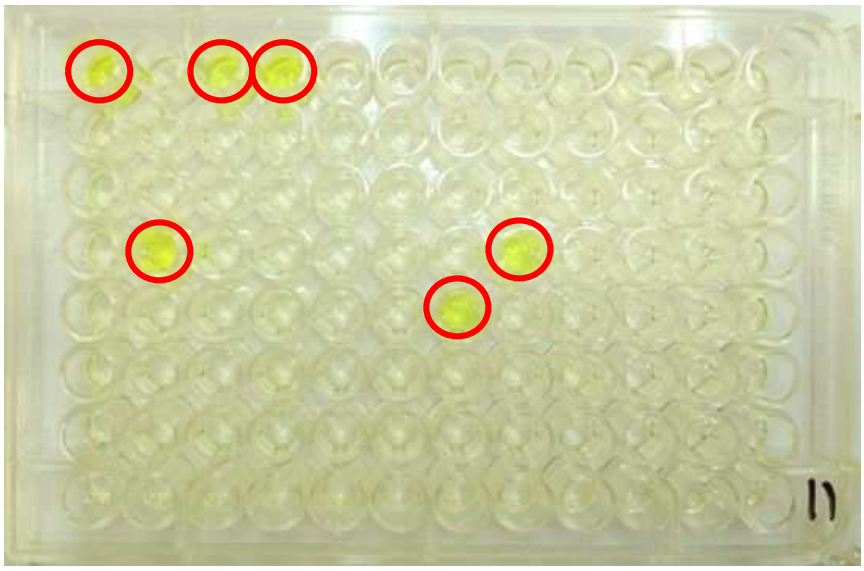


写真２　ELISA 法による保毒虫判定結果
ウイルス有り：黄色に発色(○内)、ウイルス無し：発色せず

２　調査結果の概要

縞葉枯病抵抗性品種の作付比率が縞葉枯病感受性品種の作付比率を上回った令和元年度以降、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は減少傾向にあり、令和７年度は平均で 3.0%と過去 10 年で３番目に低くなった(図)。ただし、保毒虫率 0.0%の調査地点は２か所と昨年度(７か所)より減少しており、特に５月中旬までの移植が主体の地域では全調査地点で保毒虫率が 1.0%以上となった(表)。
昨年度は移植時期による保毒虫率の差は見られなかったが、令和７年度はコシヒカリ早期栽培地域を主体に５月中旬までの移植主体の地域で保毒虫率が高い傾向が見られた。ただし、５月下旬以降の移植地域でもキヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種作付ほ場の周辺では保毒虫

率が高いこともあり、作期による統計的な有意差はなかった(表)。

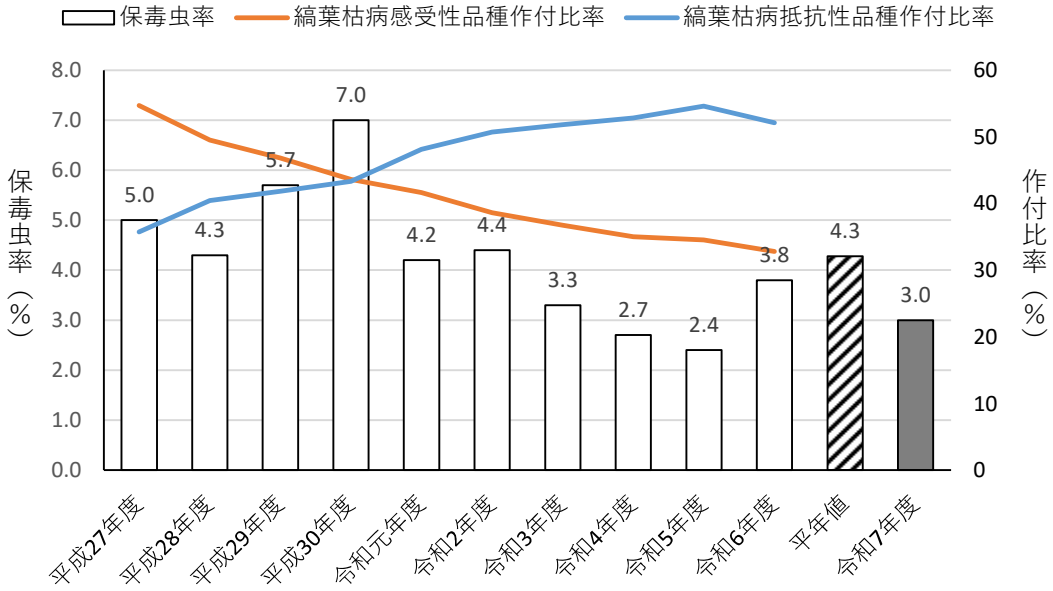


図　ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

表　ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率(令和７年度)

5月中旬までの移植地域		5月下旬以降の移植地域		
採集地点	保毒虫率(%)	採集地点	保毒虫率(%)	
さいたま市桜区昭和	5.2	坂戸市横沼	2.1	
鴻巣市屈巣	1.0	小川町高谷	2.1	
富士見市南畑	2.1	嵐山町杉山	1.0	
川越市南田島	2.1	秩父市小柱	2.1	
川島町出丸中郷	2.1	本庄市児玉町吉田林	3.1	
吉見町西吉見	16.7	美里町阿那志	2.1	
熊谷市中曽根	1.0	上里町長浜	0.0	
加須市大越	2.1	熊谷市中恩田	3.1	
加須市柏戸	1.0	熊谷市御正新田	6.3	
春日部市八丁目	3.1	行田市前谷	4.2	
幸手市神扇	4.2	行田市下池守	0.0	
杉戸町大塚	5.2	加須市下谷	3.1	
		久喜市菖蒲町台	1.0	
地域平均(12地点)	3.8	地域平均(13地点)	2.3	NS
採集地点数	25	平均保毒虫率(%)	3.0	

（ソ）　イネカメムシ越冬調査結果（１２月～３月）

病害虫発生予察情報

イネカメムシ越冬状況調査結果について

令和８年３月２６日
埼玉県病害虫防除所

イネの穂を激しく加害して不稔や斑点米を引き起こすイネカメムシについて、越冬場所と越冬量を把握するため越冬状況調査を行いました。

調査の結果、イネカメムシの越冬成虫が58地点で確認され、調査を行った101地点中の57．4％に達しており、広範囲で越冬していることが確認されました。落ち葉内や落ち葉の下、ジャノヒゲ株内で越冬成虫を確認できた割合が 60～70％と高く、ススキなどイネ科雑草株元でも半数の地点で越冬成虫が確認されました。

また、越冬密度の把握を目的として調査面積を定めて実施した調査の結果、林内や林縁の落ち葉の下では1㎡あたり 1.3～1.5 頭であったのに対し、植え込みや生垣の下の落ち葉で 10.2 頭、ジャノヒゲ株内で 9.7 頭でした。イネ科雑草の株元でも 10.6 頭に達しましたが、調査地点数が限られていたなか１地点で密度が高かった影響と考えられます。

前年に比較し越冬成虫の密度は低下しているものの、広範囲での越冬が確認されています。令和7年度と同様、広域で適切な防除を行ってください。

1. 調査時期

令和7年12月1日～令和8年3月19日

2. 調査地点

県内19市10町

さいたま市（見沼区・桜区・南区・緑区・岩槻区）、川口市、鴻巣市、川越市、富士見市、毛呂山町、東松山市、滑川町、嵐山町、川島町、吉見町、本庄市、美里町、神川町、熊谷市、深谷市、寄居町、行田市、加須市、羽生市、久喜市、蓮田市、白岡市、春日部市、越谷市、幸手市、吉川市、杉戸町、松伏町

3. 調査方法

（1）前年の多発生地や周辺の環境を考慮して予備的な調査を実施し、イネカメムシ越冬成虫を確認した場所、もしくは確認できる可能性の高い場所を選定し、以下の手法で調査を実施。

（2）林地、林床、植え込みの下等から1地点につき3か所（各０．２５～１㎡）の落ち葉を採取。採取した落ち葉内に潜入して越冬しているイネカメムシ成虫の個体数を調査。

（3）畦畔や法面などに生育しているジャノヒゲ株を対象に、30～50cm 四方の範囲をかき分けて調査し、目視により越冬成虫を採集、計数。

（4）ススキやオギ等の雑草の株元や立ち木の株元について、調査場所の状況に応じて 20～60cm 四方の範囲を調査し、目視により成虫を採集、計数。

（5）堤防や雑草地について、原則として1㎡の範囲の複数地点を対象にかき分けて調査し、目視により成虫を採集、計数

4. 結果

調査の結果、越冬成虫を確認した場所では全体として以下のような傾向が認められました。

①冬の季節風が当たりにくく、南側や西側に開けていて陽だまりになりやすい場所。
②落ち葉が堆積しており、乾燥しておらず適度な湿度が保たれている場所。
③表土が柔らかかったり、堆積物や落ち葉の腐植化が進んでいて膨軟な場所。
④厳冬期でも緑色の葉をつけているイネ科雑草の株元やジャノヒゲの株内。
⑤耕地や堤防などの開けている場所よりも、北側や東側に構造物や林がある場所。

公共施設付近サツキ植え込みの下に堆積した落ち葉を調査

水田北側の篠地下に堆積した落ち葉やジャノヒゲを調査

県施設内コノテガシワの落ち葉や腐植物下で越冬中の成虫

立ち木の株元、剥離・落下した樹皮下で越冬中の成虫

ジャノヒゲの株内で越冬中の成虫

オギの株元、新芽近くで越冬中の成虫

(1)調査の内訳

調 査 場 所	調査地点数	成虫確認地点数	同左割合(%)
落ち葉内・落ち葉の下			
林内	3	2	66.7
林縁	8	3	37.5
植え込みの下	21	14	66.7
生垣下	6	4	66.7
ジャノヒゲ共	4	2	50.0
構造物わき	8	3	37.5
その他	8	5	62.5
立ち木			
株元	12	8	66.7
ジャノヒゲ			
株内	19	13	68.4
雑草地・堤防等			
ススキ等の雑草株元	4	2	50.0
果樹カメムシ類越冬調査			
林内・林縁・植え込み下落ち葉	8	2	25.0
合計(地点数)・平均(割合)	101	58	57.4

（2）越冬成虫の密度

調 査 場 所	調査 地点数	成虫確認 地点数	同左割合 （%）	個体密度 頭/㎡
落ち葉内・落ち葉下				
　　林内または林縁 | 18 | 6 | 33.3 | 1.5 |
　　植え込み下・生垣下等 | 28 | 19 | 67.9 | 10.2 |
　　その他 | 20 | 10 | 50.0 | 1.3 |
立ち木の株元 | 12 | 8 | 66.7 | 10.0 |
ジャノヒゲ株内 | 19 | 13 | 68.4 | 9.7 |
雑草地（ススキ等のイネ科雑草）・堤防等 | 4 | 2 | 50.0 | 10.6 |
合計（地点数）・平均（割合，密度） | 101 | 58 | 57.4 | 7.2 |

※上表の落ち葉調査（林内・林縁・植え込み下）には果樹カメムシ類越冬調査８地点を含む。

（3）越冬密度の年次間比較

調査場所	令和7年度		令和6年度	
	地点数	個体密度 頭/㎡	地点数	個体密度 頭/㎡
落ち葉内・落ち葉下				
　　林内・林縁 | 18 | 1.5 | 5 | 102.3 |
　　植え込み下・生垣下等 | 28 | 10.2 | 18 | 33.2 |
　　その他 | 20 | 1.3 | 19 | 25.9 |
立ち木の株元 | 12 | 10.0 | 0 | － |
ジャノヒゲ株内 | 19 | 9.7 | 19 | 243.9 |
雑草地（ススキ等のイネ科雑草） | 4 | 10.6 | 6 | 14.5 |
水田内（刈株） | 0 | － | 10 | 0.003 |

穂を加害する成虫

不稔被害

本種による斑点米

5．イネカメムシの生態と被害

越冬した成虫が6月下旬から7月上旬にかけて早期栽培の水田やイネ科雑草に飛来します。早期栽培水田では出穂前から成虫が侵入し、交尾・産卵を行います。また、7月中下旬以降は出穂期の水田に成虫が侵入し、穂を加害します。

出穂期～乳熟期に激しく加害されると不稔となり、登熟期の加害により基部斑点米が生じ、収量および品質を著しく低下させます。

6．令和8年産水稲で注意する点

昨年に比較し越冬成虫の密度は低くなっていますが成虫確認地点率は大きく低下しておらず、広範囲で越冬しているものと考えられます。6月下旬以降水田内外を注意深く観察して侵入有無を確認するとともに、出穂期とその8～14 日後の2回、必ず防除を行ってください。とくに、周囲の水田に比較して出穂時期が早い、または遅い水田は集中的な加害を受けるリスクが高い

ため、発生状況に応じて防除回数を増やす等の対応を取ってください。
　また、集中的な加害を回避するため、地域内で出穂時期が極力揃うように作型・品種選定も十分に検討してください。

（タ）農業技術研究センター　県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9月）

a　ほ場内見取り調査(%)

(a)　5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.0	0.1	0.0	3.3	3.0	0.0	0.7	0.2	－	－	－
穂いもち	発病株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	1.6	－	－	－
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	0.3	4.0	0.0	4.5	－	－	－
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
縞葉枯病	発病株率%	0.0	4.0	1.3	0.0	4.7	22.3	1.3	5.3	49.1	－	－	－
ﾆｶﾒｲﾁｭｳ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
ｲﾁﾓﾝｼﾞｾｾﾘ	食害株率%	1.3	0.0	1.8	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	－	－	－
イネアオムシ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.0	－	－	－
コブノメイガ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.0	－	－	－
ｲﾈﾋﾒﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ｲﾈﾐｽﾞｿﾞｳﾑｼ	食害株率%	8.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
ｲﾈﾄﾞﾛｵｲﾑｼ	食害株率%	0.7	0.0	0.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

（b）　5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	1.2	0.0	0.0	0.3	－	－	－
穂いもち	発病株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.0	－	－	－
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	11.0	10.0	10.5	38.0	19.3	24.0	－	－	－
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
縞葉枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.7	0.0	0.2	－	－	－
ﾆｶﾒｲﾁｭｳ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
ｲﾁﾓﾝｼﾞｾｾﾘ	食害株率%	0.0	0.0	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	－	－	－
イネアオムシ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.1	－	－	－
コブノメイガ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.0	－	－	－
ｲﾈﾋﾒﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ	食害株率%	0.0	0.0	0.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ｲﾈﾐｽﾞｿﾞｳﾑｼ	食害株率%	0.7	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
ｲﾈﾄﾞﾛｵｲﾑｼ	食害株率%	1.3	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
クサキリ類	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.0	－	－	－

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

（c）　6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年	2025年	2024年	平年
葉いもち	発病株率%	－	－	－	0.0	0.0	3.9	0.0	0.0	6.5	－	－	－
穂いもち	発病株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	26.4
紋枯病	発病株率%	－	－	－	0.0	0.0	0.0	1.3	0.0	2.0	22.5	14.7	29.2
ばか苗病	発病株率%	－	－	－	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
縞葉枯病	発病株率%	－	－	－	0.0	0.0	1.6	1.3	3.3	19.0	1.3	3.3	24.7
ﾆｶﾒｲﾁｭｳ (第1世代幼虫)	食害株率%	－	－	－	0.0	0.0	0.0	－	－	－	－	－	－
ｲﾁﾓﾝｼﾞｾｾﾘ	食害株率%	－	－	－	0.7	0.0	0.4	7.3	5.3	8.9	0.0	0.0	0.1
イネアオムシ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.1	－	－	－
コブノメイガ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	1.5
ｲﾈﾋﾒﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ｲﾈﾐｽﾞｿﾞｳﾑｼ	食害株率%	－	－	－	0.7	0.7	3.9	－	－	－	－	－	－
ｲﾈﾄﾞﾛｵｲﾑｼ	食害株率%	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
クサキリ類	食害株率%	－	－	－	－	－	－	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

b　すくい取り調査(20回振) でのウンカ・ヨコバイ類等の捕獲数

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	11.5	0.0	11.5	31.7	14.0	8.5	22.5	67.6	100.0	340.0	440.0	438.2	−	−	−	−
ツマグロヨコバイ	3.5	0.0	3.5	5.0	7.0	1.0	8.0	15.2	94.0	186.0	280.0	184.7	−	−	−	−
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	1.5	10.0	11.5	5.5	−	−	−	−
トビイロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	−	−	−	−
ｲﾈﾎｿﾐﾄﾞﾘｶｽﾐｶﾒ			4.5	5.1			0.0	0.2			0.0	1.0	−	−	−	−

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	30.0	0.0	30.0	56.0	18.5	7.0	25.5	69.0	138.0	446.0	584.0	417.6	−	−	−	−
ツマグロヨコバイ	4.5	0.0	4.5	3.7	17.0	0.0	17.0	6.7	225.0	197.0	422.0	65.9	−	−	−	−
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	1.1	0.0	13.0	13.0	5.0	−	−	−	−
トビイロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	−	−	−	−
ｲﾈﾎｿﾐﾄﾞﾘｶｽﾐｶﾒ			3.5	6.3			0.0	0.2			0.0	0.5	−	−	−	−

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c)　6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	−	−	−	−	6.5	2.5	9.0	46.2	182.5	157.5	340.0	275.7	102.0	522.0	624.0	469.8
ツマグロヨコバイ	−	−	−	−	3.5	1.5	5.0	8.1	257.0	66.0	323.0	79.3	568.0	1,208.0	3,210.7	2,722.5
セジロウンカ	−	−	−	−	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	1.0	1.0	16.8	12.0	10.0	22.0	62.9
トビイロウンカ	−	−	−	−			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
ｲﾈﾎｿﾐﾄﾞﾘｶｽﾐｶﾒ	−	−	−	−			0.0	4.8			0.0	0.7			0.0	0.2

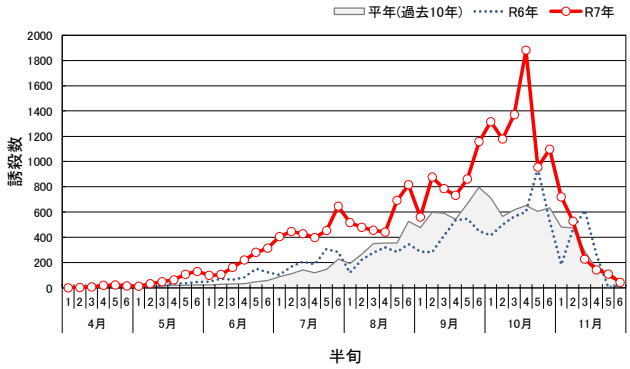
−は未調査

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

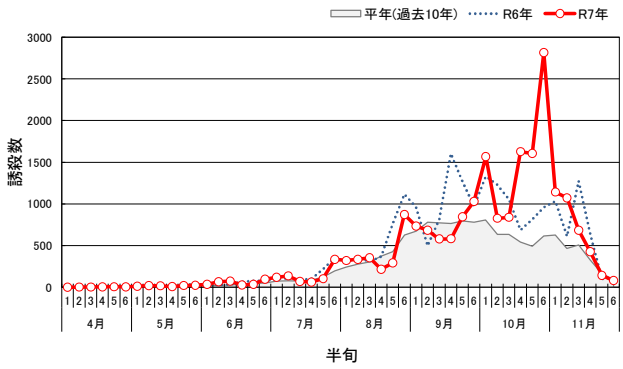
イ　野菜等

（ア）　ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査（4～11 月）

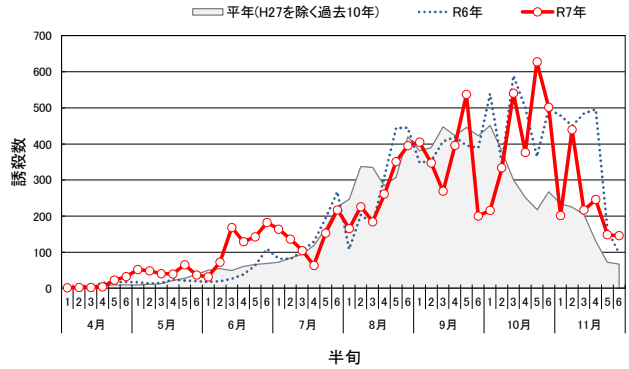
対象作物：ブロッコリー　調査地点：深谷市針ヶ谷（旧：山河）



対象作物：ダイズ・野菜　調査地点：熊谷市樋春

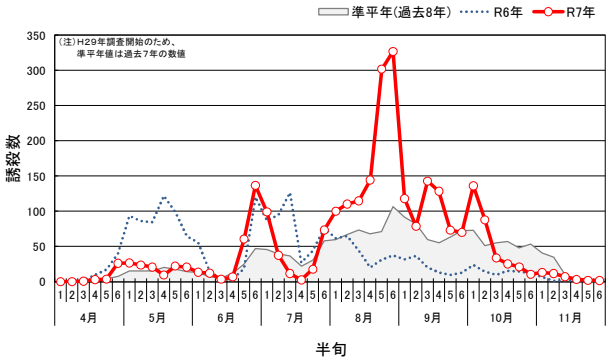


対象作物：イチゴ、ハウス花き　調査地点：久喜市菖蒲町

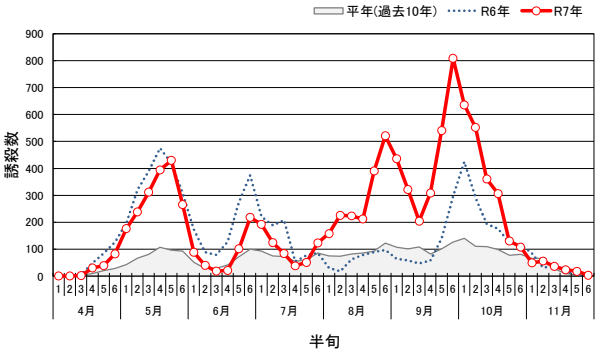


（イ）　オオタバコガのフェロモントラップ調査（4～11 月）

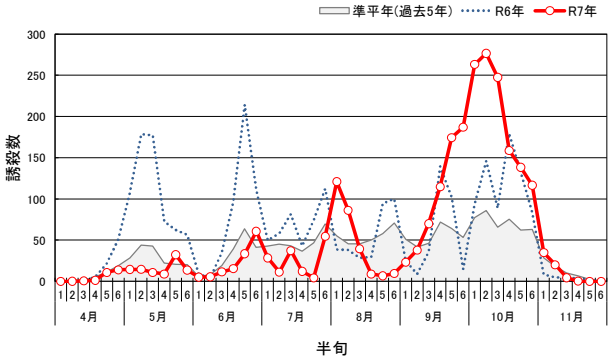
対象作物：露地ナス　調査地点：本庄市児玉町小平



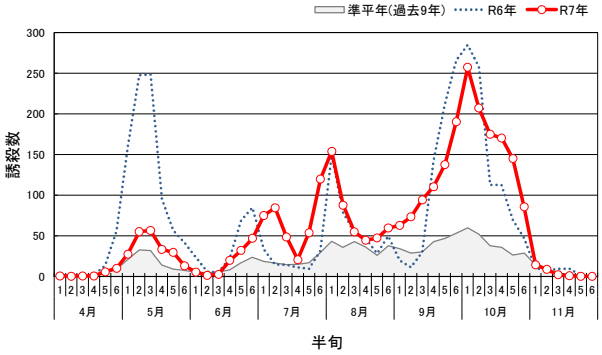
対象作物：露地野菜　調査地点：深谷市針ヶ谷（旧：山河）



対象作物：ネギ　調査地点：越谷市中島

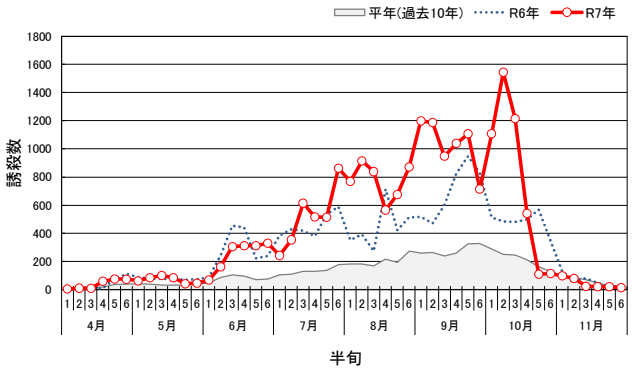


対象作物：露地ナス　調査地点：杉戸町大塚

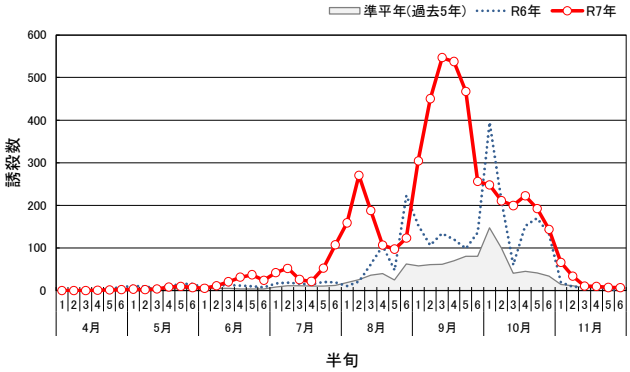


（ウ）　シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査（4～11 月）

対象作物:ネギ　調査地点:深谷市新戒



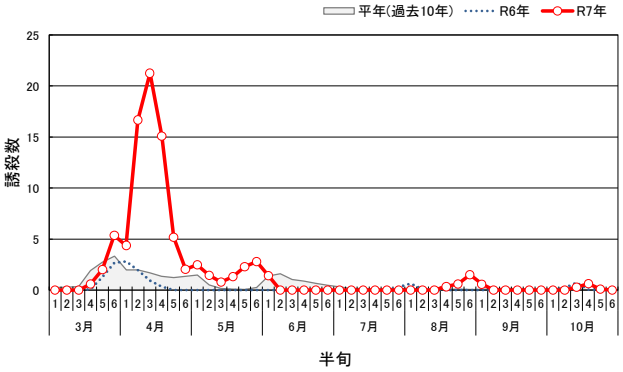
対象作物:ネギ　調査地点:杉戸町大塚



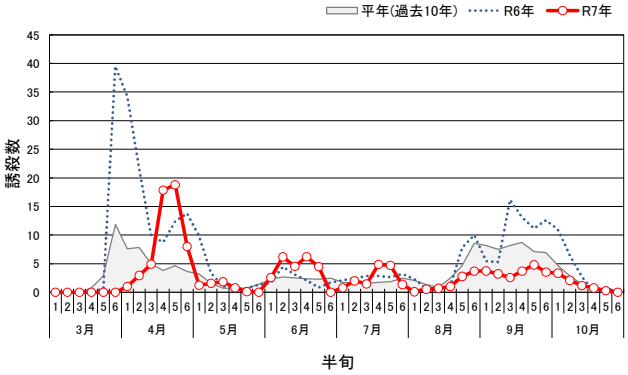
ウ　果樹

（ア）　ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査（3～10 月）

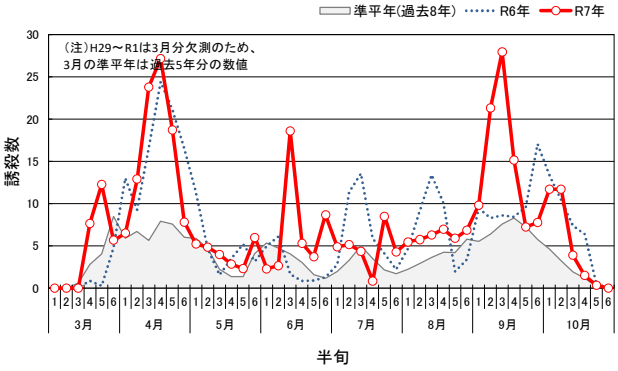
対象作物:ナシ　調査地点:鴻巣市常光



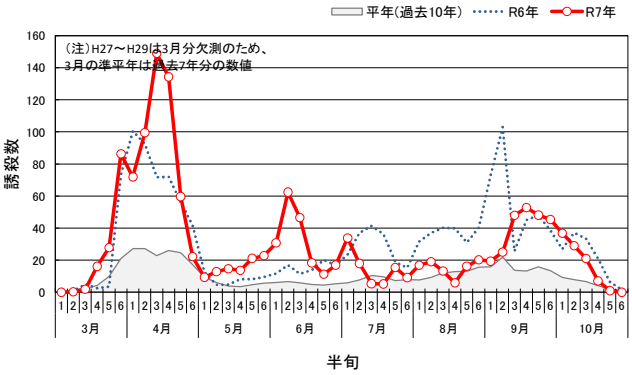
対象作物:ナシ　調査地点:上里町長浜



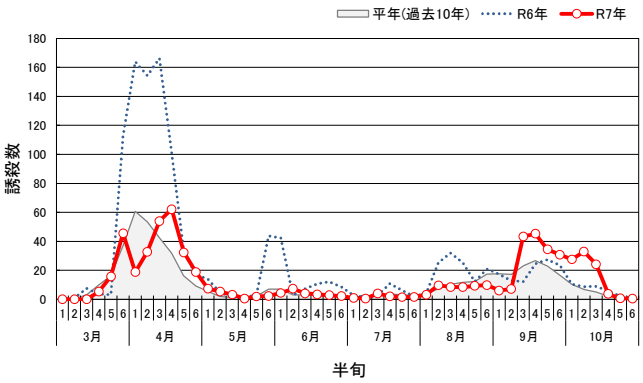
対象作物:なし　調査地点:久喜試験場



対象作物:なし　調査地点:春日部市内牧



対象作物:ナシ　調査地点:加須市鴻茎

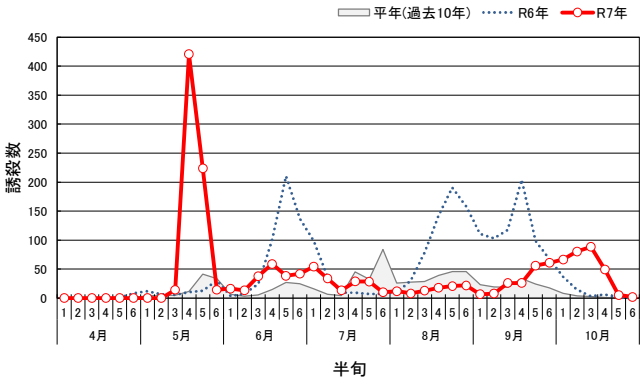


（イ）　果樹カメムシ類の予察灯調査（4～10 月）

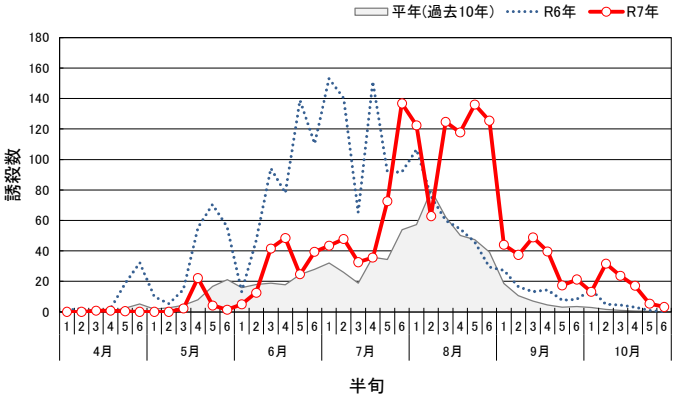
主要な果樹カメムシ（４種※合計）

※チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、アオクサカメムシ

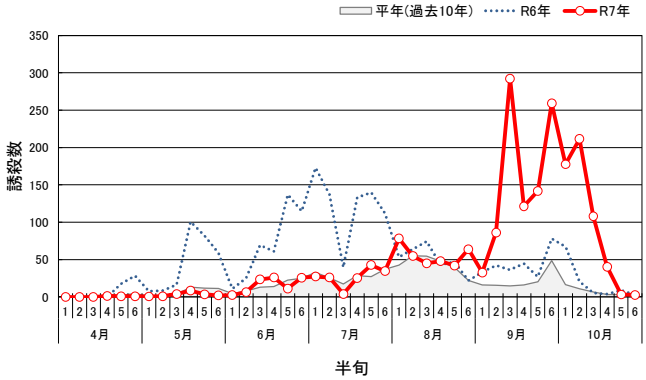
対象作物:ナシ　調査地点:上里町長浜



対象作物:なし　調査地点:春日部市内牧



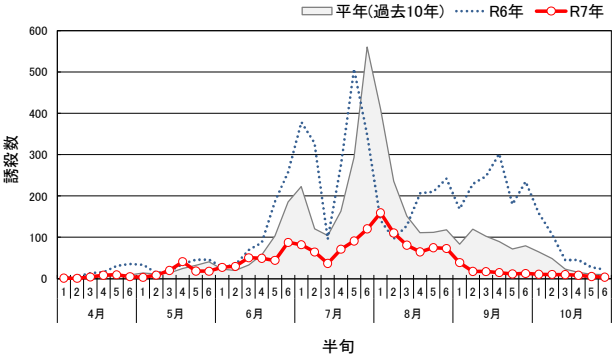
対象作物:なし　調査地点:久喜試験場



（ウ）　果樹カメムシ類のフェロモントラップ調査（4～10 月）

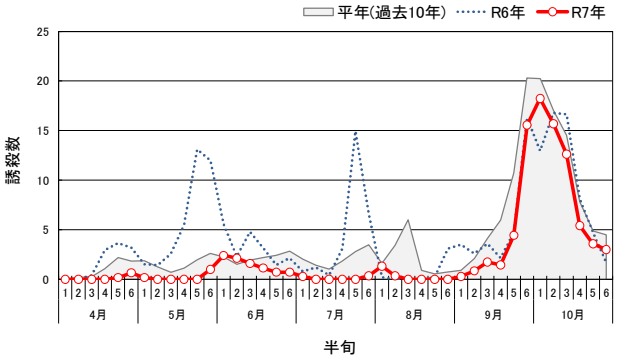
a　チャバネアオカメムシ

対象作物:ヒノキ　調査地点:寄居町鉢形



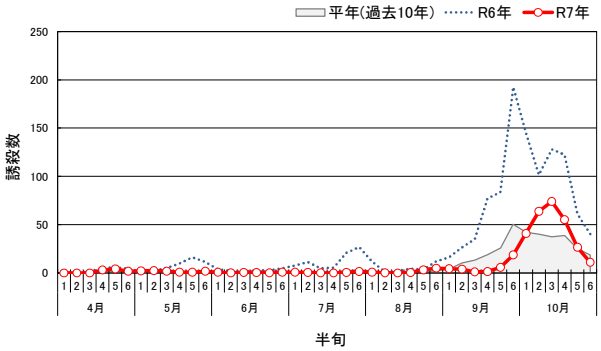
b　クサギカメムシ

対象作物:ヒノキ　調査地点:寄居町鉢形



c　ツヤアオカメムシ

対象作物:ヒノキ　調査地点:寄居町鉢形



（エ）果樹カメムシ類の越冬密度調査結果（3 月）

病害虫発生予察情報

果樹カメムシ類の越冬密度調査結果について

令和８年３月１９日
埼玉県病害虫防除所

ナシ、モモ、カンキツなどの果樹を加害する果樹カメムシ類の発生量の予測を目的として、チャバネアオカメムシなどの越冬密度調査を行いました。

調査の結果、チャバネアオカメムシ（越冬成虫）の捕獲数は１地点（計 3 ㎡）あたり 1.75 頭/3 ㎡で平年虫数（1.10 頭/3 ㎡）と比較してやや多く、確認地点率は 63%で平年確認地点率（45%）よりやや高くなりました。

果樹カメムシ類は、地域によって越冬密度が異なり、スギ・ヒノキが近くにある山間部の果樹園では多く飛来することがあります。

また、越冬密度が低い年でも気象条件やスギ・ヒノキの球果の量によって発生が多くなる場合もあります。今後、病害虫防除所が発表する情報（予察灯、フェロモントラップでの誘殺数）を参照し、果樹園等への初期飛来に注意して適切に防除してください。

１　調査時期

令和８年２月５日～２月１０日

２　調査地点

８地点（表参照）

３　調査方法

（１）雑木林の南斜面や林床から、１地点につき３か所（各１㎡）の落葉を採取。

（２）採取した落葉をビニル袋に詰めて口を閉じた状態で温室内（25℃加温）に２週間程度静置し、体色が緑化したチャバネアオカメムシ等の成虫数を調査。

４　結 果

１地点あたりの平均越冬虫数は １.75 頭で、平年（過去 10 年の平均）虫数 1.10 頭に比べ多くなっています。確認地点率は 63%で、平年地点率 45%に比べやや高くなっています。（表、図 1、図 2）

特に越冬量の多かった一昨年（１地点あたり平均越冬虫数 4.75 頭、確認地点率 75%）と比較すると少なくなっていますが、昨年との比較で虫数は大きく上回っています。

また、果樹カメムシ類の一種であるツヤアオカメムシ、イネの重要な害虫であるイネカメムシも落ち葉から確認されました。

表　果樹カメムシ類の越冬成虫数（生存個体）

単位：3㎡あたり頭数

採取地点	チャバネアオカメムシ	その他果樹カメムシ類	イネカメムシ	
			生存	死亡
東松山市松山	0	ツヤアオカメムシ1	0	0
鴻巣市関新田	9	ツヤアオカメムシ1	3	5
寄居町鉢形	0		0	0
神川町新里	0	ツヤアオカメムシ1	0	0
加須市上種足	2	ツヤアオカメムシ1	0	6
蓮田市高虫	1	ツヤアオカメムシ1	0	0
春日部市内牧	1		1	0
久喜市清久	1		0	1
計	14			
平均越冬成虫数（1地点あたり）	1.75	（過去10年の平均虫数 1.10）		
確認地点率	63%	（過去10年の平均地点率 45%）		

注）イネカメムシは果樹を加害しませんが、近年、水稲での被害が急拡大しているため参考として掲載しています。

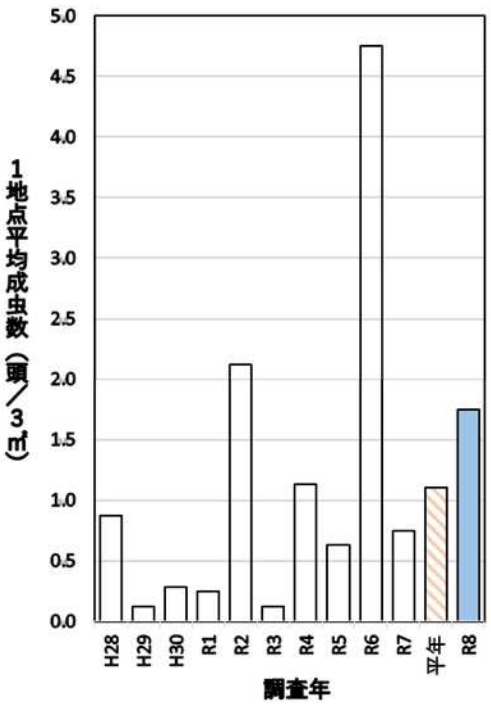


図１チャバネアオカメムシの越冬成虫数

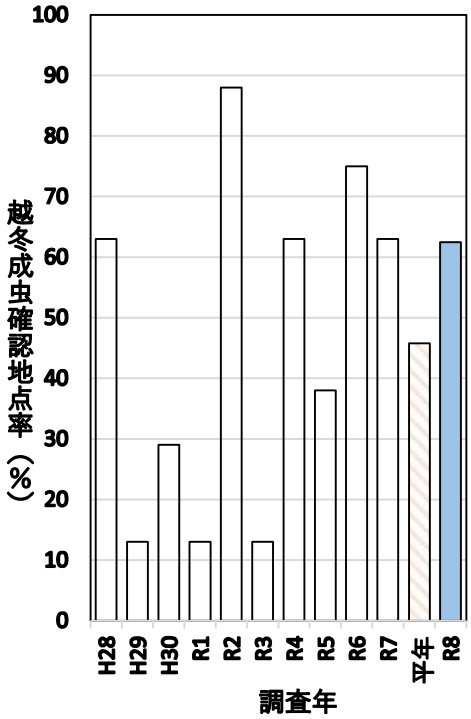


図２　越冬成虫確認地点率

○生態と被害

・チャバネアオカメムシ

体長10～12㎜で光沢のある緑色で、前翅は紫がかった茶色をしています（図３）。広食性で、４月から夏にかけてはクワ、サクラ、ヒイラギ、キリなどに、夏以降はヒノキ、スギ、キリなどに寄生します。ナシ、モモ、ウメ等多くの果樹を加害しますが、幼虫はスギやヒノキの球果を餌として発育するため、本種は果樹園では増殖しません。

図３　ﾁｬﾊﾞﾈｱｵｶﾒﾑｼの成虫（体長 10～12 ミリメートル）

・被害（果樹カメムシ類共通）

果樹園に飛来し、果実を吸汁します。加害を受けると、吸汁部がくぼんで奇形果になります。収穫直前の被害では、くぼみの程度は軽くなりますが、吸汁部周辺の果肉は白くスポンジ状となり、商品価値が損なわれます（図４）。

図４　被害を受けたナシの果実とその断面

５　その他

本調査と併せて、ツバキやユズなど常緑広葉樹の樹冠内においてクモの巣で綴られている葉の内部を調査した結果、約30%の割合でツヤアオカメムシ成虫（図５・６）の越冬が確認されていることから、今後の果樹カメムシ類の発生には注意が必要です。

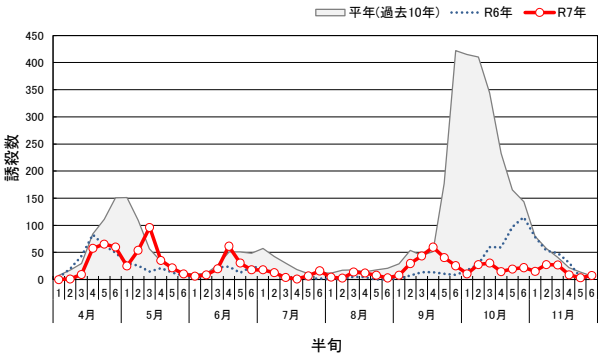
図５　ツヤアオカメムシの成虫（体長約 15 ミリメートル）

図６　クモの巣で綴られた葉の内部で確認されたツヤアオカメムシの成虫

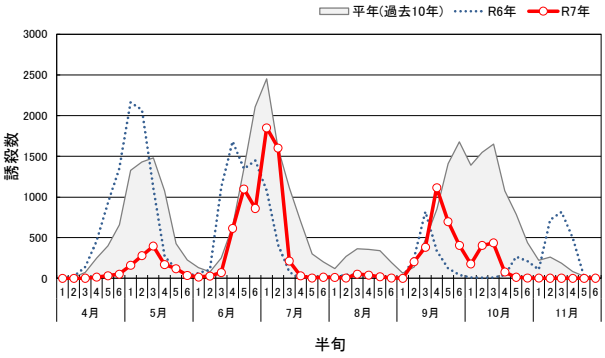
エ　茶

(ア)　チャハマキのフェロモントラップ調査（4～11 月）

対象作物:チャ　調査地点:所沢市下富

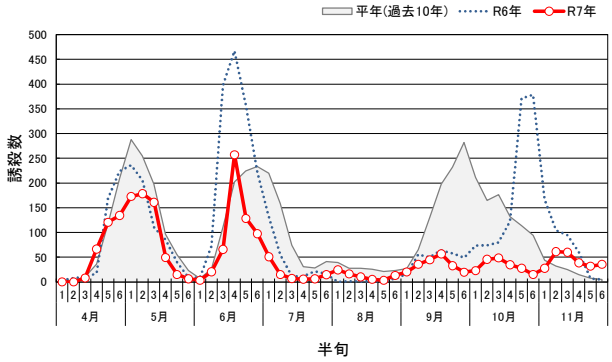


対象作物:チャ　調査地点:入間市根岸

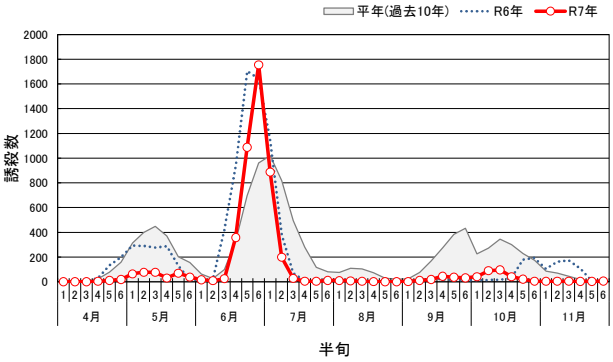


(イ)　チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査（4～11 月）

対象作物:チャ　調査地点:所沢市下富

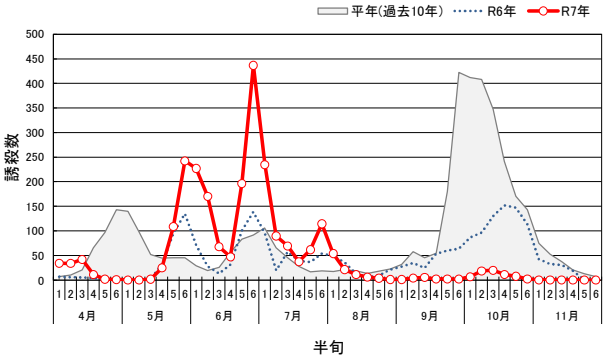


対象作物:チャ　調査地点:入間市根岸

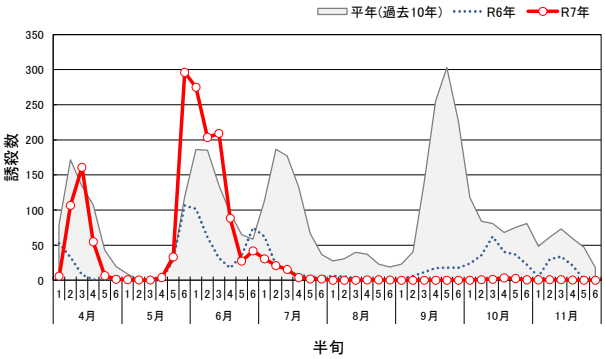


(ウ)　チャノホソガのフェロモントラップ調査（4～11 月）

対象作物:チャ　調査地点:所沢市下富

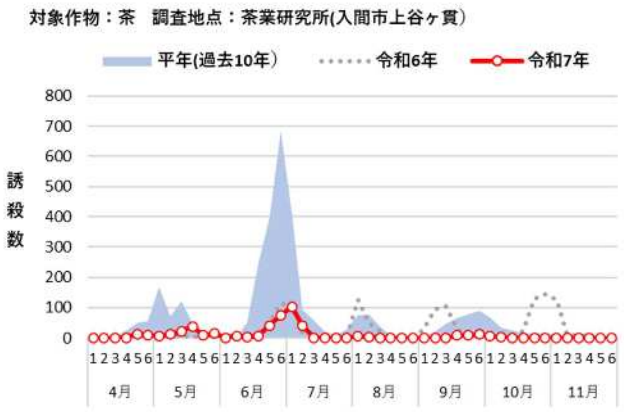


対象作物:チャ　調査地点:入間市根岸

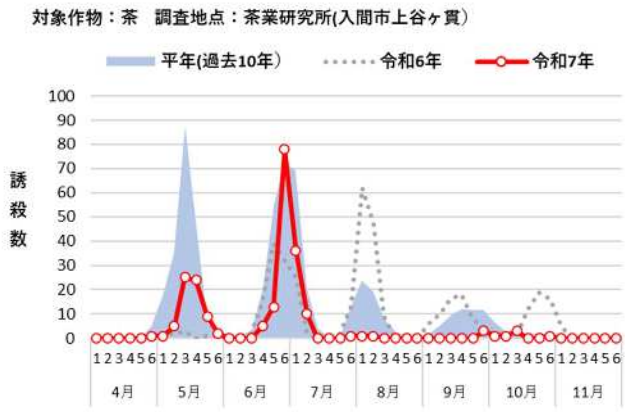


（エ） 茶業研究所のデータ

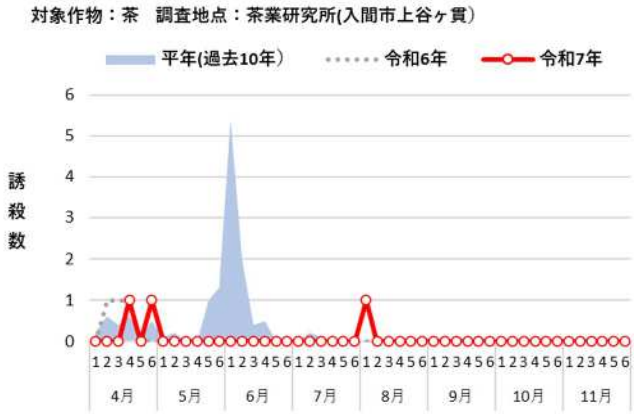
a 予察灯へのチャハマキの誘殺数



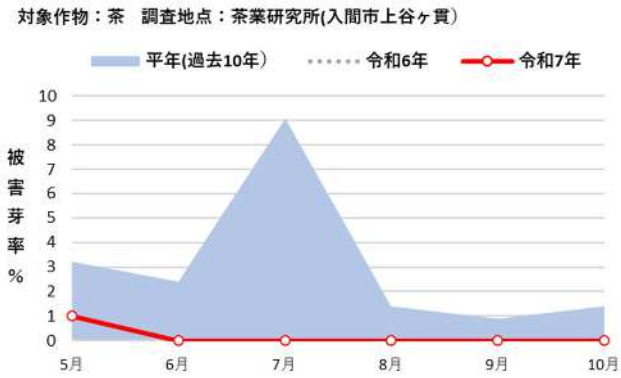
b 予察灯へのチャノコカクモンハマキの誘殺数



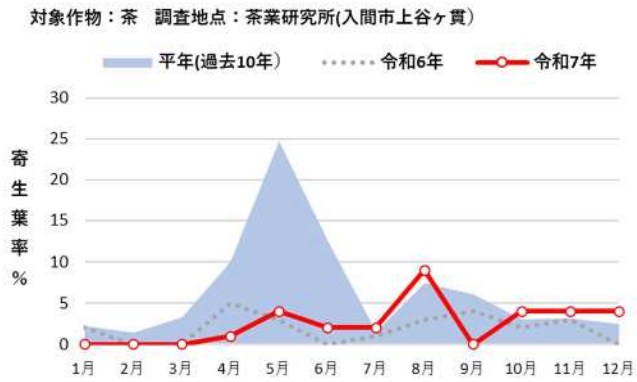
c 予察灯へのチャノホソガの誘殺数



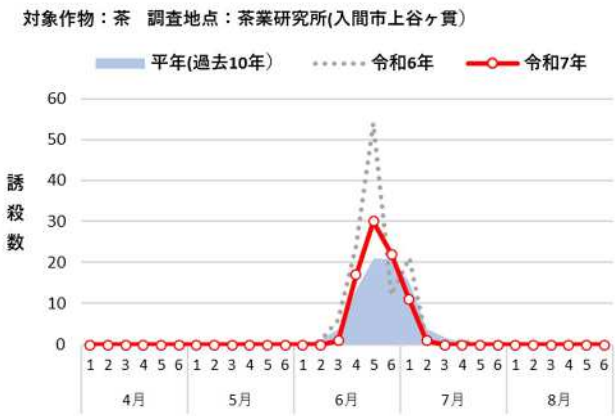
d ツマグロアオカスミカメ被害芽率



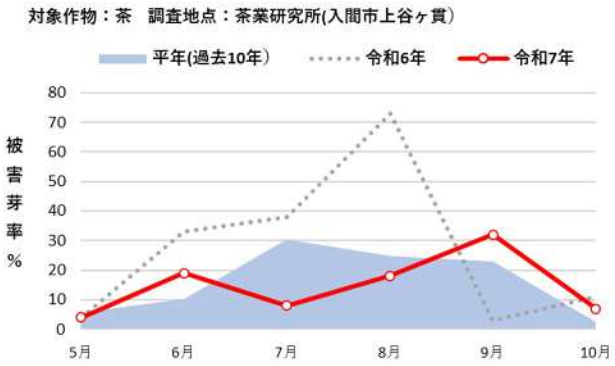
e カンザワハダニの発生推移



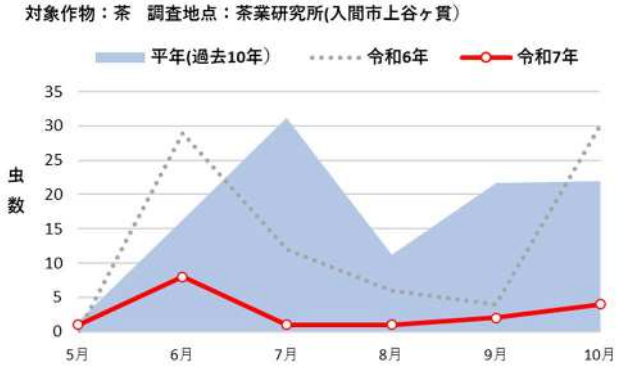
f 予察灯へのナガチャコガネ成虫の発生推移



g　チャノキイロアザミウマの発生推移



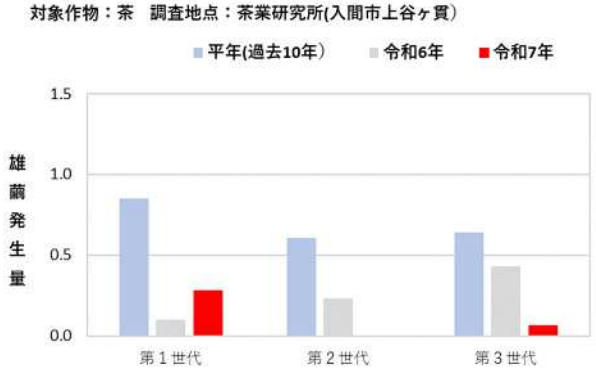
h　チャノミドリヒメヨコバイの発生推移



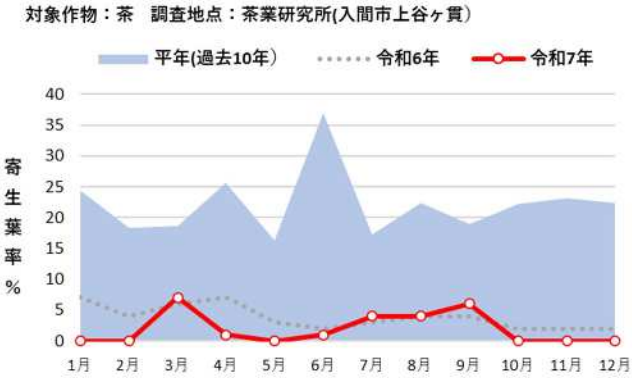
i　炭疽病の発生推移

j　輪斑病の発生推移

k　クワシロカイガラムシの発生推移
（30 株あたりの平均）



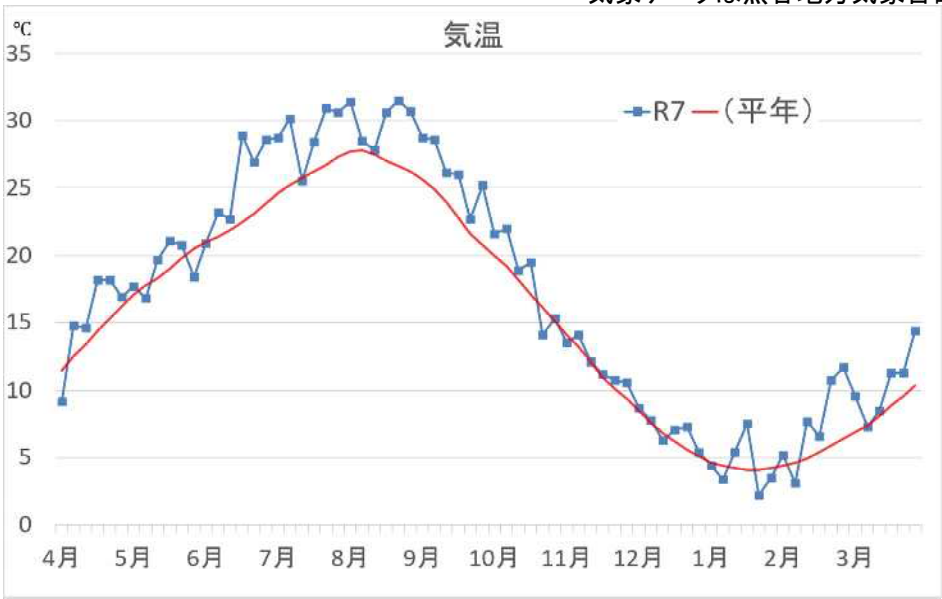
l　チャトゲコナジラミの発生推移

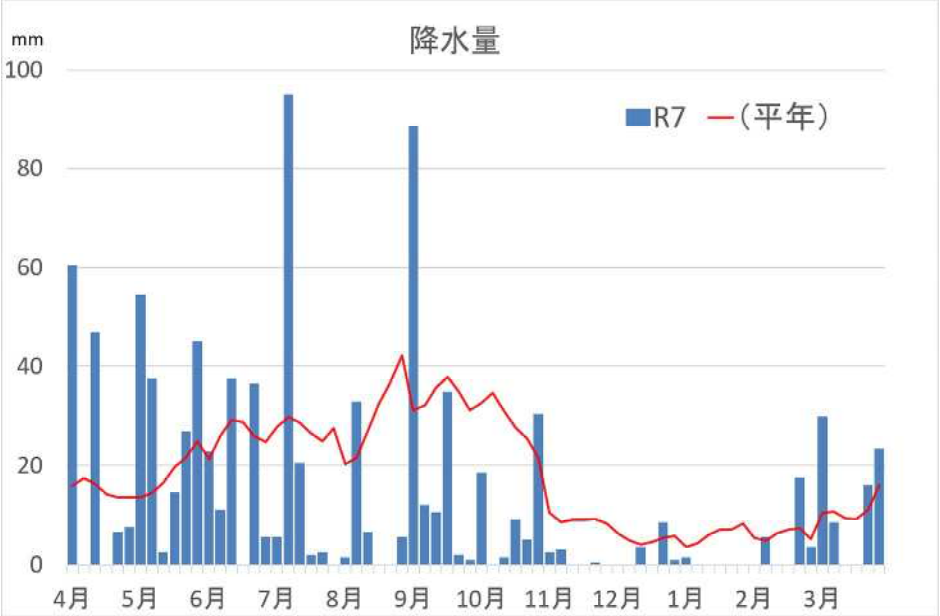


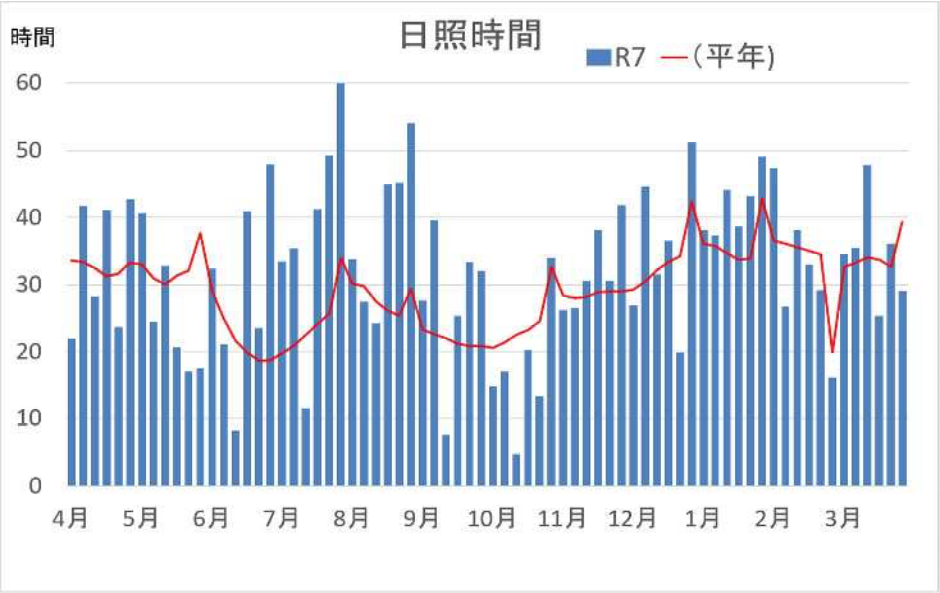
（３）その他

ア　令和７年度熊谷の気象データ

*気象データは熊谷地方気象台観測値を使用







イ　過去の病害虫発生予察警報、注意報、特殊報発表状況

（ア）　警　報

月　日	内　　容
昭和 58 年 7 月 13 日	イネ縞葉枯病
昭和 59 年 6 月 22 日	イネ縞葉枯病
平成　5 年 8 月 20 日	イネいもち病（穂いもち病）

（イ）　注意報及び特殊報

年	月 日	注　意　報	月 日	特　殊　報
昭和 54	5.29 7.10 8. 8	イネ縞葉枯病、黒すじ萎縮病 ナシのハダニ類 ダイズ、野菜のハスモンヨトウ	7.20 9.11	キュウリ黄化病、キクのサビダニ、チューリップのサビダニ イチゴ炭そ病
55	4.30 8. 1 9. 9	チャのサンカクハマキ イネいもち病（穂いもち） キュウリ斑点細菌病、べと病、ナス褐色腐敗病、トマト疫病、ニンジン黒葉枯病、ネギ黒斑病、さび病、露地野菜軟腐病		
57	8.13	イネいもち病（穂いもち）	3. 4 5.28 6. 1	イチゴ疫病、クリのヨシノコブガ、シクラメンホコリダニ イネミズゾウムシ コムギ条斑病
58	5.23 6. 3	イネミズゾウムシ イネ縞葉枯病		
59	2.16 4.13 6.14	ムギダニ ムギアカタマバエ イネ縞葉枯病	7. 2 10. 4 12.21	ニンジン斑点細菌病、タマネギ萎黄病、クワイ茎腐病 シュンギクべと病 キュウリホモプシス根腐病
60	3.19 4.17 5.10 8.26 8.31	キュウリ、ナス、トマト及びイチゴの灰色かび病 ムギアカタマバエ イネミズゾウムシ ダイコン及びハクサイウイルス病 セジロウンカ		
61	4.30 5.12 7.21 8.21	ムギアカタマバエ イネミズゾウムシ セジロウンカ ニカメイチュウ第２世代幼虫	1.17 3.28 7. 9	ニンジン菌核病、ダイコンバーティシリウム黒点病 チャ輪斑病 ミナミキイロアザミウマ
62	5. 7 5.11 6.17 8.11	イネミズゾウムシ 野菜のアブラムシ類及びウイルス病 イネ縞葉枯病 セジロウンカ	3.11	レタスビッグベイン病
63	5.10 8.19	イネミズゾウムシ イネいもち病(穂いもち)		

年	月 日	注　意　報	月 日	特　殊　報
平成元	8.25	イネ白葉枯病	8.25	イネ白葉枯病
2	5. 8 8. 1	ナシ黒星病 セジロウンカ	5. 8 9. 5	タバココナジラミ ミカンキイロアザミウマ
3	7.12 8. 7 8. 7	ナシのカメムシ類 ニカメイチュウ第２世代 セジロウンカ	6. 4	カキクダアザミウマ
4	6.19	ナシ、カンキツ類のカメムシ類	7.29 12. 8	ヨメナスジハモグリバエ カランコエのさび病(仮称)
5	3. 9 8. 5	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち､穂いもち)	3. 9	マメハモグリバエ
6	6.17	イネいもち病（葉いもち）	10. 7	トマトサビダニ
7	7.21	イネいもち病（葉いもち）		
8	8. 6	ナシのカメムシ類	8.26 9.19	シロイチモジヨトウ オオタバコガ
9	7. 7 8. 1	ネギ等のシロイチモジヨトウ ナス等のオオタバコガ	6.23 8. 1	トマト黄化えそウイルス（TSWV) カボチャ台キュウリ立枯病
10	5.14 6.11 9.30	ナシの疫病、黒星病 ナシのカメムシ類 チャのウスミドリメクラガメ		
11	9.28	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
12	9. 7	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
13	6.11 8.16	ナシのカメムシ類 イネの斑点米カメムシ類	2. 1	イチジク株枯病
14			1.23 5.13 9.17	トマトハモグリバエ アルファルファタコゾウムシ ルイスハダニ
15	8.13	イネいもち病（穂いもち）	2.10	インパチェンスえそ斑紋ウイルス（INSV）
16			6.10	IYSV（Iris yellow spot virus）によるトルコギキョウ及びユーチャリスの病害
17	6. 9 8. 4	キュウリ黄化えそ病(MYSV) 水稲のフタオビコヤガ	2.17 5.19 9.16	トマト黄化葉巻病(TYLCV) キュウリ黄化えそ病(MYSV) クワシロカイガラムシ
18	6. 2 6.27 7.24 8. 2 11.2	ナシのカメムシ類 イネいもち病（葉いもち、穂いもち） イネいもち病（葉いもち、穂いもち） フタオビコヤガ（イネアオムシ） トマト黄化葉巻病（TYLCV）	4.11 10.10 11.15 12. 5	タバココナジラミバイオタイプQ フタスジヒメハムシによるダイズ被害 ユリのイチゴセンチュウ クリバネアザミウマ(ミョウガ)
19	3.27 7.26 8.13 9.20	チャのカンザワハダニ イネいもち病（葉いもち、穂いもち） フタオビコヤガ（イネアオムシ） ハスモンヨトウ	3. 9 7.26 8.30 10. 4 11. 5	クロスジコバネアブラムシ(ミョウガ) IYSV（Iris yellow spot virus）によるネギの病害 カキノヒメヨコバイ（カキ） アワダチソウグンバイ(キク科) プラタナスグンバイ(プラタナス)

年	月 日	注　意　報	月 日	特　殊　報
20	4. 7 5. 1 6. 4 10.2	チャのカンザワハダニ ナシヒメシンクイ ナシ黒星病 チャハマキ	1.16 3.25 10.30	ツマグロヒョウモン幼虫によるパンジー等の被害 クロトンアザミウマ（モントレイイトスギ） キュウリ退緑黄化病（CCYV：仮称）
21	5. 1 7.29	ナシのナシヒメシンクイ イネいもち病(葉いもち、穂いもち)	11.12	チャのミカントゲコナジラミ
22	6.11 7. 8 8.27	ナス、スイートコーンなどのオオタバコガ フタオビコヤガ（イネアオムシ） 野菜類、花き類及びダイズのハスモンヨトウ	2. 9 3.31 7.23 12.21 12.22	ホウレンソウのハコベハナバエ ブロッコリー菌核病 ウメ輪紋ウイルス（plum pox virus） トルコギキョウ葉巻病 トマトすすかび病
23	7.20 8. 3	斑点米カメムシ類(ｱｶﾋｹﾞﾎｿﾐﾄﾞﾘｶｽﾐｶﾒ、ｱｶｽｼﾞｶｽﾐｶﾒ、ﾎｿﾊﾘｶﾒﾑｼ、ｸﾓﾍﾘｶﾒﾑｼ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)	7.26 10.26 12.19	クロメンガタスズメによるトマト・ナス等の被害 チャノキイロアザミウマによるナシへの寄生と被害 ムギ類黒節病
24	6. 5	ナシのカメムシ類（ﾁｬﾊﾞﾈｱｵｶﾒﾑｼ、ｸｻｷﾞｶﾒﾑｼ、ﾂﾔｱｵｶﾒﾑｼ）	12. 6 1.30	ネギ葉枯病菌による黄色斑紋症状の発生について スモモ斑入果病について
25	5.28 5.31 7.19 9. 2	チャノコカクモンハマキ ヒメトビウンカ（イネ縞葉枯病） 斑点米カメムシ類(ｱｶﾋｹﾞﾎｿﾐﾄﾞﾘｶｽﾐｶﾒ、ｱｶｽｼﾞｶｽﾐｶﾒ、ﾎｿﾊﾘｶﾒﾑｼ、ｸﾓﾍﾘｶﾒﾑｼ他) ヒメトビウンカ（イネ縞葉枯病、イネ黒すじ萎縮病） ツバキ、サザンカ、サカキのチャトゲコナジラミ		
26	4. 1 5.23 6.10 6.30 3.30	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） イネ縞葉枯病 ナシのカメムシ類（ﾁｬﾊﾞﾈｱｵｶﾒﾑｼ他） 斑点米カメムシ類 イネ縞葉枯病		
27	7. 9 3.28	イネいもち病 イネ縞葉枯病	10.8	ヒサカキワタフキコナジラミによるチャへの被害について
28	7.27	イネいもち病	6.28	秋冬ネギ及び春ニンジンに発生したクロバネキノコバエ科の一種（*Bradysia* sp. ）について
29	7. 3	斑点米カメムシ類（特に、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ）	7.25 7.31	ナス黒点根腐病の発生について クビアカツヤカミキリの発生について
30	8. 8 8. 8	野菜類、花き類のオオタバコガ ネギのシロイチモジヨトウ	5.30 5.30 6. 7	トビイロシワアリについて オリーブアナアキゾウムシについて トマト黄化病について

年	月 日	注　　意　　報	月 日	特　　殊　　報
平成 31 令和 元	4.23 5.10 6. 3 7. 8	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） 茶、チャハマキ ナシ、果樹カメムシ類 茶、チャハマキ	10.15	ネギハモグリバエの別系統の発生について
2	7.28 9.11	イネいもち病（葉いもち、穂いもち） ネギのシロイチモジヨトウ	7.27 8.24 10.13	ミナミアオカメムシの発生について ツマジロクサヨトウの発生について *Singapora shinshana* (Matsumura)（和名なし）（ヨコバイ科の一種）の発生について
3	7. 7 8.31	イネいもち病（葉いもち） ネギ、シロイチモジヨトウ	8. 3 10.29 10.29	サツマイモ基腐病の発生について サクセスキクイムシの発生について ヨツモンカメノコハムシの発生について
4	7.11 7.27 7.27 9. 8 9.22	ネギ、さび病 野菜類、花き類、オオタバコガ ネギ、シロイチモジヨトウ 野菜類、花き類、大豆　オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ	10.21	タバコノミハムシの発生について
5	7.11 7.31 8.15 8.15 9.25	野菜類・花き類、オオタバコガ イネ、斑点米カメムシ類 野菜類・花き類・ダイズ、オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ		
6	4.15 5.10 5.13 5.20 7. 8 7.12 8. 8 8.28	核果類（うめ、すもも等）なし、ナシヒメシンクイ 果樹全般、果樹カメムシ類 野菜類・花き類、オオタバコガ ムギ類、赤かび病 イネ斑点米カメムシ類（イネカメムシ、ホソハリカメムシ） 果樹全般、果樹カメムシ類 ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ なし、ナシヒメシンクイ	10.18 10.31	トマトキバガの誘殺について チュウゴクアミガサハゴロモの発生について
7	5.16 7. 3 7.23 7.29 8.22	ムギ類、赤かび病 イネ、イネカメムシ イネ、イネカメムシ イネ、斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ） ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ	5.19 9.5 1.19	キウイフルーツかいよう病（Psa3 系統）の発生について ナスこうがい毛かび病の発生について *Alternaria japonica* Yoshii によるブロッコリー黒すす症状の発生について

	9. 1 9.22 10. 9 10.27	ダイズ・野菜類・花き類、オオタバコガ ネギ・ダイズ・ブロッコリー・その他野菜類、シロイチモジヨトウ 植木類・チャ・果樹類・宿根アスター等、チュウゴクアミガサハゴロモ 野菜類・花き類、チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）		

７　学会・研究会等における成果の公表

（１）日本応用動物昆虫学会

・第 70 回大会（令和 8 年 3 月 28 日～30 日：熊本市）

（一般講演）**「チュウゴクアミガサハゴロモの埼玉県内における生態と発生消長について」**

侵入害虫チュウゴクアミガサハゴロモについて、埼玉県における生態及び発生消長、県内における分布及び農業被害発生地域の拡大、産卵対象として選好される植物種、秋季に産卵された越冬卵が孵化する条件、孵化幼虫の物理的防除方法の検討、等について口頭発表した。誘殺消長からは年２化性を示唆する結果が得られ、また、ツバキ科植物が特異的に産卵対象として選好されることが明らかとなった。

（２）関東東山病害虫研究会

・第 72 回研究発表会（令和 8 年 2 月 26 日：水戸市）

（一般講演）**「2025 年の埼玉県におけるイネカメムシの発生状況と防除対策の取り組み」**

近年急増して被害をもたらしているイネカメムシの 2025 年における埼玉県内の発生状況を、予察灯誘殺数および病害虫防除所定点調査水田での発生推移により説明した。とくに７月における多発生が顕著であり、水田でのすくい取りおよび予察灯での誘殺消長からも裏付けられた。一方で、県全体で取り組んだ広域防除の結果８月以降の発生が大きく抑制され、広域防除の効果、とくに７月の越冬世代成虫を対象とした防除の効果が極めて大きいことを示した。

（３）その他、病害虫に関する研究会及び検討会

・令和 7 年度「カメムシ類等難防除害虫の発生状況と防除対策に関する検討会」

（令和 8 年 3 月 12 日：東京都北区・対面および Web によるハイブリッド開催）

（一般講演）**「イネカメムシ越冬成虫の越冬場所における密度の推移」**

令和 6 年 12 月～令和 7 年 3 月に実施したイネカメムシ越冬調査のうち、約 10 地点において 4 月以降 7 月上旬にかけて約 2 週間ごとに実施した追跡調査の結果について知見を公表した。越冬成虫の密度は 4 月以降低下し、気温の上昇とともに徐々に活動を開始し、越冬場所から移出・分散していることが示唆された。また、7 月初めには越冬場所からの移出がほぼ終わるものと考えられた。

（４）学術誌等への記事執筆

・『植物防疫』第 79 巻第 10 号（2025 年 10 月）

「埼玉県におけるチュウゴクアミガサハゴロモの発生について（酒井和彦・高橋　諒）」

埼玉県内におけるチュウゴクアミガサハゴロモの発生経過、農作物被害の発生、発生消長及び発生生態、寄主植物、産卵を行う植物種および産卵習性、について寄稿。とくに本種の各生育ステージおよび被害植物の写真を数多く掲載。本種の発生生態とあわせ本種の防除、とくに農薬登録適用拡大の必要性を盛り込んで問題提起を行った。

・『農薬春秋』No.102（2026 年 2 月）

「埼玉県における斑点米カメムシ類と防除―とくに近年多発しているイネカメムシについて―（酒井和彦）」

埼玉県内における斑点米カメムシ類の発生動向について、病害虫防除所が実施している 7 月の一斉調査の結果から見える近年の種構成割合の変化と要因、今後の見通しと対策について説明。イネカメムシの発生生態と防除について、本種の越冬状況や雑草・イネ再生株での発生状況も含めて述べ、的確な薬剤防除について説明を行った。

８　肥料検査の概要

（１）　検　査

ア　月別立入検査成績

令和 年.月	立入事業場数	収去件数					備考 （立入事業場の所在地）
		生産事業場			販売事業場	計	
		知事登録	指定配合	特殊肥料			
7.　5	2	1		1		2	美里町、日高市
7.　6	3	2		3		5	神川町、さいたま市
7.　9	1			1		1	入間市
7. 10	3	1		2		3	戸田市、さいたま市、三芳町
7. 11	2	4				4	本庄市、横瀬町
計	11	8		7		15	

（注）（　）内は立入検査を実施した事業場の数。特記以外は１。

イ　普通肥料の検査

(ア)検査標品点数及び対象数量

	生産事業場		販売事業場	備考
	知事登録肥料	指定混合肥料		
検査標品点数	7	0	0	
不合格点数	0	0	0	
検査対象数量(t)	26	0	0	
保証票検査等に係る違反点数	0	0	0	

（イ）分析検査成績

a　種類別検査成績

肥 料 の 種 類	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
菌体りん酸肥料	1	0	0
米ぬか油かす及びその粉末	1	0	0
乾燥菌体肥料	3	0	0
消石灰	2	0	0
生石灰	1	0	0
計	8	0	0

b　成分別検査成績

検　査　成　分	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
窒素全量	5	0	0
りん酸全量	5	0	0
加里全量	5	0	0
石灰全量	5	0	0
アルカリ分	3	0	0
カドミウム	5	0	0
ひ素	1	0	0
	29	0	0

（ウ）重量検査

肥 料 の 種 類	検査点数（銘柄数）	不合格点数	不合格率（%）
消石灰	20（2）	0	0
計	20（2）	0	0

ウ　特殊肥料の検査

（ア）検査標品点数及び対象数量

	生産事業場	備　　考
検査標品点数	6	
不合格点数	0	
検査対象数量(t)	897	

（イ）分析検査成績

a　種類別検査成績

指　定　名	検査標品点数	不合格点数
混合特殊肥料	1	0
堆肥	6	0
計	7	0

b　成分分析調査成績

分析成分	分析成分点数	不合格点数
水分	7	0
窒素全量	7	0
りん酸全量	7	0
加里全量	7	0
石灰全量	7	0
亜鉛全量	7	0
銅全量	7	0
炭素窒素比	7	0
計	56	0

（ウ）重量検査

肥 料 の 種 類	検査点数（銘柄数）	不合格点数	不合格率（%）
堆肥	20　(2)	0	0
計	20　(2)	0	0

エ　検査結果の公表（県報登載状況）

公表年月日	検査点数（銘柄数）			不合格点数			保証票検査等に係る違反数
	普通肥料	指定混合	特殊肥料	普通肥料	指定混合	特殊肥料	
R7. 12. 9	3	0	4	0	0	0	0
R8. 3. 27	4	0	2	0	0	0	0
計	7	0	6	0	0	0	0

オ　肥料の品質の確保等に関する法律違反の処分状況

（ア）　告発　　該当なし

（イ）注意等行政指導

a　当所検査に係るもの　　該当なし

b　他の検査機関から依頼されたもの　　該当なし

c　他の検査機関へ依頼したもの　　該当なし

（２）登録及び届出

今年度の知事登録普通肥料の申請及び届出件数は 26 件（前年度比＋7）であった。新規登録件数は 2 件（前年度比－1）であり、肥料登録有効期間延長（更新）申請が 6 件（前年度比－4）であった。書替申請 0 件（前年度比±0）であり、再交付申請 0 件（前年度比±0）、変更等届出が 16 件（前年度比＋13）、登録失効届出は 0 件（前年度比－3)であった。

指定混合肥料の各届出は 2 件（前年度比－4）であった。

特殊肥料関係の各届出は計 20 件（前年度比－11）であった。

肥料販売関係の届出は、166 件（新 40・変更 106・廃止 19・その他 1）であった。

令和 8 年 3 月末現在、生産業者数は知事登録普通肥料 35 業者・指定混合肥料 15 業者・特殊肥料 360 業者であり、のべ 410 業者となっている。また、肥料の有効銘柄数は、知事登録普通肥料 75 銘柄・指定混合肥料 29 銘柄・特殊肥料 473 銘柄、合計 577 銘柄となっている。

ア　肥料の種類別新規登録件数

肥　料　の　種　類	件　数
菌体りん酸肥料	2
計	2

イ　肥料の種類別登録更新件数

肥　料　の　種　類	件　数
肉かす粉末	1
乾燥菌体肥料	4
混合有機質肥料	1
計	6

ウ　肥料の種類別失効件数

肥　料　の　種　類	件　数
	0
計	0

エ　指定混合肥料の新規届出件数

肥　料　の　種　類	件　数
土壌改良資材入り指定混合肥料	1
指定配合肥料	1
計	2

オ　特殊肥料の種類別新規届出件数

肥　料　の　種　類	件　数
堆肥	12
牛ふん	(5)
家きんふん	(3)
豚ぷん	(2)
その他	(2)
草木灰	1
計	13

カ　知事登録普通肥料の種類別有効登録件数

（令和８年３月 31 日現在）

肥料の種類	有効登録数	備考	
		Ｒ６年度	Ｒ５年度
菌体りん酸肥料	3	1	0
魚かす粉末	8	8	8
魚節煮かす	2	2	2
肉かす粉末	1	1	1
なたね油かす及びその粉末	3	3	3
ごま油かす及びその粉末	0	0	0
米ぬか油かす及びその粉末	2	2	2
ひまし油かす及びその粉末	1	1	1
豆腐かす乾燥肥料	1	1	1
加工家きんふん肥料	3	3	3
副産動植物質肥料	1	1	0
副産植物質肥料(旧)	2	2	2
乾燥菌体肥料	12	12	12
副産動物質肥料	0	0	3
混合有機質肥料	12	12	12
混合堆肥複合肥料	1	1	0
食品残さ加工肥料	1	1	1
配合肥料	2	2	2
生石灰	3	3	3
消石灰	13	13	13
炭酸カルシウム肥料	3	3	3
副産石灰肥料	1	1	1
計	75	73	73

キ　指定混合肥料の種類別有効届出数

（令和８年３月 31 日現在）

肥料の種類	届出数
指定配合肥料	23
指定化成肥料	0
特殊肥料入り指定混合肥料	0
土壌改良資材入り指定混合肥料	6
計	29

ク　特殊肥料の指定名別有効届出数

（令和８年３月 31 日現在）

指定名	届出数
粗砕石灰石	1
米ぬか	5
くず大豆及びその粉末	1
草木灰	7
骨炭粉末	1
動物の排せつ物	14
動物の排せつ物の燃焼灰	3
堆肥	420
牛ふん	(116)
家きんふん	(　5)
家きんふん（鶏）	(44)
豚ぷん	(47)
生ごみ	(47)
樹皮	(　4)
その他（馬ふん）	(　6)
その他（草木質系）	(60)
発泡消火剤製造かす	2
貝殻肥料	5
貝化石粉末	1
カルシウム肥料	7
混合特殊肥料	6
牛ふん、鶏ふん、米ぬか	(　4)
鶏ふん、米ぬか	(　2)
計	473

ケ　各種申請・届出の処理状況

申　請　・　届　出　の　種　類	件　数	備　　考
肥料登録申請	2	アのとおり
肥料登録有効期間更新申請	6	イのとおり
肥料登録事項変更届	16	代表者
肥料登録証書替交付申請	0	
肥料登録証再交付申請	0	
肥料登録失効届	0	ウのとおり
指定混合肥料生産業者届	2	土壌改良資材入り指定混合 指定配合肥料
指定混合肥料生産業者届出事項変更届	0	
指定混合肥料生産事業廃止届	0	
特殊肥料生産業者届	13	オのとおり（法人 9、個人 4）
特殊肥料生産業者届出事項変更届	7	代表者 4、住所 1、その他 2
特殊肥料生産事業廃止届	19	堆肥（法人 10、個人 9）
肥料販売業務開始届	40	法人 29、個人 11
肥料販売業務開始届出事項変更届	106	事業所 88、代表者 22、その他 3 ※　重複して届け出がされている。
肥料販売業務廃止届	14	法人 6、個人 8
その他の届出	2	肥料販売届出受理の証明
計	227	

コ　肥料生産業者及び販売業者数（令和 8 年 3 月 31 日現在）

区　　分		業 者 数	有効銘柄数等
生産業者	普通肥料生産業者	35	75
	指定混合肥料生産業者	15	29
	特殊肥料生産業者	360	473
	計	410	577
販売業者	農協系	19	（うち生産を兼ねるもの　0）
	商　系	1,296	（　〃　　381）
	計	1,315	―

（３） 調査事業等

ア 肥料生産量調査

（ア） 目的

埼玉県知事登録及び届出肥料の生産量の実態を把握する。

（イ） 調査方法

埼玉県知事登録のある普通肥料生産業者と埼玉県知事に届出をした指定混合肥料生産業者及び特殊肥料生産業者を対象として、令和７年１月から令和７年12月までの肥料生産量の調査を実施した。

対象とした肥料生産業者数及び肥料の銘柄数は以下のとおり。

業 者 の 種 類	業 者 数	対象となる肥料の銘柄数
知事登録普通肥料生産業者	34	73
知事届出指定混合肥料生産業者	14	24
特殊肥料生産業者	295	399

（ウ） 調査結果の概要

令和７年の知事登録肥料および知事届出の指定混合肥料の生産量は、14,007.1ｔ（対前年比100%）で前年とほぼ同程度であった。乾燥菌体肥料（同91%）は減少したものの、米ぬか油かす及びその粉末（同119%）の生産が若干伸びた（表1）。

特殊肥料の生産量は 73,172ｔ（同 81%）で、その特殊肥料の多くを占める堆肥72,504.1ｔ（同82%）の減少が影響している。

堆肥の種類では、数量の多かった牛ふん堆肥（同74%）が減少したのは、牛ふん堆肥を生産する酪農家の廃業が影響していると考えられる。

また、家きんふん堆肥（同68%）も数量が減少しているが、堆肥を生産する養鶏農家の廃業はなく、飼養羽数の減少が推察された。豚ぷん堆肥（同 138%）は数量を伸ばしている（表2）。

表１　埼玉県知事登録及び届出の普通肥料生産量

肥料の種類	生産量（t）			令和７年払出量（t）			調査対象登録肥料銘柄数［生産実績のあったもの］	
	令和７年（t）	令和６年（t）	対前年比（%）	国内向製品（t）	原料用（t）	その他（t）		
菌体りん酸肥料	0.1	7.1	1	0.0	0.1	0.0	1	［ 1 ］
魚かす粉末	0.0	5.5	0	0.0	0.0	0.0	8	［　］
魚節煮かす	0.0	6.1	0	0.0	0.0	0.0	2	［　］
肉かす粉末		0.0					1	［　］
食品残さ加工肥料	4.0	5.0	80	2.0	0.0	2.0	1	［ 1 ］
豆腐かすの乾燥肥料	0.0	0.0	－	0.0	0.0	0.0	1	［　］
なたね油かす及びその粉末	1,077.0	1,008.0	107	673.0	236.0	1036.0	3	［ 3 ］
米ぬか油かす及びその粉末	6,671.0	5,607.0	119	2,824.0	3,378.0	33,149.0	2	［ 2 ］
ひまし油かす及びその粉末	0.0	58.1	0	0.0	0.0	0.0	1	［　］
加工家きんふん肥料		0.0	－				3	［　］
副産動植物質肥料	0.0	0.0	－	0.0	0.0	0.0	3	［　］
乾燥菌体肥料	2,747.6	3,020.5	91	217.3	2,530.4	0.0	12	［ 6 ］
混合有機質肥料	121.0	388.0	31	93.0	28.0	0.0	12	［ 3 ］
混合堆肥複合肥料	133.0	0.0	－	0.0	133.0	0.0	1	［ 1 ］
配合肥料		2.4					2	［　］
生石灰	40.0	61.0	66	40.0	0.0	0.0	3	［ 1 ］
消石灰	2,701.0	2,970.0	91	2,480.0	0.0	221.0	13	［ 9 ］
炭酸カルシウム肥料	277.0	538.0	51	277.0	0.0	0.0	3	［ 1 ］
副産石灰肥料		282.2					1	［　］
指定混合肥料	235.4	44.5	529	198.0	37.4	0.0	24	［ 6 ］
（土壌改良資材入り）	(159.0)		－	(159.0)	(0.0)	(0.0)	(6)	([2])
（指定配合肥料）	(76.4)	(44.5)	(172)	(39.0)	(37.4)	(0.0)	(18)	([4])
計	14,007.1	14,003.4	100	6,804.2	6,342.8	34,408.0	97	［ 34 ］

注）１　普通肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。
　　２　生産量と払出量の差は在庫や昨年生産品の出荷である。
　　３　生産量・払出量は肥料の種類ごとに四捨五入しているので、種類ごとの総和が、計に合わないことがある。

表２　埼玉県知事届出の特殊肥料生産量

特殊肥料の種類	令和７年 （ｔ）	令和６年 （ｔ）	対前年比 （%）	調査対象 有効届出数 [生産実績あったもの]
米ぬか	414.6	504.6	438	5[　4]
くず大豆及びその粉末	3.2	1.8	175	1[　1]
草木灰	76.0	98.0	78	7[　2]
骨炭粉末	0.0	0.0	－	1[　0]
動物の排せつ物	137.0	1,209.2	11	12[　6]
（牛ふん）	(2.0)	(2.0)	(100)	(1[　1])
（豚ぷん）	(0.0)	(0.0)	(－)	(1[　0])
（家きんふん）	(135.0)	(1,207.2)	109	(10[　5])
動物の排せつ物の燃焼灰	5.3	15.9	33	2[　1]
（家きんふん）	(5.3)	(15.9)	(33)	(2[　1])
堆肥	72,504.1	88,269.9	82	357[156]
（樹皮堆肥）	(0.0)	(0.0)	(－)	(3[　0])
（牛ふん堆肥）	(24,338.0)	(32,914.2)	(74)	(102[50])
（豚ぷん堆肥）	(9,395.0)	(6,827.0)	(138)	(40[16])
（家きんふん堆肥）	(12,192.3)	(17,893.3)	(68)	(34[18])
（生ごみ堆肥）	(2,426.9)	(2,456)	(99)	(38[13])
（その他の堆肥）	(24,151.9)	(28,179)	(86)	(140[59])
発泡消火剤製造かす	0	0	－	0[　0]
貝化石粉末	0	0	－	1[　0]
カルシウム肥料	1.7	3.4	50	7[　2]
粗砕石灰石	0	0	－	1[　0]
混合特殊肥料	30.1	6.8	443	6[　2]
計	73,172.0	90,109.6	81.2	400[174]

注）１　特殊肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。
　　２　特殊肥料の堆肥の中の区分は、それぞれ全体の 50%を占める原料により便宜的に区分けした。
　　３　生産量は特殊肥料の種類ごとに四捨五入しているので、種類ごとの総和や対前年比の値が、見た目上、合わないことがある。

（４）畜政推進事業

畜産安全課の依頼により、特殊肥料の生産届出を促進する目的で、各家畜保健衛生所より推薦された農家の堆肥成分を分析し、結果を報告した。令和７年度は10件の分析を行った（表３）。

表３　令和７年度堆肥分析結果

農家	畜種等	分析項目／区分	窒素全量	リン酸全量	加里全量	銅全量	亜鉛全量	石灰全量	炭素窒素比	電気伝導度	水分含有量
			（%）	（%）	（%）	（mg/kg）	（mg/kg）	（%）		（dS/m）	（%）
A	乳用牛	現物当たり	1.1	1.7	1.2	16.5	111.1	2.2	9	10.3	70.2
		乾物当たり	3.6	5.8	4.2	55.2	372.4	7.2		—	—
B	豚	現物当たり	2.0	5.4	1.0	85.4	440.7	4.7	13	4.7	28.6
		乾物当たり	2.8	7.5	1.3	119.6	617.3	6.7		—	—
C	採卵鶏	現物当たり	1.7	6.1	3.1	44.3	388.3	19.6	10	8.2	22.3
		乾物当たり	2.2	7.8	4.0	57.0	499.7	25.3		—	—
D	豚	現物当たり	0.5	1.3	0.5	28.7	173.3	1.6	24	2.5	69.7
		乾物当たり	1.8	4.4	1.6	94.5	571.5	5.2		—	—
E	採卵鶏	現物当たり	2.2	5.6	3.7	33.7	401.6	18.7	9	8.7	12.3
		乾物当たり	2.5	6.4	4.2	38.5	457.8	21.4		—	—
F	採卵鶏	現物当たり	1.3	4.7	2.4	25.9	263.0	8.0	14	8.0	45.2
		乾物当たり	2.3	8.6	4.4	47.4	480.2	14.5		—	—
G	乳用牛	現物当たり	1.7	0.9	1.5	8.5	105.5	1.7	16	3.3	21.9
		乾物当たり	1.4	0.7	1.2	6.6	82.4	1.3		—	—
H	乳用牛	現物当たり	2.5	2.2	4.7	37.8	334.8	5.5	10	12.8	16.9
		乾物当たり	3.0	2.6	5.6	45.5	403.1	6.6		—	—
I	豚	現物当たり	1.6	2.6	1.9	131.7	943.9	3.4	17	5.6	37.5
		乾物当たり	2.6	4.2	3.1	210.7	1510.4	5.4		—	—
J	採卵鶏	現物当たり	2.2	8.9	5.4	61.6	563.1	17.3	12	8.9	10.0
		乾物当たり	2.4	9.9	6.1	68.5	625.9	19.2		—	—

９　飼料検査の概要

（１）　検　査

「飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律」に基づき、飼料の安全性の確保及び品質の保全と公正な飼料の取引の確保を図り、公共の安全確保と畜産物生産の安定に資するため、飼料の製造・販売事業場等に立入り、検査指導を行った。立入検査はのべ6回、収去飼料点数は 10 点であった。収去した飼料は栄養成分及び安全性等の分析検査を行った。

その結果、栄養成分検査及び安全性検査とも正常であった。

ア　月別飼料検査状況総括表

項目／年月	収去飼料件数							
	規格適合飼料		小計	非規格適合飼料			小計	合計
	配・混合飼料	動物性蛋白質飼料		配・混合飼料	動物性蛋白質飼料	単体飼料		
R7. 5				1			1	
R7. 6						2	2	
R7.10						5	5	
R7.11						2	2	
合　計				1		9	10	10

イ　立入検査状況

立入検査場所	検査対象箇所数	立入検査箇所数	収去件数	収去件数の内訳		
				配混合飼料	単体飼料	牧草類
承認配合飼料工場	0					
その他の配混合飼料工場	36	1	1	1		
単体飼料工場	89	4	4		4	
飼料添加物工場	10					
飼料中継保管施設	―					
飼料輸入業者	13					
飼料添加物輸入業者	9					
飼料販売業者	168	1	5			5
飼料添加物販売業者	28					
運送業者	―					
その他の場所	―					
計	353	6	10	1	4	5

注）１　承認配合飼料工場は、関税定率法第 13 条第 1 項に基づいて税関長の承認を受けた 配合飼料工場（混合飼料のみを製造する工場を除く）とする。
２　立入検査箇所数は、延べ（立入回数）とする。

ウ　立入検査成績

区　分	立入検査箇所数 a	指摘事項		指摘事項内容											指導件数 c／b 現地指導一箇所当たり
				法第２章関係							規格適合飼料	法第３２条表示	製造業者届	その他	計 c	
		箇所数 b	割合 b／a	成分規格	製造の基準	保存の基準	使用の基準	表示の基準	特定飼料等	製造管理者						
承認配合飼料工場																
その他の配混合飼料工場	1	0	－												0	－
単体飼料工場	4	0	－												0	－
飼料添加物工場																
飼料中継保管施設																
飼料輸入業者																
飼料添加物輸入業者																
飼料販売事業場	1	0	－												0	－
飼料添加物販売事業場																
運送業者																
その他の場所																
計	6	0	－												0	－

注）１　承認配合飼料工場は、関税定率法第 13 条第 1 項に基づいて税関長の承認を受けた配合飼料工場（混合飼料のみを製造する工場を除く）とする。
２　一般表示事項欄には、飼料等の名称、種類、製造年月、製造業者の氏名又は名称及び住所、製造事業場の名称及び所在地について指導した件数を記載する。
３　製造管理者の届出事項に関する指導件数は、製造管理者欄に記載する。
４　立入検査箇所数は、延べ（立入回数）とする。

エ　収去飼料の試験成績

区　分	収去件数	正常なもの		正常でないもの		法第２３条関係			法第３２条関係					正常でないものの処置（件数）				
		件数	%割合	件数	%割合	試験件数	正常でないもの		試験件数	正常でないもの				行政指導	指示	行政処分	告発	備考
							件数	割合%		成分量件数	原材料件数	計	割合%					
配混合飼料	1	1	100	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0					
単体飼料	4	4	100	0	0	4	0	0	4	0	0	0	0					
牧草類	5	5	100	0	0	5	0	0	5	0	0	0	0					
計	10	10	100	0	0	10	0	0	10	0	0	0	0					

注）　正常でないものの処置は、現地指導で終了したものは除く。また、当該都道府県が行ったもの（他から依頼されたものを含む）を記載し、他都道府県へ処置を依頼したものは含まない

オ　重量検査実施状況

重量検査は実施せず。

製造業種別区分	検査（A）			重量不足（B）							(B)／(A)×100		
	工場数	銘柄数	個数	工場数	配・混合飼料		動物性蛋白質飼料		単体飼料		工場数 %	銘柄数 %	個数 %
					銘柄数	個数	銘柄数	個数	銘柄数	個数			
配混合飼料工場	0	0	0										
動物性蛋白質飼料工場	0	0	0										
単体飼料工場	0	0	0										
計	0	0	0										

カ　現地指導及び行政指導内容

（ア）　当所で検査、指導したもの　　該当なし

（イ）　他所等の依頼で指導したもの　　該当なし

（ウ）　他所等へ指導を依頼したもの　　該当なし

キ　栄養成分に関する公表

公表年月日	規格適合飼料			非規格適合飼料			合計		
	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数
R7.12.9 R8.3.27	0	0	0	3 7	3 7	0	3 7	3 7	0
計	0	0	0	10	10	0	10	10	0

ク　安全性に関する公表

公表年月日	規格適合飼料			非規格適合飼料			合計		
	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数	検査件数	正常な件数	違反の件数
R7.12.9 R8.3.27	0	0	0	3 7	3 7	0	3 7	3 7	0
計	0	0	0	10	10	0	10	10	0

（２） 調査事業

飼料安全性確保強化対策事業の一環として、自家配合飼料を製造している農家を対象に製品の品質調査及び安全性検査を行った。

表１の農家を対象に、自家配合飼料３点、魚粉２点、混合発酵飼料１点の栄養成分に関する分析調査を実施した。

また、安全性検査として重金属類の分析を行ったところ、すべての飼料において適正範囲内であった。なお、水銀の検査は自家配合飼料のみである。

表１ 令和７年度自家配合飼料品質調査 調査対象農家の概要

調査農家	畜種	経営形態	飼養規模
A	鶏	養鶏	採卵鶏200羽
B	鶏	養鶏	採卵鶏700羽
C	乳牛	酪農経営	搾乳牛27頭

表２ 飼料安全性確保強化対策事業 飼料の分析結果（現物値）

調査農家	調査資料	栄養成分（%）						水分（%）
		粗蛋白	粗脂肪	ｶﾙｼｳﾑ	りん	粗繊維	粗灰分	
A	自家配合飼料	12.3	1.1	4.8	0.5	5.7	17.5	14.9
B	自家配合飼料	15.8	2.7	0.7	0.8	3.0	4.7	16.0
	発酵飼料	12.0	0.9	1.3	0.6	4.2	6.2	15.8
	魚粉1	56.7	4.2	4.6	2.8	0	16.9	13.9
	魚粉2	59.5	4.3	5.4	3.2	0	20.2	8.3
C	自家配合飼料	3.3	0.4	0.3	0.1	4.9	2.3	78.8

（表２ 続き）

調査農家	調査資料	重金属類（mg/kg）							
		ｶﾄﾞﾐｳﾑ	鉛	ひ素	水銀	亜鉛	銅	鉄	マンガン
A	自家配合飼料	0.13	0.24	1.00	0.1未満	47.6	2.8	1859.0	117.9
B	自家配合飼料	0.17	0.04	0.75	0.1未満	54.3	2.9	173.7	96.0
	発酵飼料	0.04	0.00	0.30	—	59.4	5.7	471.5	171.3
	魚粉1	1.23	0.00	5.68	—	142.1	4.0	262.7	9.4
	魚粉2	1.60	0.11	6.74	—	201.8	4.3	462.5	6.7
C	自家配合飼料	0.15	0.14	0.16	0.1未満	24.3	4.4	99.7	30.8

埼玉県のマスコット

コバトン